

早稲田大学審査学位論文
博士（スポーツ科学）

日本におけるレスリングの受容過程に関する研究
—八田一朗の理念と実践の検討を通して—

Acceptance of Wrestling in Japan:
An analysis of Ichiro Hata's Philosophy and Practice

2022年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科
長島 和幸

KAZUYUKI, Nagashima

研究指導教員： 川島 浩平 教授

論文題目

日本におけるレスリングの受容過程に関する研究

—八田一朗の理念と実践の検討を通して—

序章	1
第1節：研究の背景	1
第2節：先行研究の批判的検討	7
第1項：外来文化としてのスポーツの受容過程に関する研究の批判的検討	7
第2項：日本におけるレスリングの受容過程に関する研究の批判的検討	11
第3節：本研究の目的と課題	14
第4節：本研究の方法	16
第1項：八田一朗への着目	16
第2項：資料について	16
第5節：本研究の意義と限界	25
第1章：草創期におけるレスリングの受容過程	34
第1節：戦前のスポーツの隆盛とレスリング	35
第1項：スポーツの「花開く季節」の到来	35
第2項：早稲田大学レスリング部の創設と国際進出	38
第2節：「正統」なレスリングという理念	56
第1項：プロレスとの混同に対する批判	56
第2項：柔道との混同に対する批判	61
第3項：日本人選手のルールへの理解に対する批判	63
第4項：レスリングの統括組織に対する批判	64
第5項：「正統」なレスリングの意味	65
第3節：「正統」なレスリングの実現に向けた実践	68
第1項：カタカナ語によるレスリングの専門用語の紹介	68
第2項：欧州遠征	70
第3項：グラウンドポジションに関する技術習得	76
第4項：日本式ルールの提案	77

第5項：国際レスリング連盟への働きかけ	81
第6項：「正統」なレスリングと実践の結びつき	83
第4節：第1章のまとめ	85
第2章：戦後復興期におけるレスリングの受容過程	92
第1節：スポーツの戦後復興とレスリングの再開	93
第1項：スポーツの民主化政策	93
第2項：レスリングの再開と柔道家の転向	95
第2節：「裸の柔道」という理念	99
第1項：学校柔道の禁止に伴うレスリングへの転向に対する対応	100
第2項：「裸の柔道」の意味	101
第3節：「裸の柔道」の実現に向けた実践	104
第1項：日米交流を通じた「技術」重視のレスリングの実現	104
第2項：リーダーシップによる信頼関係の構築	116
第3項：「裸の柔道」と実践の結びつき	120
第4節：第2章のまとめ	122
第3章：確立期におけるレスリングの受容過程	134
第1節：高度経済成長と東京オリンピック体制におけるレスリング	135
第1項：東京オリンピック体制の成立	135
第2項：「根性づくり」とレスリングの活躍	136
第2節：「根性」批判と「正しい根性」という理念	142
第1項：「竹やり根性」批判	143
第2項：「負け犬根性」批判	144
第3項：「正しい根性」の意味	145
第3節：「正しい根性」に基づく「ハード・トレーニング」	147
第1項：「ライオンとにらめっこ」	147
第2項：「逆インターバル・トレーニング」	148
第3項：「目かくし」の練習	149
第4項：「左右平均論」	150

第5項：スピードの重視	151
第6項：「反復練習」	152
第7項：「寒中水泳」	152
第8項：「ハード・トレーニング」と「正しい根性」の関係	153
第4節：「正しい根性」に基づく日常生活の中でのトレーニング	155
第1項：「夢に勝て」	155
第2項：睡眠訓練	155
第3項：時間指導	157
第4項：イメージトレーニング	158
第5項：徒歩	159
第6項：「左右平均論」	159
第7項：禁酒禁煙	160
第8項：日常生活の中でのトレーニングと「正しい根性」の関係	160
第5節：第3章のまとめ	163
結章	170
第1節：日本におけるレスリングの受容過程における八田一朗の貢献と課題	171
第2節：八田一朗によるレスリングの日本的受容のズレと課題	176

序章

第1節：研究の背景

スポーツの世界大会における選手の活躍は、しばしばその時代を象徴する出来事として記憶される。ロバート・ホワイティングは、日本にとっての1964（昭和39）年に東京で開催された第18回夏季オリンピック競技大会（以下、東京大会）について、次のように述べている。

昔とは違う新しく生まれ変わった日本が、今ようやく世界に向かって紹介されたのだ。日本はもはや戦争で打ち負かされた世界の除け者の軍国主義国家ではなく、世界の経済を牽引する平和的な民主主義的国家へと見事に变身してみせたのだ。東京オリンピックによって日本が今や西洋諸国と同等であり、尊重されるべき勢力となりつつあることが示されたのだ。天皇、日の丸の旗、国家としての『君が代』（当時はまだ非公式であったが）、（自衛隊としての）日本兵の活動など、かつてアジア太平洋地域の隣国に対して日本の脅威の象徴として機能していたものが、今やまったく異なる健全な姿で表舞台に出てきたのだ（ホワイティング，2018，p. 147）

このような象徴的なイベントであるオリンピック競技大会において、日本のお家芸^{注1)}の一つと評されるのがレスリングである。戦後、日本にとっての国際的なスポーツ大会における復帰戦であった1952（昭和27）年にヘルシンキで開催された第15回夏季オリンピック競技大会において、日本に唯一の金メダルをもたらしたのはレスリングの石井庄八（以下、石井）であった。そのため、石井の活躍は、「敗戦に打ちひしがれていた日本国民に夢と勇気を与え」（福田，2012，p. 4）た。さらに、前述の1964（昭和39）年に開催された東京大会では、レスリング日本代表選手が5つの金メダルを獲得した。この結果は、レスリングに出場した国の中で最多であり、さらに日本人の参加した個人種目の中でも最多であった^{注2)}。さらにレスリングは、戦後日本が参加した全てのオリンピック競技大会でメダルを獲得し続けてきた唯一の競技種目である^{注3)}（表1）。

表 1：オリンピック競技大会のレスリングにおける日本人選手のメダル獲得数

年	開催地	金	銀	銅	計
1924	パリ	0	0	1	1
1952	ヘルシンキ	1	1	0	2
1956	メルボルン	2	1	0	3
1960	ローマ	0	1	0	1
1964	東京	5	0	1	6
1968	メキシコシティ	4	1	0	5
1972	ミュンヘン	2	2	0	4
1976	モントリオール	2	0	4	6
1984	ロサンゼルス	2	5	2	9
1988	ソウル	2	2	0	4
1992	バルセロナ	0	0	1	1
1996	アトランタ	0	0	1	1
2000	シドニー	0	1	0	1
2004	アテネ	2	1	3	6
2008	北京	2	2	2	6
2012	ロンドン	4	0	2	6
2016	リオデジャネイロ	4	3	0	7

日本レスリング協会 (online) を元に筆者が作成

こうしたレスリングにおける日本人選手の活躍は、オリンピック競技大会にとどまらない。世界選手権大会においても、1954（昭和 29）年の東京大会における笹原正三や、1962（昭和 37）年のトレド大会（アメリカ）における市口政光等、オリンピック競技大会以外でも日本人選手がレスリングで世界一に君臨してきた。ちなみに、世界選手権大会でこれまでに日本が獲得したメダルの数は、以下の通りである（表 2）。

表 2：世界選手権での日本人選手の獲得メダル数一覧

年	開催地	金	銀	銅	計	年	開催地	金	銀	銅	計
1954	東京	1	1	2	4	1991	東京	3	2	2	7
1960	イスタンブール	0	0	2	2	1992	ビエルバンヌ	1	6	1	8
1961	神奈川	0	0	1	1	1993	ラービック	2	2	1	5
1962	トレド	2	2	1	5	1994	ソフィア	6	0	1	7
1963	ソフィア	2	1	0	3	1995	アトランタ	0	1	0	1
1965	マンチェスター	2	0	2	4	1995	プラハ	0	1	0	1
1966	トレド	1	3	0	4	1995	モスクワ	3	2	1	6
1967	ニューデリー	2	0	1	3	1996	ソフィア	2	1	3	6
1967	ブカレスト	0	0	2	2	1997	クレルモン フェラン	1	1	1	3
1969	マルデルプラタ	2	0	2	4	1998	ポズナニ	2	1	0	3
1970	エドモントン	2	4	2	8	1999	ボーデン	3	1	0	4
1971	ソフィア	1	0	3	4	2000	ソフィア	2	1	2	5
1973	テヘラン	0	0	1	1	2001	ソフィア	2	0	0	2
1974	イスタンブール	1	1	0	2	2002	ハルキダ	3	1	0	4
1975	ミンスク	2	0	1	3	2003	ニューヨーク	5	0	1	6
1977	ローザンヌ	1	1	0	2	2005	ブダペスト	6	0	0	6
1978	メキシコ	1	2	0	3	2006	広州	5	1	2	8
1979	サンディエゴ	2	2	1	5	2007	バクー	4	1	0	5
1981	スコピエ	1	0	1	2	2008	東京	4	1	2	7
1981	オスロ	0	1	1	2	2009	ヘルニング	2	0	2	4
1982	エドモントン	0	1	0	1	2010	モスクワ	3	2	3	7
1983	キエフ	1	2	0	3	2011	イスタンブール	3	1	3	7
1985	ブダペスト	0	0	1	1	2012	ストラスコナ カウンティー	1	1	1	3
1986	ブダペスト	0	1	1	2	2013	ブダペスト	3	0	1	4
1987	クレルモン	0	0	3	3	2014	タシュケント	4	2	0	6

	フェラン										
1987	オスロ	0	4	3	7	2015	ラスベガス	3	1	1	5
1989	マルティニー	2	3	3	8	2016	ブダペスト	1	0	0	1
1990	東京	0	0	1	1	2017	パリ	6	1	2	9
1990	ローマ	0	0	1	1	2018	ブダペスト	5	1	4	10
1990	ルレア	4	2	1	7	2019	ヌルスルタン	3	3	3	9

日本レスリング協会 (online) を元に筆者が作成

さらに近年では、女性の競技者の台頭も著しい。個人戦において 206 連勝を記録し、国際大会で 16 連覇を成し遂げ、オリンピック競技大会では 3 連覇を果たした吉田沙保里や個人競技で女性初となるオリンピック競技大会 4 連覇 (2004 年から 2016 年までに開催された第 28~31 回夏季オリンピック競技大会) を達成した伊調馨が挙げられる。

しかし、そもそもなぜこのようにレスリングは日本において「お家芸」といわれるまでの発展を遂げたのであろうか。というのも、そもそもレスリングは、他の競技スポーツと同様に日本にとって外来文化であり、その普及・発展を実現するのは容易ではないからである。

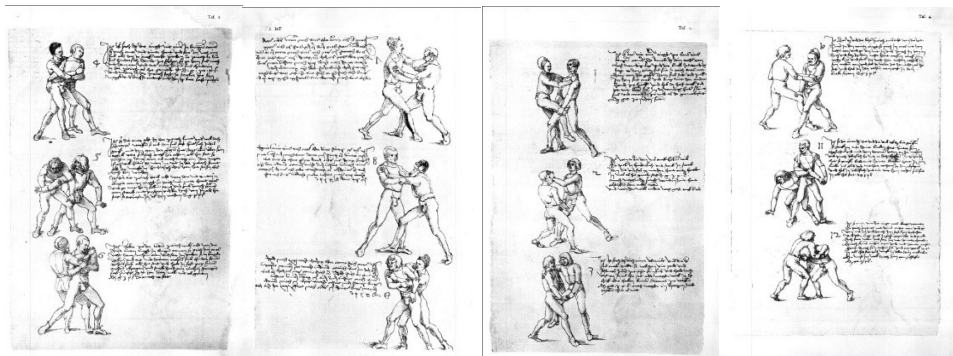
この点を明確にするために、次にレスリングの世界的伝播の概要を整理する。レスリングの起源や世界的伝播については、笹川スポーツ財団 (online) やレスリングの国際統括競技団体である世界レスリング連合 (United World Wrestling: 以下, UWW) がまとめている。

レスリングは、他の競技スポーツの多くが 19 世紀のイギリスで誕生し、「帝国主義」に基づく覇権争いの元で世界へ伝播した (Guttman, 1994) のとは異なる長い歴史を有している。スポーツとしてのレスリングの源流は、今から 5000 年程前のメソポタミアやエジプト、あるいは古代のギリシャやローマといった文明が発達した時期に遡ることができる。その根拠の 1 つが、ナイル川東岸にあるベニハッサン村の洞窟で発見された 400 種類以上のレスリングに似たような壁画である (図 1)。この壁画は紀元前 2100 年ごろのものと推察され、レスリングのほかにも重量挙げや跳躍、弓矢による狩猟、ボールを伴った運動などが描かれている。



図 1 : ベニハッサン村で発見されたレスリングの壁画 (笹川スポーツ財団, [online](#))

また、レスリングは、ヘレニズム文化圏の宗教・祭典行事、すなわち、ゼウス神を崇めるためのものとして行われていた古代のオリンピックにおいて、紀元前 708 年より五種競技（幅跳び、槍投げ、200m 競走、円盤投げ、レスリング）の一つとして実施されるようになった (UWW, [online](#))。さらに中世のヨーロッパでは、社会的エリートによって宮殿や城の中でレスリングの練習が行われ、また多くの画家や作家 (Caravaggio, Poussin, Rembrandt, Courbet, Rabelais, Rousseau, Montaigne, Locke 等) がレスリングを賞賛し褒め称えたという (UWW, [online](#))。1500 年には、初めてレスリングに関連した本が出版され、1512 年には、ドイツ人芸術家 Albrecht Dürer がカラーのレスリングの手引きを出版している (図 2)。



ミシガン州立大学図書館 ([online](#))

図 2 : Albrecht Dürer によるレスリングの手引きの一部

1894 年に国際オリンピック委員会 (International Olympic Committee : 以下, IOC) が創設されると、レスリングは 1896 年にアテネ (ギリシャ) で開催された第 1 回オリンピック競技大会における競技種目の一つとして採用された。しかし、この当時、レスリングの国際的な統括団体は設立されていなかったため、他の種目の競技者がレスリングにも参加す

るといような状況であった (UWW, online). その後も、1905年にドイツにおいてレスリングの世界選手権の開催を目的とする組織が設立されたり、1913年には International Union of Heavy Athletics (日本語名称不明) という組織が発足して競技としてのレスリングの整備が図られようとしたが、いずれの組織もウェイトリフティングやボクシングなどのスポーツ種目の複合連盟であり、レスリングの統括を行う組織の誕生には時間がかかった (UWW, online).

レスリングにおける国際的な統括団体である国際アマチュアレスリング連盟 (Fédération Internationale des Luttes Amateur : 以下, FILA) は 1921 年に創設された。FILA は、1920 年の IOC による各スポーツ種目における国際的な統括団体の設立要請を受けて創設された組織であり、フリースタイルとグレコローマンという 2 つの競技種目の普及や既存のルールの見直しを図るといった活動を展開し、IOC や各国の中央競技団体などに対してレスリングを広く知れ渡らせる役割を担った (UWW, online). 1960 年代には、レスリング競技者の資格制度の導入や各国のレスリング競技の中央競技団体への情報伝達をスムーズに行う等といった活動がみられ、FILA の活動は特に組織的統括の面で活発化がなされるようになった。そして、2014 年に FILA は UWW と名称変更し、女性のレスリング競技への参入の促進などといった観点から、レスリングの更なる普及・発展を目指して活動を行っている (UWW, online).

このように、そもそもレスリングは他のスポーツと同様に日本にとって外来文化であり、日本においてレスリングが「お家芸」といわれるまでに発展を遂げたことが当然のことではないことがわかる。さらに、後述するがレスリングの日本における受容は 1931 (昭和 6) 年の早稲田大学のレスリング部の創設に端を発している。そして表 1 の通り、オリンピック競技大会で初めて金メダルを獲得したのが 1952 年のヘルシンキ大会であることから、レスリングは約 20 年で世界の頂点にたったことになる。この間、第二次世界大戦がありレスリングの活動が十分に行えなかったことも踏まえると、異例の躍進であることは容易に推察できよう。サッカー、ホッケー、バスケットボール等のレスリングよりも早い時期に日本に受容された他の種目が未だに世界一になれていない状況がある中で、上述のようにレスリングの日本人選手がなぜ継続的に世界の舞台で活躍し、「お家芸」とまで評されるようになったのかということが自明のことではないことは理解できよう。本研究の関心は、このような外来文化であるレスリングが、どのように日本において「お家芸」と評されるまでに発展したのか、という点にある。

第2節：先行研究の批判的検討

本節では、上記の研究関心に関連する先行研究の批判的検討を通して、本研究の目的と課題を示す。

第1項：外来文化としてのスポーツの受容過程に関する研究の批判的検討

上述の本研究の関心のような日本における外来文化としてのスポーツの受容過程は、スポーツ（思想）史の重要な課題とされてきた。そこで以下では、日本における外来文化としてのスポーツの受容過程に関する先行研究を、①スポーツの日本の変容に関する先行研究と、②日本人のスポーツ観に関する先行研究に大別して整理する。

【スポーツの日本の変容に関する先行研究】

日本におけるスポーツの移入は、明治期のわが国が近代化を遂げる過程において、欧米の先進諸国から制度や文化を受容する中で行われてきた。一般的にスポーツの移入の仕方は、①軍事に伴うもの、②外国人居留地を経由するもの、③留学帰国者によるもの、④学校教育に伴うものの4つに整理できる（木下，1970）。これらの中で、日本におけるスポーツの移入は、特に④学校教育に伴うものが中心であり、国家の教育政策に規定されながら受容された（竹之下・岸野，1983；佐々木，2004；木村，2009）。

このような日本における外来文化としてのスポーツの受容過程に関する研究では、スポーツの概念やルールの検討を通じて、「日本の変容」の実態が明らかにされてきた。明治初期に「Sport」は、「戯れ」、「冗談」、「おどけ」を意味する外来語として紹介され、不要不急の真面目でない行為を意味していたが、1920年代に「競技」、「競技運動」、「体育運動」といった意味へと変化した（高津，2008）。

こうしたスポーツ概念の日本語化は、個々のスポーツ種目に関する用語でも検討されてきた^{注4}。例えば、野球に関しては、1897（明治30）年に、旧制一高で野球部に在籍した経験をもつ中馬庚が『野球』（前川文栄堂）を著したことで、*Baseball* の訳語として「野球」が一般化したことが明らかにされている（渡辺，1993，pp. 17-19）。また、サッカーに関しては、坪井玄道が『戸外遊戯法』（1885）と『改正戸外遊戯法』（1888）において、小学校や中学校、師範学校等で紹介されることを念頭に、イギリス発祥の *Association Football* を、「フットボール（蹴鞠ノ一種）」として紹介し、それ以降、「フットボール」、「蹴球」、「サッカー」という用語が使用されるようになったことが明らかにされている（山本・後藤，

2003 : 日本サッカー協会, online). また, ゴールを「城塞」という名称を用いて, 長さの単位であるヤードについては「間」という日本式の単位が用いられるなど, 競技を理解しやすくするための工夫や, ルールの簡易化などが確認できる (山本・後藤, 2003). 他にも, テニスに関しては, 1904 (明治 37) 年に, 高等師範学校の「テニス部」が「庭球部」と改称されたという (高津, 2008, p. 51). さらに, このようなスポーツに関する用語の日本語化は, 第二次世界大戦を背景として外来語の使用が禁止される中で, 「狂信的」(木下, 1970, p. 217) ともいえるほど, 盛んに行われたことが明らかにされている.

さらに, 戦後日本におけるスポーツの復興は, GHQ 占領下の民主化政策のもとで再出発した日本体育協会 (現日本スポーツ協会 : 以下, 体協) を中心に行われた. 戦後初期の体協は, 一部の選手に偏ったスポーツのあり方などを反省し, 地方の組織や活動を重視して大衆がスポーツの担い手となる「スポーツの国民大衆化」を目指していたが, 占領政策の転換と日本の国際社会復帰にも後押しされるように, 体協はオリンピックを中心とする方向性を再び強めた (関, 1997). そのため, 結局のところ発足の当初から「オリンピック参加, 高度化追求のみという意味でのオリンピック主義」(内海, 1993, p. 39) を本流としていた. このような背景には, 1960 (昭和 35) 年の日米安保条約をめぐる大衆の大規模な反対闘争が起こる中で, 池田内閣が所得倍増計画による高度経済成長政策を打ち出し, 高まる大衆のエネルギーを国家主義と結合させ, 大衆の自覚および思想形成のために利用する, という構想があった (関, 1997). その後, 1958 (昭和 33) 年に東京オリンピック招致対策委員会が発足し, 翌年に東京大会の開催が決定すると体協を中心に行政の整備が進められていく. さらに 1961 (昭和 36) 年には, 大衆へのスポーツ振興を目的としたスポーツ振興法が成立する. この法は, 国民大衆のスポーツ振興を目的としながらもスポーツをする場所や施設の確保, スポーツの指導者の配置に関して強烈的な法的拘束力を伴っておらず, 結局のところ体協への国庫補助を法制化することに主眼がおかれていた. つまり, 東京大会に向けた体協の「オリンピック主義」が制度化されていったのである (内海, 1993 : 関, 1997). このようにスポーツの日本の変容に関する先行研究では, 戦前に学校を介して移入されたスポーツが, 日本語化やルールの簡易化等の変化とともに受容され, 戦後には 1964 年の東京大会に向けた「オリンピック主義」へと収斂されていったことが明らかにされてきた.

【日本人のスポーツ観に関する研究】

前述の通り, 外来文化としてのスポーツが日本の変容を果たす中で, その担い手となった

日本人はどのような考えに基づいてスポーツを受容したのであろうか。この点を検討したのが、日本人のスポーツ観に関する研究である。そこでは、外来文化としてのスポーツの普及・発展過程において行われた「自国内的解釈」（中村，1995，p.1）の内実が検討されてきた。具体的には、明治期に移入された外来文化としてのスポーツを「武士道精神」に基づいて受容した結果、日本人のスポーツ観には「精神主義」、「勝利主義」、「自虐主義」、「修養主義」、「娯楽性・自然性の欠如」、「自己喪失」といった特徴がみられることが指摘されている（岸野，1968：菅原，1976：中村，1978）。また、イギリスのスポーツ教育^{注5}の理念を背景に、スポーツを価値あるものとして認識し奨励する一方で、富国強兵政策が掲げられた時代を反映した「ナショナリズム的スポーツ観」（木下，1970，p. 105）や、「勝利至上主義的な武士的スポーツ観」（木下，1970，p. 119），さらにはスポーツを見る者が勝敗や野次による紛争によって生じる一時的な興奮に身を任せることばかり求め、スポーツを自ら行おうとするまでに至らない「後進国的スポーツ観」（木下，1970，p. 119）などの特質を有するスポーツ観を形成した。

また、こうした日本人のスポーツ観を示す特徴や特質について、より具体的な対象の分析を通じた検証が試みられている。明治期の日本人のスポーツ観に関して、秦（2001，2002）は、明治期における高等教育機関を中心とする学生スポーツに対し多大な影響を与えた安部磯雄のスポーツ観が「武士道」という日本の精神と「健康・スポーツ観」で構成されていることを明らかにしている。また、秦（2006）は、安部と同時代に、高等教育機関において特に旧制高校の学生たちに影響を与えた新渡戸稲造の「武士道」観が、明治期以降の「スポーツ観」の生成にも多大な影響を与えた可能性を示唆している。昭和初期の日本人のスポーツ観に関して、小野瀬（2001）は、スポーツの捉え方の差異をめぐり、教育的価値からスポーツを捉えようとする教育主義と、娯乐的価値からスポーツを捉えようとする娯楽主義という2つの立場によるスポーツの本質をめぐる論争の分析を通して、教育主義と娯楽主義の対立の中で教育主義の論理の中に「武士道精神」があることを明らかにしている。また、小野瀬（2002）は、日本的スポーツ観に関する新たな研究視角を模索する中で、1911（大正元）年に展開した野球害毒論争^{注6}に着目し、「野球イデオロギーにおいて、娯楽性が重要な役割を果たした」（小野瀬，2002，p.62）ことを指摘している。戦後から1950年代における日本人のスポーツ観に関して、塩見（2010）は、「観る」スポーツが人々から一定の人気を得ていたことから、体協を中心にオリンピック競技大会での活躍を目指す戦前への回帰とも形容される状況の一方で、スポーツが娯楽として人々の間に広まりつつあったと

もいえる指摘している（塩見，2010，p. 83）．このような娯楽としてのスポーツの受容という指摘は，他にも散見される．例えば，野球についてみても，高津（1994）は1920年代後半から1930年代半ばに甲子園球場や神宮球場といった大型の野球場が建設されはじめ，野球を観戦する人々の娯楽としての需要に沿って野球が当時の日本社会に受け入れられていたことを示唆している．また，玉置（2018）は1944（昭和19）年から1945（昭和20）年にかけてプロ野球のオープン戦が実施された背景に，観戦を希望する観客からの期待に応えるという関係者の意図があったことを明らかにしており，戦時下におけるスポーツの一側面として，娯楽としてのスポーツの実態が示されている．しかし，結果的に1960年代の東京大会に向けた体制整備の中で精神主義が主流となっていく．1960年代における日本人のスポーツ観に関しては，岡部ほか（2012）が，日本的なスポーツ観の特徴としての「精神主義」と類似する概念である「根性」の意味の分析を通して，東京大会を背景に競技者の精神的基調として養成及び強化の対象とされ，勝利という目標達成のために精神を集中し，困難に屈せず継続する強固な意志を意味する概念となったことを明らかにしている⁷⁾．

このように，日本人のスポーツ観に関する先行研究では，明治，昭和初期，戦後から1950年代，1960年代という時代区分に基づいた検討が行われていた．そして，戦時下，戦後間もない時期に娯楽主義というスポーツ観の存在が指摘されてきたものの，日本人のスポーツ観の主流は武士道精神を起源とする「精神主義」であることが示されてきた．

【日本におけるスポーツの受容過程に関する研究課題】

日本におけるスポーツの受容過程に関する先行研究を整理すると，まず，スポーツの日本の変容に関する先行研究では，当該スポーツに関する用語の日本語化やルールの特簡化が日本の変容の一つの基準として示され，またその要因として，時代状況に影響を受けつつ，スポーツが学校を介して受容された点であることが確認された．次に，日本人のスポーツ観に関する先行研究では，そのような日本におけるスポーツの受容の一端を支えたのが，精神主義というスポーツ観であることが明らかにされてきた．つまり，日本におけるスポーツの受容の特徴の一つとしては，スポーツが学校経由で移入したことで，教育の観点から，スポーツに関する用語の日本語化やルールの特簡化がなされ，また精神主義と結びついて普及していった点であると考えられる．しかし，日本において受容されたスポーツの全てが同様の形式，形態で移入されたわけではない．それにも関わらず，日本におけるスポーツの受容

過程に関する先行研究では、日本の変容を遂げることなく、普及および発展を果たしたスポーツが、どのようなスポーツ観に基づいて受容されたのか、という点についての検討は十分には行われてこなかった。この点について木下（1970）は、「文明開化にともなってすべての欧米スポーツがわが国へ導入されたわけではない」（木下，1970，p. 24）と述べ、多様なスポーツの受容過程の可能性を示唆している。さらに、日本人のスポーツ観に関する研究においても、小野瀬（2001）が日本人のスポーツ観に関する研究においては「同時代的差異や歴史的变化といった異質性に対する視点」（小野瀬，2001，p. 61）が欠如していることを指摘している。ここで言う「同時代的差異」とは、先述した、日本人のスポーツ観に関する先行研究の批判的検討から導き出された日本人のスポーツ観の多様性の解明という研究課題を意味している。日本人のスポーツ観に関する研究では、「日本人のスポーツ観に一貫して存続しつづけている特徴というべき要素を抽出」（川辺，1981，p. 154）するという関心に基づいて日本人のスポーツ観の等質的部分が検討されてきた。しかし、このような方向性は、特定のスポーツ観を日本人全体のスポーツ観として理解してしまう危険性を孕んでいることから、異質性という視点から日本人のスポーツ観を検討することが必要である。

つまり、日本におけるスポーツの受容過程に関する研究の課題は、日本の変容を遂げることなく展開したスポーツが、どのようなスポーツ観に基づいて受容されたのか、という点を具体的に検討することである。

第2項：日本におけるレスリングの受容過程に関する研究の批判的検討

次に、日本におけるレスリングの受容過程に関する先行研究を検討する。日本におけるレスリングの受容過程に関する先行研究としては、日本レスリング協会 80 年史編纂委員会（2012）や木下（1970）の通史と戦後の日本におけるレスリングの受容過程を検討した塩見（2008，2010）に大別できる^{注8）}。そこで以下では、これらの先行研究を元に日本におけるレスリングの受容過程を概観した上で塩見（2008，2010）を検討する。

本章の冒頭で述べたような本研究の関心、ならびに先行研究が示してきた通史に関する知見を踏まえると、日本におけるレスリングの受容過程は、「草創期」（1930年代から終戦まで）、「復興期」（終戦から1950年代）、「発展期」（1960年代）という三期に大別できる。それぞれの時期の特徴をまとめると、以下の通りである。

「草創期」（1930年代から終戦まで）の日本におけるレスリングの担い手は、大学生や各大学のレスリング部出身者であった。彼らは、オリンピック競技大会等の世界大会への出場

を果たしたが、その一方で「柔道家が転向すればできるスポーツという安易な気持ちが支配的だった」（木下，1970，p. 186）という指摘や、勝敗を競うよりも観客へ技を披露することに重きが置かれる所謂プロレスとの区別が曖昧な見方が少なからずあったという指摘（塩見，2008）から示唆されるように、レスリングが担い手にとっても大衆にとっても一つのスポーツとして認識されるまでには至らなかった。そして、第二次世界大戦が始まると、他のスポーツと同様に、レスリングの強化や普及に関する活動が制限される閉塞的な状況が終戦まで続いた。

「戦後復興期」（終戦から 1950 年代）の日本におけるレスリングは、アマチュアスポーツとしての競技力向上による高度化と、メディアを介した娯楽としての大衆化という二つの特徴を有していた。前者に関しては、日本国内の各大学にレスリング部が発足して対抗戦等が行われる中で、日本におけるレスリングの競技力向上を目的に 1950 年から 1951 年において日米対抗戦のような国際試合も敢行された。このような国際試合の開催等の積極的な競技力向上に向けた戦略は、1952 年のヘルシンキ大会、1956 年のメルボルンで開催された第 16 回夏季オリンピック競技大会と連続して優勝者を輩出するという結果に結びついた。そのため、レスリングという「歴史のないスポーツが国際水準をめざすには、外国の胸を借りねばならぬことを示した典型」（木下，1970，p. 187）と評価されている。一方、後者のメディアを介した娯楽としての大衆化という点に関しては、日米対抗戦の開催がレスリングの競技力向上だけでなく、普及という点も意図されていた点が挙げられる。具体的には、朝日新聞や読売新聞といった新聞社の後援のもとに、東京以外の会場でも実施され、広く人々の耳目を集める状況が生まれていたことから大衆化へと結びつく契機となったと評価されている（塩見，2010）。

最後に、「確立期」（1960 年代）の日本におけるレスリングは、1960 年のローマで開催された第 17 回夏季オリンピック競技大会（以下、ローマ大会）での惨敗を契機に、1964 年の東京大会に向けた立て直しが行われた。その結果、金メダルを 5 個獲得し、その後の世界大会でも継続して活躍したことで、名実共にレスリングが日本の「お家芸」と言われるに至った。

このように、日本におけるレスリングの受容過程を通史的に検討した先行研究では、それぞれの時代について、社会状況や当事者の考え方に触れながらも基本的にはオリンピック競技大会等の世界大会での日本人選手の活躍の記録を中心に描かれてきたが、出来事の時系列での整理に留まっており、さらに外来文化としてのレスリングの受容という視点に自

覚的でない。他方で、日本の戦後復興期におけるレスリングの受容過程を検討した塩見（2010）は、大衆化という視点から戦後間もない時期に開催されたレスリングの国際試合を検討しているが、特定の時期の検討に留まっており受容過程の解明には至っていない。さらに、「日本におけるスポーツの受容過程」に関する先行研究の枠組みを踏襲していないことから、受容の担い手のスポーツ観に関する検討が行われていない。

第3節：本研究の目的と課題

以上の先行研究の批判的検討を踏まえ、本研究は、日本におけるレスリングの受容過程を明らかにすることを目的とする。前述の通り、「日本におけるスポーツの受容過程」に関する先行研究では、教育の観点から、スポーツに関する用語の日本語化や、ルールの特易化がなされ、また精神主義と結びついたりするものとは異なつた、スポーツの検討が求められている。そして、「日本におけるレスリングの受容過程」に関する先行研究で示されている通り、レスリングは、他のスポーツと同様に大学という（高等）教育機関経由で導入こそなされているが、レスリングに関する用語の日本語化や、ルールの特易化といった形跡が見当たらない。さらには精神主義といった教育的な意味付けがなされた経緯もない。

そのため、本研究の枠組みである「日本におけるスポーツの受容過程」に関する研究課題に対して、適切な検討対象であるといえよう。そのうえで、「日本におけるスポーツの受容過程」に関する研究の枠組みを参考に、以下の2つの課題を設定した。

1点目は、通時的な検討である。「日本におけるレスリングの受容過程」に関する先行研究は、特定の時代の検討に留まっておき長期的な受容過程が明らかになっていない。そこで本研究では、本研究の関心、ならびに「日本におけるレスリングの受容過程」に関する先行研究から設定された三期の区分を、各時期間の連続性について記述することでレスリングの受容過程全体を捉える。その際、「人物」という視点から検討することが有効であると考ええる。例えば、高嶋（2020）は、東アジアにおけるスポーツ史に関して、日本と中国それぞれを対象とする研究成果は蓄積されているものの、日中両国を視野に入れた研究の進展が十分になされていないという課題を示し、日本から満州国に渡つてスポーツ活動に従事した岡部平太という人物に着目することで東アジアという地域のスポーツ史の一端が垣間見える、と述べている。つまり、特定の人物から見た歴史的事実を検討することで、個々の歴史的事実を結び付けたひとつの解釈を示すことが可能になる、ということである。

2点目は、受容の担い手となつた人物のスポーツ観を描くことである。具体的には、日本におけるレスリングの受容の担い手となつた人物の理念や実践の検討を通して^{注9)}、「日本におけるスポーツの受容過程」において日本人のスポーツ観として指摘されてきた精神主義とのズレを考察することである。このことを通して、「日本におけるスポーツの受容過程」における「同時代的差異」を示すことが可能となろう。この点については、前述したが、レスリングを「外国の胸を借りねばならぬことを示した典型」（木下、1970、p. 187）と指摘した木下（1970）が「それ（「外国の胸を借りる」：筆者注）だけでは日本に（レスリングが：

筆者加筆) 根をおろすころはできない」(木下, 1970, p. 187) と指摘していることは示唆的である。つまり、「外国の胸を借りること」と「レスリングが日本に受容されること」の間には、様々な要因があるということである。そのため、改めて日本におけるレスリングがどのようにして「お家芸」と言われるまでに至ったのか、というレスリングの受容過程を人物に着目して詳細に検討する必要がある。

第4節：本研究の方法

第1項：八田一朝への着目

前述の通り、本研究では、日本におけるレスリングの受容過程に関して、その担い手に着目して検討を行うことを課題としている。そこで、本研究では、日本における「レスリングの父」（佐藤，2019，p. 37）と評される八田に着目する。

八田の生涯とレスリングとの関係を八田の著書や各種記録資料をもとに概略的に確認しておきたい。1906（明治39）年6月3日に江田島の海軍兵学校（広島県江田島市）で父重次郎と母ハルの間に長男として生まれた八田は、呉，佐世保，横須賀，鎌倉といった軍港地やその周辺で軍人養成のためのエリート教育を受けながら育った。そして、1923（大正12）年1月に16歳の八田は、講道館に入門して柔道の稽古を始めた。さらに22歳の八田は、1929（昭和4）年4月に早稲田大学政治経済学部へ入学すると同時に同大学柔道部へ入部した。入学直後、「日米親善と柔道普及」（「早稲田大学柔道部百年史」編集委員会編，1997，p. 227）を目的に実施された早稲田大学柔道部によるアメリカ遠征のメンバーに選出された八田は、渡米先のシアトル大学でレスリング選手と他流試合を行った。この試合が八田とレスリングの出会いであり、しかもレスリング選手に大敗を喫してその強さを目の当たりにした（八田，1979，pp. 33-34）。本文で詳述するが、八田はこの出来事を契機に「いままでレスリングを馬鹿にしていたが、これはたいへんなことだ。いまこそレスリングを研究しておかないと、将来の日本の柔道はひどい目にあうぞ」（八田，1979，pp. 34-35）と考えるようになった。それ以降八田は、「非難，中傷の嵐のなかで」（八田，1979，p. 41），また時に周囲からの「迫害」（八田，1964，p. 61）を受けながらもレスリングを日本で継続的に実践するようになった。1931（昭和6）年には、早稲田大学レスリング部を創部、翌年の1932（昭和7）年には、大日本アマチュアレスリング協会の創設を先導し、自ら競技者として第10回夏季オリンピック競技大会（以下、ロサンゼルス大会）に出場した。同大会で惨敗に終わると、八田はすぐに指導者へと転身した。

しかし、1932（昭和7）年2月1日に、八田は「幹部候補生トシテ歩兵第一連隊ニ入隊」（八田の軍歴に関する「履歴書」より）することになる。さらに同年11月30日には「現役満期」となり翌日「予備役編入」した。さらに日中戦争が始まり戦局が悪化する中で、1939（昭和14）年3月2日に「臨時招集ノ為ノ野砲兵第一連隊留守隊ニ応召」し「支那事变勤務ニ従事」するために中国へわたり、1942（昭和17）年1月31日の「召集解除」まで兵役を務めた（八田の軍歴に関する「履歴書」より）。八田は、当時勤務していた北支那開発

株式会社内で、1945年8月15日の詔勅を聞き、その後、内地へ引き揚げた。

戦後、八田は指導者としてレスリングの普及及び強化に尽力する。1952年にヘルシンキ大会において、日本レスリング界初の金メダルを獲得した石井を指導した。さらに、前述の通り1932年のロサンゼルス大会以来の快挙として報じられた1964年の東京大会において5つの金メダルを獲得したレスリングチームの総監督を務めた。さらに、1946（昭和21）年には第3代目の日本レスリング協会会長（～1983）を務め、1956（昭和31）年から1968（昭和43）年までの期間にはFILAの副会長も歴任した。

このように八田は、外来スポーツとしてのレスリングを移入し、戦前から戦後にかけて日本のレスリングの強化や普及に生涯をかけて尽力した人物であり、その功績が評価されている（日本レスリング協会80年史編纂委員会編，2012，pp. 107-109：日本体育協会・日本オリンピック委員会，2012，pp. 76-79）。特に、「雑草主義とでもいうか、快活で、積極的で、しかも明確な戦闘精神は、日本のジメジメした精神主義の中にほんとうの精神主義を樹立するだろう」（檀一雄，2015，p.93）という評価の通り、日本におけるスポーツの受容の担い手として、その時代を代表する人物であることから、日本におけるレスリングの受容過程を明らかにするうえでも重要な検討対象と考えられる。

第2項：資料について

本研究では、八田の著作や雑誌記事等を中心的な資料とする。八田の著作は、表3の通りである。なお、資料を引用する際は、表記を現代仮名遣いや、常用漢字を用いるなど適宜、改めた。

表 3：八田一朗の自著資料一覧

出版年	タイトル（掲載雑誌）	出版社
1932	左右平均論（柔道 3 巻 5 号）	講道館文化会
1932	敗因を探る（アスレチックス 10 巻 10 号）	大日本体育協会
1935	レスリング（東京青年 396 号）	東京基督教青年会
1935	師範大学講座体育 第一巻 レスリング	建文館
1938	オリンピック叢書（第 28 レスリング）	成美堂書店
1946	発刊の辞（引揚者 1 号）	引揚社
1947	オリンピックレスリング	出版社不明
1949	裸の柔道（柔道 20 巻 9 号）	講道館
1950	レスリングと柔道（柔道 21 巻 4 号）	講道館
1953	レスリング	旺文社
1957	レスリングと柔道（柔道 28 巻 2 号）	講道館
1961	レスリング	旺文社
1964	わが道を行く	ベースボール・マガジン社
1964	レスリング	旺文社
1965	剃るぞ！	講談社
1965	勝負根性	実業之日本社
1966	レスリング	旺文社
1971	闘魂と根性	恒文社
1979	私の歩んできた道	立花書房

このような八田の著作に加えて、本研究では、八田に関する以下の資料も収集した（表 4）

表 4：八田一朗に関する資料①

資料	対象・内容	手続き
聞き取りデータ①	対象：八田忠朗氏（八田の二男） 内容：生前の八田一朗について	2009年7月に東京都北区（ナショナルトレーニングセンター）・2013年10月23-24日に石川県への調査同行期間中・2016年10月3日に東京都新宿区（慶應義塾大学）にてインタビュー調査を実施した。
聞き取りデータ②	対象：永里高平氏（八田の教え子） 白石剛達氏（八田の教え子） 内容：生前の八田一朗について	2011年7月19日に東京都世田谷区（梅が丘駅近辺）にてインタビュー調査を実施した。
聞き取りデータ③	対象：野島明生氏（八田の教え子） 内容：生前の八田一朗について	2012年5月4日に東京都港区白金高輪駅近辺）にてインタビュー調査を実施した。
墓石に彫刻される文字（序章）	八田および八田の親族たちの没した情報が記されている。	八田忠朗氏（子息）とともに2012年5月31日に墓（神奈川県鎌倉市・寿福寺）に行き、閲覧した。
墓石に彫刻される文字（序章）	八田家の物故者たちの情報が記されている。	墓を管理する八田信一氏に2013年10月4日に許可を得たうえで、同年10月23日に八田忠朗氏（子息）とともに（石川県金沢市広昌寺）に行き、閲覧した。
講道館入門誓約書・講道館昇段記録・講道館に所蔵される履歴書（序章）	八田の講道館への入門の記録、昇段記録、講道館への貢献の記録等が記されている。	2013年10月17日に八田忠朗氏（子息）同席のもと、講道館において保管されているものを閲覧の上、撮影した。
学籍事項に関する調査結果報告書の写し（序章）	八田の早稲田大学の在籍に関する記録が示されている。	2015年9月2日に八田忠朗氏（子息）から入手したものを写した。
戸籍全部事項証明書（世田谷区役所）（序章）	八田および八田の親等の戸籍に関する情報が記されている。	八田忠朗氏（子息）が2015年10月17日に入手したものを写した。

戸籍全部事項証明書（渋谷市役所） （序章）	八田および八田の親等の戸籍に関する情報が記されている。	八田忠朗氏（子息）が2015年10月17日に入手したものを写した。
軍歴に関する履歴書の写し （序章・第2章）	八田の軍歴記録が記されている。	八田忠朗氏（子息）からの委任を受け、総務省政策統括官付恩給業務管理官に該当資料を請求の上、入手したものを写した。
渡欧日誌 （第1章）	八田が1931年に単独で行った欧州遠征の旅程が記されている。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏（子息）の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
早稲田大学柔道部によるアメリカ遠征の写真 （第1章）	早稲田大学柔道部が1929年に実施したアメリカ遠征の際に撮影されたものである。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏（子息）の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
国際レスリング連盟副理事としての八田の写真 （第2章）	国際レスリング連盟の会議に参加した八田を撮影したものである。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏（子息）の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
第4回日米交流戦の日本チームの集合写真 （第2章）	1951年12月20日から1952年4月13日にかけてアメリカで行われた第4回日米交流戦において撮影されたものである。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏（子息）の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
オークランド市長への表敬訪問を報じる新聞の切り抜きとその写真 （第2章）	第4回日米交流戦期間中に八田が表敬訪問をしたことを報じた記事とその時に撮影された写真である。	オークションで購入した。
八田一朗直筆の「根性」① （第3章）	八田による「根性」の揮毫である。	オークションで購入した。
八田一朗直筆の「根性」②	八田による「根性」の揮毫である。	オークションで購入した。

(第3章)		
八田の根性の普及活動の写真 (第3章)	八田が「根性」を揮毫している際に撮影されたものである。	2010年2月27日、2010年3月1日、 2010年3月2日に八田忠朗氏（子息）の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
八田一朗根性会に関するパンフレット2冊 (第3章)	「八田一朗根性会」の小冊子であり、八田による根性という言葉を利用した活動の一端がうかがわれるものである。	2010年2月27日、2010年3月1日、 2010年3月2日に八田忠朗氏（子息）の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
選挙活動で用いた旗 (第3章)	1965年7月4日に行われた第7回参議院議員通常選挙の際に用いられた旗である。	2010年2月27日、2010年3月1日、 2010年3月2日に八田忠朗氏（子息）の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。

さらに、八田の周辺についての情報を得るために、表5の資料を確認した。

表 5 : 八田一朗に関する資料②

資料	対象・内容	手続き
サンテル事件に関する写真 2枚(第1章)	1921年にアド・サンテルが来日し、講道館に所属する柔道家たちと対戦したときに撮影されたものである。	2009年8月8日に八田忠朗氏(子息)から東京都新宿区(西新宿駅近辺)で受け取った。
公開試合パンフレット (第1章)	1931(昭和6)年6月10日に早大レスリング部により開催された公開試合のパンフレットである。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
『大日本アマチュア・レスリング規約』 (第1章)	大日本アマチュアレスリング協会創設当初に作成されたと考えられ、事業内容や事業目的等が記されている。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
庄司彦雄の証文の写し (第1章)	庄司彦雄が早大レスリング部部長宛に提出したものであり、1931年のフィリピン招聘は自らの判断で行ったものであることの記述が確認できる。	八田コレクションに所収されているものの中から抽出し、写した。
庄司彦雄への感謝状のスクリーンデータ (第1章)	南カリフォルニア大学学長から庄司に宛て送られたものである。	庄司の子息、藤村順彦氏から2011年5月29日に受け取った。
戦前から八田と交流したロイ・モーア氏の写真 (第1章)	1937(昭和12)年に来日した際に八田に送られた写真である。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
紀元二千六百年奉祝明治神宮奉納レスリング大会のパンフレット	1938(昭和13)年、「国民精神作興体育大会」で「紀元二千六百年奉祝明治神宮奉納レスリング大会」とし	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田

(第1章)	て実施された際に配布されたものである。	邸より収集した。
帳面『大日本レスリング協会記録帳 NO.2』 (第1章)	1940(昭和15)年-1941(昭和16)年の試合記録が記されている。	2010年2月27日, 2010年3月1日, 2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て, 管理人の案内のもと, 旧八田邸より収集した。
1932年のロサンゼルス大会へ向けた出航の写真 (第1章)	1932年のロサンゼルス大会へ向けて出航する際に撮影されたものである。	2010年2月27日, 2010年3月1日, 2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て, 管理人の案内のもと, 旧八田邸より収集した。
日米対抗戦に際し1937年に来日したアメリカチームと監督の写真(第1章)	1937年7月に日本で行われた日米対抗戦に際して撮影し, 八田に送られたものである。	2010年2月27日, 2010年3月1日, 2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て, 管理人の案内のもと, 旧八田邸より収集した。
紀元二千六百年奉祝明治神宮奉納レスリング大会のパンフレット(第1章)	1938(昭和13)年に「国民精神作興体育大会」において「紀元二千六百年奉祝明治神宮奉納レスリング大会」として実施された際に配布されたものである。	2010年2月27日, 2010年3月1日, 2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て, 管理人の案内のもと, 旧八田邸より収集した。
1945年(昭和20)12月に早大レスリング部が実施した合宿の写真(第2章)	1945年(昭和20)12月に早大レスリング部が栃木県で実施した合宿で撮影された写真である。	2010年2月27日, 2010年3月1日, 2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て, 管理人の案内のもと, 旧八田邸より収集した。
アメリカ代表チームとの交流試合において実施されたパレードの写真(第2章)	戦後, 日本において行われた日米交流において実施されたパレードの様子を撮影したものである。	2010年2月27日, 2010年3月1日, 2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て, 管理人の案内のもと, 旧八田邸より収集した。
ジョン・マンデル氏の写真 (第2章)	第3回日米交流戦のアメリカチームの監督を務めたジョン・マンデル氏	2010年2月27日, 2010年3月1日, 2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の

	を撮影したものである。	許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
日米交流戦のパンフレット (第2章)	1951年に開催された第3回目日米交流戦における対戦の概要が記されている。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
八田が交流したミリオール・ブルノー氏の写真(第2章)	1932年の第10回夏季オリンピック競技大会を契機に八田と交流が始まったブルノー氏を撮影したものである。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。
大松博文直筆の「根性」 (第3章)	大松による「根性」の揮毫である。	オークションで購入した。
サイン入り木製プレート (第3章)	1964年の東京大会レスリング競技において金メダル獲得者たちによるサインが記されている。	2010年2月27日、2010年3月1日、2010年3月2日に八田忠朗氏(子息)の許可を得て、管理人の案内のもと、旧八田邸より収集した。

なお、「八田コレクション」とは、八田が生前、自ら作成し国立国会図書館(東京都)に寄贈した107冊で構成されるスクラップブック集のことである。1930(昭和5)年から1973(昭和48)年までの期間に、八田が収集した、新聞記事の切り抜きや、大会のパンフレット等の資料が収められている。この資料は、戦時中に焼失しないために八田が当時、生活拠点としていた華北(中国)に取り寄せて保管するほど大切にしていたものである。戦後、八田が引揚の際、内地に持ち帰ることができなかったが、1945年(昭和20)年10月に、「米国経済調査団の随員として華北にやってきた安武セイゾウ大尉がある日八田氏を訪れ」(読売新聞、1948年5月7日付、朝刊)で、「記録帳を預ろうといふだし」(読売新聞、1948年5月7日付、朝刊)、持ちかえって保存した。その後、八田の手元にスクラップブック集は戻り、現在、国会図書館で保存されている。

第5節：本研究の意義と限界

前述の通り、本研究では、日本におけるレスリングの受容過程を、その担い手となった八田という人物の視点から明らかにすることに取り組む。具体的には、本研究の関心と先行研究にもとづいて日本におけるレスリングの受容過程を3期に区分して、それぞれの時期における八田の理念や実践を検討する。このような本研究の意義は、次の2点に整理できる。

1点目は、日本におけるレスリングの受容過程を通時的に明らかにするとともに、その過程における八田の貢献を示すことが可能となることである。前述の通り、八田は日本にレスリングを持ち込んだ中心的人物であることから、その貢献を示すことはレスリング史にとって重要な知見を示しうるであろう。

2点目は、八田の理念や実践に着目することで、「日本における外来文化としてのスポーツの受容過程に関する先行研究」で課題とされている「同時代的差異」を示すことが可能となる。というのも、前述の通り、日本におけるスポーツの受容過程は、教育の観点が重視された結果、スポーツに関する用語が日本語に変換されたり、精神主義と結びついたりしたという点に特徴づけられるが、八田は、指導者として一度も教育機関に在籍しておらず、教育の観点を重視しなければならないという立場でなかったことから、外来文化としてのスポーツの受容という枠組みが該当しない可能性がある。そのため、八田の理念や実践をそれぞれの時代の日本のスポーツの特徴と比較することで、「同時代的差異」（小野瀬，2001，p. 61）を明らかにすることにつながると考えられる。

他方で、本研究の履行によって明らかにされるであろうこれらの点は、「日本における外来文化としてのスポーツの受容過程に関する研究」ならびに「日本におけるレスリングの受容過程に関する研究」に対して架橋的な役割にとどまらざるを得ない。1点目の意義として示した点については、本研究では、あくまで八田の視点から日本におけるレスリングの受容過程を明らかにするため、八田の貢献という視点からのレスリングの受容過程の解明にとどまることと表裏一体であるといえる。また、2点目の意義として示した点についても、あくまで同時代における八田の独自な面を示すことにとどまるため、その時代の支配的な考え方や実践を示すことには直接的にはつながらない。

これらの意義と限界を踏まえたうえで、次章以降で、日本におけるレスリングの受容過程を八田の視点から明らかにすることを試みる。

【注】

注1) 「お家芸」とは、「(歌舞伎・能などで) その家に古くから伝わる独特の芸」(金田一・池田編, 1996, p. 206) や、「その人のもっとも得意とする独特の芸・やり方. おはこ」(金田一・池田編, 1996, p. 206) を表現する用語である. そして, レスリングは日本の「お家芸」と評されている(読売新聞, 2018年11月6日付, 朝刊: 朝日新聞, 2013年2月18日付, 朝刊).

実際にお家芸という言葉が日本におけるスポーツに対する評価として用いられている例としては, 柔道やバレーボール, 陸上競技などに対して用いられていることが確認できる. 柔道とバレーボールは1964年に東京大会において日本の金メダル獲得を伝える記事においてそれぞれお家芸という言葉が用いられていた(朝日新聞, 1964年10月20日付, 朝刊: 朝日新聞, 1964年10月21日付, 朝刊). 陸上競技については1947(昭和22)年に三段跳種目に対して用いられていたが, 1951(昭和26)年には日本の選手による世界記録が他国の選手に更新されたことを引き合いに日本の三段跳種目の競技力の凋落を指摘する記事においてお家芸という言葉が用いられていた(読売新聞, 1947年12月7日付, 朝刊; 朝日新聞, 1951年10月3日付, 朝刊). また, 1958(昭和33)年には織田幹雄が1960年のローマ大会において日本が三段跳種目でメダルを獲得することが難しいとの見解を示す記事の見出しにおいて「地におちた” お家芸”」という表記がされていることが確認できる(朝日新聞, 1958年5月30日付). そしてレスリングは, 1964(昭和39)年のオリンピック競技東京大会の後, 1968(昭和43)年にお家芸という言葉が新聞紙上において用いられていることが確認できる(朝日新聞, 1968年10月19日, 夕刊).

これらのことから, お家芸という言葉が国際試合における勝利を見込める競技に対する評価であると推察される. また, 柔道を除けばバレーボールや陸上競技といった日本にとって外来のスポーツである種目の競技力を指す文脈においてもお家芸という言葉が用いられている. 以上の点をふまえ, 本研究では, スポーツにおけるお家芸という語を「外来のスポーツが, オリンピックなどの国際試合において勝利できる見込みがある種目として自国内に受容された状態」という意味で用いる.

注2) 東京大会のレスリングに参加した国・地域のメダル獲得数は, 表6の通りである.

表 6：東京大会のレスリング競技における国・地域別メダル数

順位	国・地域	金	銀	銅
1	日本	5	0	1
2	ソビエト連邦	3	4	3
3	ブルガリア	3	4	1
4	トルコ	2	3	1
5	ハンガリー	2	0	0
6	ユーゴスラビア	1	0	1
7	東西統一ドイツ	0	1	3
8	ルーマニア	0	1	2
9	スウェーデン	0	1	1
10	チェコスロバキア	0	1	0
	韓国	0	1	0
12	イラン	0	0	2
13	アメリカ合衆国	0	0	1

注 3) レスリング以外で主要な種目でメダル獲得ができなかった大会は、表 7 の通りである。

表 7：メダルが獲得できなかった大会

競技種目	開催都市（開催年）
陸上競技	ヘルシンキ（1952）、メルボルン（1956）ミュンヘン（1972）、モントリオール（1976）ロサンゼルス（1984）、ソウル（1988）
水泳	メキシコシティー（1968）、モントリオール（1976）、ロサンゼルス（1984）
体操	アトランタ（1996）、シドニー（2000）
バレーボール	ソウル（1988）、バルセロナ（1992）アトランタ（1996）シドニー（2000）アテネ（2004）、北京（2008）リオデジャネイロ（2016）、東京（2021）

※なお柔道は、1968年のメキシコシティーで開催された第19回夏季オリンピック競技大会で正式競技として不採用となったことでメダルを獲得できなかった。

注 4) スポーツの日本への受容過程を対象にした研究は、スポーツ史学会が発行する学術雑誌である「スポーツ史研究」における掲載論文を確認すると、野球（11 編）、テニス（4 編）、バドミントン（1 編）、サッカー（1 編）、陸上（1 編）、バスケットボール（1 編）、スキー（1 編）とスポーツ種目別に論文が掲載されている。これらの研究では、組織、制度・ルール、用語、用具・施設、技術・戦術戦略、出来事を分析対象に、それぞれのスポーツ種目の普及や発展の過程を明らかにしている。

注 5) 木下（1970）はスポーツ教育について、「学生はやがて学士、すなわち紳士となるのだから、そのために、専門学術だけでなく紳士の道徳すなわちジェントルマンシップを身につけなければならないし、その手段としてスポーツを行ない、スポーツマンシップを養わねばならぬというイギリス流の論理」（木下，1970，pp. 106-107）があると説明している。松井（2015）によれば、イギリス社会の中産階級が、血統や家柄によらない社会的支配層であるジェントルマンの地位を求めてパブリックスクールに子弟を送り込むようになり、1830 年代以降パブリックスクールの数が増加したという。そのパブリックスクールでは、19 世紀後半から課外教育としてのスポーツが加わり、身体壮健を礼賛するアスレティズムのような「スポーツを通してエリート養成を行うための教育イデオロギー」（松井，2015，p. 639）が形成されていたとされる。

注 6) 野球害毒論争とは、1910（明治 43）年に東京朝日新聞に掲載された野球に対する批判記事を契機に、1911 年 8 月から同年 9 月に東京朝日新聞紙上の連載記事を中心に展開された論争である（木村，1962）。野球害毒論争の対立構造を整理すると、そこには野球というスポーツに対する同じ価値観を有した人々による対立というよりも、「野球関係者（野球界）と野球門外漢（外界）との間の論争」（小野瀬，2002，p. 62）と特徴づけられる。この点から、日本人のスポーツ受容を検討する際に有益な研究対象であるとして、野球害毒論争については秦・加賀（1991a, 1991b, 1992）、有山（1997）、清水（1998）といった先行研究が確認できる。

注 7) 1970 年代から 1980 年代にかけての日本人のスポーツ観に関しては、岡部（2018）

がスポーツの学術研究領域や批評，ならびに新聞報道の内容の分析を通して、「勝利至上主義」が，1970年代から1980年代前半にかけて，それまでのスポーツのあり方を反省的に捉える（近代スポーツ批判）のキーワードとして成立したと指摘している．しかし，岡部（2018）の分析は，2000年代の新聞記事において確認できる勝利至上主義の単純な否定に疑義を示す記事との連続性や，勝利の追求それ自体の価値は認めるという意味で勝利至上主義の一側面を肯定的に受容する人々を対象とする詳細な分析が行われておらず，研究目的に掲げられている「勝利至上主義」の社会的意味を明らかにするという点において，部分的な把握に留まっている．

注8) 他に，日本におけるレスリングに関する記述は，竹之下・岸野（1983）や柳澤（2012）もある．ただし，竹之下・岸野（1983）は昭和26年7月学習指導要領中等学校体育篇における選択教材の具体例のひとつとしてレスリングをあげているのみで，なぜレスリングが学校教育の教材として表記されたかなどのレスリングを主題とした分析は行っていない．また，柳澤（2012）は戦前から戦後におけるアマチュアレスリング競技の中心的人物および関係する各大学レスリング部OB等へのインタビューを通してアマチュアレスリング競技における通史を描こうと試みているが，主に関係者へのインタビューをデータとしており，論文の体裁をとっていないため出典や引用箇所が不明確な部分も散見される．そのため，これらの研究の見解は，あくまで本研究の見解を補填する程度に参考するのに留めた．

注9) 人物に着目して，外来文化としてのスポーツの受容過程を明らかにした研究としては，小野瀬（2002），山本・後藤（2003），中村（2005，2007）等がある．これらの研究では当時多大な影響を及ぼした特定の人物（インフルエンサー）に着目し，当時の言説と理念の関係に着目し分析・検討がなされてきた．

【引用参考文献】

- 有山輝雄（1997）甲子園野球と日本人：メディアの作ったイベント．吉川弘文館，pp. 47-67.
- 朝日新聞（1951）10月3日付．朝刊．
- 朝日新聞（1958）5月30日付．朝刊．
- 朝日新聞（1964）10月20日付．朝刊．
- 朝日新聞（1964）10月21日付．朝刊．
- 朝日新聞（1968）10月19日付．夕刊．
- 朝日新聞（2013）2月18日付．朝刊．
- 檀一雄（2015）“八田イズム”の勝利．講談社編，東京オリンピック：文学者の見た世紀の祭典．講談社，pp. 91-94.
- 福田富昭（2012）ごあいさつ．日本レスリング協会80年史編纂委員会編，財団法人日本レスリング協会80年史：1932 - 2012，p. 4.
- Guttman. A（1994）Games and Empires : Modern Sports and Cultural Imperialism. Columbia University Press.
- 秦真人（2001）日本的スポーツ観の形成に関わる一考察（1）安部磯雄のスポーツ観について．愛知学泉大学研究論集，36：183-191.
- 秦真人（2002）日本的スポーツ観の形成に関わる一考察（2）安部磯雄のスポーツ観について（その2）．愛知学泉大学研究論集，37：151-161.
- 秦真人（2006）日本的スポーツ観の形成に関わる一考察（3）新渡戸稲造のスポーツ観について．愛知学泉大学・短期大学紀要，41：145-154.
- 秦真人・加賀秀雄（1991a）1911年における野球論争の実証的研究（Ⅰ）：「野球と其害毒」をめぐって．総合保健体育科学，14（1）：25-31.
- 秦真人・加賀秀雄（1991b）1911年における野球論争の実証的研究（Ⅱ）：「東京朝日新聞」及び「大阪朝日新聞」の編集内容の相違をめぐって．総合保健体育科学，14（1）：33-38.
- 秦真人・加賀秀雄（1992）1911年における野球論争の実証的研究（Ⅲ）：「野球論争」から「第一回全国優勝野球大会」開催に至る朝日新聞の動向，及び同紙にあらわれた学生野球観について．総合保健体育科学，15（1）：39-48.
- 八田一朗（1964）わが道を行く：人生を勝ち抜く八田イズム．ベースボール・マガジン社

- 八田一朗（1979）私の歩んできた道．立花書房，p. 34.
- 川辺光（1981）日本社会の価値体系と日本人のスポーツ観の構造．体育社会学研究会編，一流競技者の社会学．不昧堂出版，pp. 149-167.
- 木村吉次（1962）いわゆる「野球害毒論争」の一考察．中京大学体育論叢，3：103-123.
- 木村吉次（2009）体育・スポーツと人間形成：その歴史的考察．体育の科学，59（11）：743-748.
- 金田一春彦・池田弥三郎編（1996）学研国語大辞典．学習研究社，p. 206.
- 木下秀明（1970）スポーツの近代日本史．杏林書院.
- 岸野雄三（1968）日本のスポーツと日本人のスポーツ観．体育の科学，18(1)：12-15.
- 高津勝（1994）日本近代スポーツ史の底流．創文企画.
- 高津勝（2008）日本におけるスポーツ受容：「創られた伝統」と世界システム・国民国家・生活世界．一橋大学スポーツ研究，27：49-56.
- 松井良明（2015）近現代のスポーツ思想：イギリスのスポーツ思想．中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則編，21世紀スポーツ大事典．大修館書店，pp. 638-640.
- ミシガン州立大学図書館（online）：ALBRECHT FECHTBUCH，
<https://archive.lib.msu.edu/DMC/fencing/albrecht.pdf>，（参照日 2021年4月2日）.
- 中村哲也（2005）戦後日本における学生野球の制度とその理念：飛田穂洲と関連して．スポーツ史研究，18：17-28.
- 中村哲也（2007）「野球統制令」と学生野球の自治：1930年代における東京六大学野球を中心に．スポーツ史研究，20：81-94.
- 中村敏雄（1978）戦後のスポーツナショナリズム．中村敏雄・影山健編，スポーツを考えるシリーズ5 スポーツナショナリズム．大修館書店，pp.179-202.
- 中村敏雄（1995）外来スポーツの「素直な受容」．中村敏雄編，スポーツの文化論シリーズ5 外来スポーツの理解と普及．創文企画，p. 1.
- 日本サッカー協会（online）JFA の概要：沿革・歴史．日本サッカー協会，
https://www.jfa.jp/about_jfa/history/，（参照日 2021年4月2日）.
- 日本体育協会・日本オリンピック委員会（2012）日本体育協会・日本オリンピック委員会100年史：PART2 加盟団体の歩み．日本体育協会・日本オリンピック委員会，pp. 76-79.
- 日本レスリング協会（online）ホーム：歴代記録．<https://www.japan->

- wrestling.jp/pastresults/, (参照日 2021 年 4 月 2 日) .
- 日本レスリング協会 80 年史編纂委員会編 (2012) 財団法人日本レスリング協会 80 年史 : 1932-2012. 日本レスリング協会.
- 岡部祐介 (2018) スポーツにおける勝利追及の問題性に関する一考察 : <勝利至上主義> の生成とその社会的意味に着目して. 関東学院大学経済学部・経営学部総合学術論叢, 65 : 15-37.
- 岡部祐介・友添秀則・春日芳美 (2012) 1960 年代における「根性」の変容に関する一考察 : 東京オリンピックが果たした役割に着目して. 体育学研究, 57(1) : 129-142.
- 小野瀬剛志 (2001) 昭和初期におけるスポーツ論争 : 「日本的スポーツ観」批判をめぐって. スポーツ社会学研究, 9 : 60-70.
- 小野瀬剛志 (2002) 野球害毒論争(1911 年)に見る野球イデオロギー形成の一側面 : 「日本的スポーツ観」再考論. スポーツ史研究, 15 : 61-71.
- ロバート・ホワイティング : 玉木正之訳 (2018) ふたつのオリンピック : 東京 1964 / 2020. KADOKAWA, p. 147.
- 笹川スポーツ財団 (online) 特集 : スポーツ歴史の検証 : スポーツの歴史を知る スポーツとは : 2. 狩猟から始まった. 笹川スポーツ財団, https://www.ssf.or.jp/ssf_eyes/history/sports/02.html. (参照日 2021 年 4 月 2 日).
- 佐々木浩雄 (2004) 大正末～昭和恐慌期における農村青年の体育・スポーツ受容 : 石川県江沼郡月津村青年団機関誌『団報』から. 体育史研究, 21 : 15-25.
- 佐藤次郎 (2019) 八田一朗 : いまも色あせていない「八田イズム」. 佐野慎輔・佐藤次郎・大野益弘・松原茂章・山本浩, スポーツ歴史の検証 : オリンピック・パラリンピック 歴史を刻んだ人々. 笹川スポーツ財団, pp. 37-41.
- 関春南 (1997) 戦後日本のスポーツ政策 : その構造と展開. 大修館書店.
- 塩見俊一 (2008) 戦後初期日本におけるプロレスの生成に関する一考察 : 1950 年代におけるプロ柔道の展開に着目して. 立命館産業社会論集, 43 (4) : 111-131.
- 塩見俊一 (2010) 戦後初期日本におけるレスリングの展開に関する一考察 : 1950 年代初頭の日米レスリングに着目して. 立命館産業社会論集, 46 (3) : 81-102.
- 菅原禮 (1976) 日本的スポーツ風土の社会学的考察. 新体育, 46 (4) : 22-25.
- 高嶋航 (2020) 国家とスポーツ : 岡部平太と満州の夢. KADOKAWA.
- 竹之下休蔵・岸野雄三 (1983) 近代日本学校体育史. 日本図書センター.

- 玉置通夫 (2018) 昭和 19-20 年におけるプロ野球の非公式戦研究：戦時下のスポーツの側面について. スポーツ史研究, 31 : 37-42.
- 東京連隊区司令官 (1942) 八田一朗の軍歴に関する「履歴書」. 総務省政策統括官恩給担当付恩給業務管理官室所収史料.
- 内海和雄 (1993) 戦後スポーツ体制の確立. 不昧堂出版.
- United World Wrestling (online). History of Wrestling & UWW. United world wrestling, <https://uww.org/organisation/history-wrestling-uww>, (参照日 2021 年 4 月 2 日).
- 「早稲田大学柔道部百年史」編集委員会編 (1997) 早稲田大学柔道部百年史. 早稲田大学柔道部・早稲田柔道クラブ.
- 渡辺融 (1993) 日本における野球の受容・定着過程. 中村敏雄編, スポーツ文化論シリーズ 1 スポーツの伝播・普及. 創文企画, pp. 11-36.
- 山本英作・後藤光将 (2003) 坪井玄道によるアソシエーションフットボールの日本的解釈：『戸外遊戯法』及び『改正戸外遊戯法』における記述の比較検討から. スポーツ史研究, 16 : 19-29.
- 柳澤健 (2012) 日本レスリングの物語. 岩波書店.
- 読売新聞 (1947) 12 月 7 日付. 朝刊.
- 読売新聞 (1948) 5 月 7 日付. 朝刊.
- 読売新聞 (2018) 11 月 6 日付. 朝刊.

第1章：草創期におけるレスリングの受容過程

本章では、1930年代から終戦までの日本におけるレスリングの受容過程を八田の視点から明らかにする。具体的には、草創期の社会状況やスポーツ及びレスリングの状況を整理したうえで、八田の理念とその理念を実現するための実践について検討する。

第1節：戦前のスポーツの隆盛とレスリング

第1項：スポーツの「花開く季節」の到来

ヨーロッパ全土を中心に繰り広げられた第一次世界大戦（1914-1918）が終息後、パリ講和会議（1919）やワシントン会議（1921-1922）を通して、徐々に国際秩序の回復が図られていく。このような国際情勢下における1920年代から日中戦争の始まる1937（昭和12）年頃までの日本は、「戦前における、スポーツ全盛の時代」（今村，1970，p. 555）であった。このような「全盛」という評価の理由の一つは、オリンピック競技大会における日本人選手の活躍である。日本は、第一次世界大戦後の最初の大会となった1920年にアントワープ（ベルギー）で開催された第7回夏季オリンピック競技大会（以下、アントワープ大会）から1936年にベルリン（ドイツ）で開催された第11回夏季オリンピック大会（以下、ベルリン大会）の派遣選手数や戦績は表8の通りである。

表8：アントワープ大会からベルリン大会の日本の参加状況および大会成績

開催地（開催年）	派遣選手数	参加競技種目数	金	銀	銅
アントワープ（1920）	15	3	0	2	0
パリ（1924）	19	4	0	0	1
アムステルダム（1928）	43	6	2	2	1
ロサンゼルス（1932）	130	9	7	7	4
ベルリン（1936）	179	13	6	4	10

日本オリンピック委員会（online）をも元に筆者が作成

このように、日本の派遣選手数は大会ごとに増えていき、メダルの獲得数も増えていった。特に、1928年にアムステルダム（オランダ）で開催された第9回夏季オリンピック競技大会（以下、アムステルダム大会）における織田幹雄（陸上競技・三段跳）や鶴田義行（競泳・200m平泳ぎ）による日本人初の金メダルの獲得、人見絹枝（陸上競技・800mほか）による日本人女性初の銀メダルの獲得、そしてロサンゼルス（アメリカ）で開催された第10回夏季オリンピック競技大会（以下、ロサンゼルス大会）における鶴田の連覇等は、マスメディアに大々的に取り上げられ、広く国民の関心を引き寄せることになった（坂上，1998）。こうした国民の期待に応えたロサンゼルス大会での日本人選手の活躍は、当時の日本体育協会会長の岸清一に「スポーツの新興国」（日本体育協会編，1963，p. 619）と言わしめる

ほどであり、国際的な注目も集めるようになった。このようにロサンゼルス大会が盛り上がった背景には、新聞各社による大規模な報道や1925（大正14）年から始まったラジオ放送という新たなメディア媒体による影響があり、日本人選手の結果が「ナショナル・プライドを日本人の胸に植え付け」（坂上，1998，p. 181）ることにつながった結果であった。続いてベルリン（ドイツ）で開催されたベルリン大会でも、開会式の前日に1940年の第12回夏季オリンピック競技大会の開催地が東京に決定したという報道もあり、日本人選手の活躍は国民にとっての大きな関心事となった。さらに、このようなオリンピック競技大会での日本人選手の活躍は、各スポーツ界の組織体制の整備や国際交流にもつながる。今村（1970）は、1927（昭和2）年から1936（昭和11）年までの間に複数のスポーツ種目で海外への遠征および国内における海外の選手との交流試合がオリンピック競技大会や極東大会以外にも行われ、13種目において中央競技団体が設立されたことを示しており、それぞれ表9、表10のようにまとめられる。

表9：1927年から1936年において国際試合が実施された日本のスポーツ種目

交流試合の形式	該当するスポーツ種目
海外への遠征が実施された種目 (12種目)	陸上競技，水泳，スキー，スケート，サッカー，バスケットボール，テニス，ラグビー，野球，レスリング，ボクシング，器械体操
国内において国際試合が実施された種目 (11種目)	陸上競技，水泳，スキー，サッカー，テニス，ラグビー，野球，レスリング，ボクシング，器械体操，アイスホッケー

今村（1970）を元に筆者が作成

表 10 : 1927 年から 1936 年において設立された日本の中央競技団体

競技団体名称	設立年月
日本ラグビー・フットボール協会	1927 年 4 月
日本バレーボール協会	1927 年 7 月
日本軟式庭球連盟	1928 年 5 月
日本馬術連盟	1929 年 9 月
日本スケート連盟	1929 年 11 月
日本体操連盟	1930 年 4 月
日本バスケットボール協会	1930 年 9 月
日本アマチュア・レスリング協会	1931 年 4 月
日本卓球協会	1931 年 7 月
日本ヨット協会	1932 年 10 月
日本自転車連盟	1934 年 12 月
日本ウェイト・リフティング協会	1936 年 5 月
日本ハンドボール協会	1938 年 2 月

今村（1970）を元に筆者が作成

このように、各種スポーツ種目において組織体制の整備や国際試合が行われるほどに活発に展開されていた状況は「スポーツにとって花開く季節」（木下，1970，p. 150）と表現される程の隆盛を迎えていたことがうかがえる。

しかし、1937 年から総力戦体制に入り、日本国内におけるスポーツの体制も変貌していく。特に 1939（昭和 14）年 7 月に成立した第二次近衛文麿内閣の下に提示された「個人のあらゆる生活場면을指導し干渉しうとする全体主義的国家観」に基づき「政治も外交も経済も科学も思想も家庭生活も映画も音楽もスポーツも、戦争に従属し国防に基づいて存在」（企画院研究会編，1941，pp. 21-23）するものという捉え方は、日本国内におけるスポーツの翼賛体制化を促すこととなる。1941（昭和 16）年 12 月には大日本学徒体育振興会が成立し、1942（昭和 17）年 7 月には国内の各種スポーツ種目の全国大会を文部省および大日本学徒体育振興会が主催する方針が打ち出される。さらに、1942（昭和 17）年 4 月には大日本体育協会が大日本体育会へと改組され、民間の一組織から文部省の外郭団体へと位

置づき、スポーツ界における官僚統制が徐々に進んでいく。高岡 (2009) は 1942 (昭和 17) 年 4 月の大日本体育会の成立を日本におけるアマチュア・スポーツ界の総力戦体制の完成と位置付けつつ、同会の成立は国家的統制という制限付きながら各種競技大会を戦時下において再開させた働きはあるものの、一方で国家および陸軍のスポーツへの介入と変質をもたらしたとその功罪を指摘している。特に陸軍によるスポーツ批判は国民の体位向上という観点で問題視され、このスポーツ批判は 1941 (昭和 16) 年の太平洋戦争における日米開戦に伴う対米感情の悪化を背景とした外来スポーツに対する排撃運動へと連なっていく。このように、1936 (昭和 11) 年までに隆盛を誇った日本国内における各種スポーツは、1937 (昭和 12) 年頃から徐々に国家による統制・管理の影響を受け、次第に排撃の対象とみなされるといった 1936 (昭和 11) 年までの時代状況と対照的な様相を呈していた。

第 2 項：早稲田大学レスリング部の創設と国際進出

上述した戦前期におけるスポーツの隆盛という状況は、レスリングも例外ではなかった。具体的には、大学のレスリング部の学生やその OB がオリンピック競技大会等の世界大会への出場を果たすことになる。

日本におけるレスリングの始まりは、1931 (昭和 6) 年に八田一朗 (1906-1983 : 以下、八田) が中心となり創設した早稲田大学レスリング部 (以下、早大レスリング部) による活動である。早大レスリング部の創設以前にも、講道館柔道^{注 10)} の 3 段を保有する内藤克俊が 1924 (大正 13) 年にパリ (フランス) で開催された第 8 回夏季オリンピック競技大会に出場し 3 位に入賞したり、1928 (昭和 3) 年にアムステルダム大会に講道館柔道の 6 段を保有する新免純武が参加したりしていた。しかし、こうした講道館に所属する柔道家らによるレスリングへの挑戦が日本におけるレスリングの組織的かつ継続的な活動に結びつくことはなかった。というのも、「柔道家が転向すればできるスポーツという安易な気持ちが支配的だった」(木下, 1970, p. 186) からである。このような状況を打破して、本格的に日本でレスリングが普及していく端緒となったのが、早大レスリング部の発足である。早大レスリング部の創部の経緯は、次の通りである。早大レスリング部の創設の契機は、1929 (昭和 4) 年 4 月に早稲田大学柔道部 (以下、早大柔道部) が「日米親善と柔道普及」(「早稲田大学柔道部百年史」編集委員会編, 1997, p. 227) を目的に実施したアメリカ遠征^{注 11)} である。



図 3：早大柔道部によるアメリカ遠征の時の写真

この遠征で行われた他流試合において、早大柔道部はレスリング選手に大敗を喫するという事件が起きた。この時のメンバーの一人が後に早大レスリング部を発足し、さらに日本レスリング協会の 3 代目会長に就く八田である。八田はこのアメリカ遠征におけるレスリング選手への敗北という結果を目の当たりにし、自身の著書の中で次のように回顧している。

「わたしはレスリングを研究しよう。このままでは日本の柔道は将来西洋にひどい目にあう。柔道をより強くし、世界のスポーツにするためには、レスリングをはじめとした各国の格闘競技を勉強しなくてはならない。そして日本の柔道を守ってやろう。」これが、わたしがレスリングをはじめた最大の動機となった。(八田, 1965, p. 173)

このように、柔道の発展のためにレスリングの技術を取り入れる必要があると考えた八田は、アメリカ遠征から帰国後、1931 (昭和 6) 年 4 月に庄司彦男 (以下、庄司) や山本千春らとともに、早大レスリング部を創設した。また、早大レスリング部の創設の背景には、ロサンゼルス大会に向けて「柔道の高段者を羅府大会迄にレスラーとして養成し軽量級の世界制覇を行はうと云う希望」(山本・田鶴濱, 1937, p. 1300) もあった。早大レスリング部の創設当時の構成員は、表 11 の通りである。

表 11：創設時の早稲田大学レスリング部のメンバー

部長	喜多壮一郎（早大教授）
コーチ	庄司彦雄
主将	八田一朗
部員	山本千春 尾崎西郷 伊勢治 田中栄三郎 村上正 櫻井尚雄 坂口太郎 小田佐太男 長澤義弘 斎藤周二 塩崎温 原田秀雄 八田嵯武朗 長崎長衛 矢内（原文ママ） （部員は柔道部および相撲部の有志による）

山本・田鶴濱（1937）を参考に筆者が作成

早大レスリング部は、1931（昭和6）年4月28日15時から発会式を行っている。この発会式の様子については、以下のように新聞で報じられている。

一つ殖えた学生スポーツ 早大にレスリング部

早大では昨秋同校出身の柔道五段庄司彦雄氏が米国から帰朝して以来有志等でレスリングの練習をやつて居たが今回愈よレスリング部が創立され二十七日午後三時から発会式を挙げた部員は柔道部の八田主将、伊藤、尾崎、田中各四段を始め高段者三十余名で何れも黒、紺の毛糸の長ズボンを穿き半裸体で白布を敷きつめた道場でヘツドロツク、フルネルソン等、四十六手の型を演じた（読売新聞、1931年4月28日付、朝刊）



図 4：発会式の様子①

読売新聞（1931年4月28日付、朝刊）

早大にレスリング部創設 オリンピックを目標に猛練習

このたび早大の運動部の一にレスリング部が新たに加へられた、これは日本における最新の試みで師範には早稲田大学柔道部の先輩で米国南加大学に柔道の師範かたがたレスリングを研究して帰朝した庄司彦男五段、部長には喜多教授がなり柔道、剣道、相撲の各部選手を中心として組織され目下明年のオリンピックを目指して猛練習中であるが部員は既に半年の練習を積んだので六月中旬大隈会館で我国最初の公開試合を行ふ事に決定した尚欧米レスリング視察のため柔道選手にして同部の委員なる八田四段を六月末から四ヶ月の予定で派遣する事となつた（朝日新聞、1931年4月28日付朝刊）



図5：発会式の様子①

朝日新聞（1931年4月28日付、朝刊）

このように、早大レスリング部の創設は、「最新の試み」として世間の注目をあびており、オリンピックでの日本人レスリング選手の活躍を期待させるものであった。

発会式が終わると、続く6月10日には、レスリングの公開試合が開催された（朝日新聞、1931年6月10日付、朝刊）。この公開試合は、早大レスリング部が主催したものであり、「これを前にして七日夜庄司彦雄はJ・O・A・Kからレスリングの解説を放送し、レスリングを日本柔道の海外進出であるとして一般によびかけ」（山本・田鶴濱、1937, p. 1301）も行われた。公開試合のプログラムは、表12の通りである。

表 12 : 公開試合のプログラム

主催	早稲田大学レスリング部
日時	1931（昭和 6）年 6 月 10 日（土）18 時～
場所	早稲田大学大隈記念講堂
大会役員	嘉納治五郎（名誉会長） 山本忠興（会長） 喜多壮一郎（副会長） 庄司彦雄（競技役員兼レフリー） 高廣三郎（審判長） 八田一朗（マネージャー）

公開試合のパンフレット（図 6）を元に筆者が作成

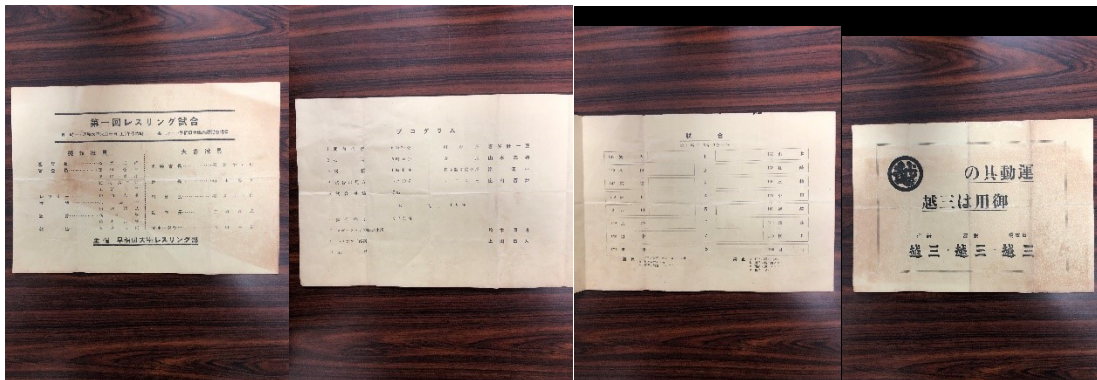


図 6 : 公開試合のパンフレット

試合時間は最大 11 分（5 分・3 分・3 分）であり、勝敗を決する条件は「相手ノ両肩ヲマットニツケタ時」、「負ヲ表示セシ時」、「審査ノ判定ニヨルモノ」と定められた。さらに、「禁止事項」は、「打ツ、蹴ル、突ク」、「相手ノ喉ヲ扼スコト」、「関節ヲ逆ニスルコト」、「指ヲニギルコト」であった。このようなルールの元、全 8 試合が行われた。

公開試合の当日の様子は、次の通りであった。大会は開始予定時間の 18 時から 30 分遅れて、喜多壮一郎（副会長）の「開会の辞」でスタートした。続いて、山本忠興（会長）、岸清一（日本体育協会会長）の挨拶が行われ、最後に庄司彦雄（競技役員兼レフリー：以下、庄司）がルールについて説明を行い、19 時に第一試合が行われた。全試合の対戦結果は、表 13 の通りである。

表 13 : 公開試合の結果

第 1 試合	矢内 vs 山本 (判定で矢内が勝利)
第 2 試合	八田 (嗟) vs 長崎 (技倒で八田 (嗟) が勝利)
第 3 試合	矢内 vs 山本 (判定で矢内が勝利)
第 4 試合	原田 vs 三輪 (技倒で原田が勝利)
第 5 試合	八田 (一) vs 塩崎 (判定で八田 (一) が勝利)
第 6 試合	斎藤 vs 長澤 (判定で斎藤が勝利)
第 7 試合	田中 vs 櫻井 (判定で田中が勝利)
第 8 試合	伊勢 vs 村上 (両者引き分け)
特別試合	坂口 vs 大庭 (両者引き分け)
特別試合	満越 vs 小田 (判定で満越が勝利)

山本・田鶴濱 (1937) を元に筆者が作成

この公開試合で重要なのは、第 8 試合が早大柔道部のエースである伊勢と、早大相撲部のエースである村上の両部の名誉を賭けた戦いであったという点 (山本・田鶴濱, 1937, p. 1301) や、最後の特別試合が国士館専門学校 (現在の国士館大学) の柔道部員 (坂口, 小田) と早大レスリング部の部員の対戦であった点である。また、公開試合終了後には、映画俳優の鈴木傳明による「スポーツマンの映画生活」という講話や映画俳優の上山草人による「ハリウッド漫談」も行われ、「物珍しさも手伝ってか非常な盛会」 (山本・田鶴濱, 1937, p. 1301) となった。このように、柔道部や相撲部の部員の参加が見られたり、また試合後には講話等が行われる等、どちらかと言えばイベントの様相を呈していたことからわかる通り、「当時のレスリングは、日本柔道の延長であると一般もまた当事者も信じて居た」 (山本・田鶴濱, 1937, p. 1301) のである。このような日本初のレスリング部の創設と公開試合の開催を契機に、日本のレスリングの活動が本格化していくことになる。

具体的には、日本で初めてのレスリング部を創設した早稲田大学が中心となり、国際交流試合が盛んに行われた。1931 (昭和 6) 年から 1939 (昭和 14) 年に行われたレスリングの国際交流試合としては、表 14 のようにまとめられる。

表 14：レスリングの国際交流試合

日程	国内 or 国外	実施内容	日本チームの成績
1931年12月- 1932年1月	国内	フィリピン代表との対抗戦	第1戦：4勝0敗 第2戦：4勝0敗 第3戦：2勝1敗2分 第4戦：不明 第5戦：2勝0敗2分 第6戦：2勝0敗2分
1934年1月	国外	ハワイ遠征	第1戦：1勝3敗1分 第2戦：2勝2敗
1934年9月	国内	ハワイ代表との対抗戦	第1戦：5勝0敗 第2戦：4勝2敗
1936年9月	国外	イギリス遠征	第1戦：4勝1敗 第2戦：4勝1敗
1937年7月	国内	アメリカ代表との対抗戦	第1戦：3勝4敗 第2戦：4勝3敗 第3戦：2勝5敗
1937年12月- 1938年1月	国外	フィリピン遠征	第1戦：4勝0敗 第2戦：4勝0敗 第3戦：4勝0敗
1938年7月- 8月	国内	アメリカ代表との対抗戦	第1戦：2勝2敗 第2戦：4勝1敗 第3戦：2勝3敗 第4戦：3勝2敗 第5戦：2勝3敗 第6戦：0勝4敗 第7戦：2勝4敗
1938年11月- 1939年1月	国外	アメリカ遠征	第1戦：5勝2敗 第2戦：4勝3敗

			第3戦：5勝2敗 第4戦：5勝2敗 第5戦：3勝2敗 第6戦：2勝4敗 第7戦：2勝3敗 第8戦：3勝2敗 第9戦：6勝1敗 第10戦：4勝1敗 第11戦：4勝2敗 第12戦：4勝3敗
1938年12月- 1939年1月	国外	フィリピン遠征	第1戦：3勝2敗 第2戦：2勝2敗 第3戦：4勝0敗 第4戦：3勝1敗
1939年10月	国内	汎太平洋選手権参加	4階級実施中1階級制覇 (フェザー級)

新聞記事等^{注12)}を元に筆者が作成

発足間もない時期の早大レスリング部では、「次第に部員数を増加し満々たる覇気に燃えた対外試合熱が高まり」（山本・田鶴濱，1937，p. 1301）が見られた。そこで、「比島チーム招聘計画が樹てられ五月に来朝中の比島拳闘コーチ，サングレーに幹旋方を依頼する一方，早大選手は日比対抗戦にそなへて八月軽井澤で夏期合宿を行つた」（山本・田鶴濱，1937，p. 1301）。また、「日比対抗戦の挙行は十月に入つて正式に決定し，早大選手は緊張の度を加へ十月上旬から戸塚グラウンド上の柔道々場，前田道場を練習場として借用した」（山本・田鶴濱，1937，p. 1301）。このような経緯で1931（昭和6）年12月から1932（昭和7）年1月にかけて，日本におけるレスリングの歴史上「最初の国際試合」（山本・田鶴濱，1937，p. 1301）として日比対抗戦が開催された。フィリピン代表チームと日本チームは表15の通りである。

表 15：日比対抗戦の出場メンバー

フィリピン代表チーム		全日本学生軍		早大軍	
監督	ジュアン・ビネダ	監督	庄司彦雄	監督	庄司彦雄
選手	ジョース・メリコ (114 lb.) ラルド・クラッツ(128 lb.) アーミンゴル・ダトール (132 lb.) アンセルモ・デル・ロサリオ (142 lb.) マグノ・トパシオ(165 lb.)	選手	八田一朗(主将) 根本静夫 番場 (原文ママ) 櫻井尚雄 小玉正己 長崎長衛 難波秀雄 加瀬清 八田嵯武朗 高山森一郎 高橋渡 宮澤米一 矢内 (原文ママ) 高橋時 山本 (原文ママ) 塩崎温 長澤義弘	選手	八田一朗 (主将) 櫻井尚雄 宮澤米一 長崎長衛 難波秀雄 長澤義弘 塩崎温 高山森一郎 根本静夫 八田嵯武朗 矢内 (原文ママ)

山本・田鶴濱 (1937) を元に筆者が作成

こうして日本チームは2チーム編成となっていたものの、「全日本学生軍」が実際に試合をしたのは1931(昭和6)年12月24日の試合のみで、他の試合は「早大軍」がフィリピンチームと対戦した。試合は1931(昭和6)年12月18日に東京で行われたのを皮切りに、名古屋、松本、横浜でも行われ、計6試合行われた。試合結果は表16の通りである。

表 16：日比對抗戦の概要

日付	場所	日本チームの戦績
1931年12月18日	東京・日比谷公会堂	4勝0敗
1931年12月24日	東京・日比谷公会堂	4勝0敗
1932年1月7日	名古屋・名古屋市公会堂	2勝1敗2分
1932年1月12日	松本	不明
1932年1月14日	東京・日比谷公会堂	2勝0敗2分
1932年1月15日	横浜・横浜開港記念会館	2勝0敗2分

山本・田鶴濱（1937）を元に筆者が作成

このように、日比對抗戦は日本側が「比島選手を完膚無き迄に打ち破ると云う好成績」（山本・田鶴濱，1937，p. 1304）で幕を閉じた。また、この日比對抗戦における競技ルールは、1ラウンド5分で計3ラウンド行い、フォールは相手の両肩をマットに3秒間つけた場合に成立するものとされ、「米国流レスリングに可成近いものであつた」（山本・田鶴濱，1937，p. 1303）。

このような日比對抗戦を経て、日本チームは、1932（昭和7）年のロサンゼルス大会に挑んだ。



図7：日本チームによるロサンゼルス大会参加の時の写真

しかし、表17の通り、7名の選手が出場したが全ての選手がメダルを獲得できなかった。

表 17：ロサンゼルス大会の概要

推薦団体	名前	階級	成績
大日本アマチュア レスリング協会	八田一朗	フリースタイル フェザー級	2回戦敗退 (0勝2敗)
	宮崎米一	グレコローマンスタイル ライト級	3回戦敗退 (1勝2敗)
大日本レスリング 協会	加瀬 清	グレコローマンスタイル フェザー級	3回戦敗退 (1勝2敗)
	河野芳男	フリースタイル ウェルター級	2回戦敗退 (0勝2敗)
講道館	鈴木栄太郎	フリースタイル ライト級	2回戦敗退 (0勝2敗)
	小谷澄之	フリースタイル ミドル級	3回戦敗退 (1勝2敗)
	吉田四一	グレコローマンスタイル ウェルター級	2回戦敗退 (0勝2敗)

日本レスリング協会 80 年史編纂委員会（2012）を元に筆者が作成

ロサンゼルス大会における敗戦は、日本のレスリングチームの国際進出を加速させた。ロサンゼルス大会の翌年の 1933（昭和 8）年 12 月から 1934（昭和 9）年 1 月にはハワイ遠征が行われた。メンバーは、表 18 の通り、早大レスリング部のメンバーを中心に構成された。

表 18：ハワイ遠征の日本チーム

役職・階級	名前
監督	八田一朗
マネージャー・バンタム級	八田瑳武朗
主将・ウェルター級	櫻井尚雄
ライト級	小玉正巳
フェザー級	佐藤竹二
ウェルター級	風間栄一

山本・田鶴濱（1937）を元に筆者が作成

1934（昭和9）年1月6日に行われた第1戦は、ハワイ選抜チームを相手に1勝1引分3敗という結果であった。このような結果の原因は、選手のコンディションの不調に加えて、「日本軍は一般に未だ柔道の臭いが抜け切れず、立技では相当な強味を發揮したがグランドレスリングに物足らぬ所があった」（山本・田鶴濱，1937，p. 1309）。続く1934（昭和9）年1月11日に行われた第2戦は、ハワイ大学を相手に2勝2敗という結果であった。

さらに、1934（昭和9）年9月16日と9月23日には、ハワイ代表チームを日本に招待して対抗戦が行われた。1934（昭和9）年9月16日の第1戦は東京日比谷公会堂で行われ、日本チームは5勝0敗で勝利した。さらに同年9月23日に行われた第2戦も4勝2敗という結果で日本チームが勝利した。

このような国際交流試合を経て、日本のレスリングチームは、1936（昭和11）年のベルリン大会に出場した。しかし、結果は表19の通り、2大会連続でメダルを獲得できなかった。

表 19 : ベルリン大会の結果

名前	階級	成績
丹羽幸次郎	フリースタイルバンタム級	2回戦 (0勝2敗)
水谷光三	フリースタイルフェザー級	6位 (2勝1敗)
風間栄一	フリースタイルライト級	4回戦敗退 (3勝1敗)
増富省一	フリースタイルウェルター級	2回戦敗退 (0勝2敗)
吉岡秀市	グレコローマンバンタム級	3回戦敗退 (0勝2敗)

日本レスリング協会 80 年史編纂委員会 (2012) を元に筆者が作成

このような結果に対して、八田は、「技術の点においていさゝか不安を感じた」(八田, 1953, p. 17) と述べる通り、技術習得を日本人選手の課題として認識するようになった。

その後も、日本チームは海外遠征を積極的に行った。上述のベルリン大会後に日本チームは、帰国せずにそのまま欧州各地を転戦した。この遠征についての詳細な記録は確認できないが、1936 (昭和 11) 年 9 月にイギリスで試合を行ったことは確認できる (八田, 1953)。さらに、1936 (昭和 11) 年 11 月には、丹羽幸次郎 (ベルリン大会日本代表) が単身アメリカへ渡り、八田も同年 12 月にアメリカへ渡って、現地のコーチと交流したほか、日米対抗戦の交渉も行われた (八田, 1953)。

このような国際交流試合の中で、最も重要なのが 1937 (昭和 12) 年 7 月に行われた日米対抗戦である。当時のレスリングのアメリカチームは、ベルリン大会のチャンピオン等で構成されており、いわゆる世界最強チームであった。来日したアメリカチームのメンバーは表 20 の通りである。

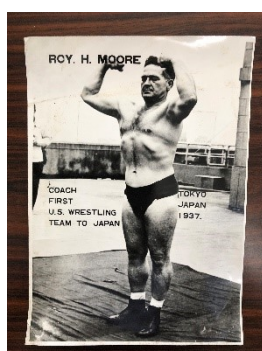


図 9 : 1937 年に来日したアメリカチームの監督ロイ・モーア氏から八田に送られた写真

日米対抗戦は計 3 戦行われた。まず、1937 (昭和 12) 年 7 月 13 日に日比谷大音楽堂 (東京) で試合が行われた第 1 戦は、日本チームが 3 勝 4 敗で敗れた。続く同年 7 月 17 日に兵庫の阪急西宮球場で行われた第 2 戦は、4 勝 3 敗で日本チームが勝利した。最後に、同年 7 月 24 日に日比谷大音楽堂 (東京) で行われた第 3 戦は、2 勝 5 敗で日本チームが敗れ、日米交流戦はアメリカチームが 2 勝 1 敗で勝ち越した。さらに、日本チームの海外遠征は続いた。1937 (昭和 12) 年 12 月から 1938 (昭和 13) 年 1 月にはフィリピン遠征が行われ、八田を団長とする日本チームは「全勝の成績」(八田, 1953, p. 26) を収めた。さらに 1938 (昭和 13) 年には、再びアメリカチームとの対抗戦を行ったり、アメリカとフィリピンで同時遠征を行ったりした。また、表 21 で示したメンバーで挑んだ 1938 (昭和 13) 年 11 月からの同時遠征では、アメリカで「10 勝 2 敗の輝かしい記録」(八田, 1953, p. 28) を残し、フィリピンでも全勝という結果を日本チームは収めた (八田, 1953, p. 28)。

表 21 : アメリカとフィリピンの同時遠征に参加した日本チームのメンバー

遠征先（期間）	役職・階級	名前	所属等
アメリカ (1938年11月- 1939年1月)	主将兼引率	風間栄一	早稲田大学
	選手	太田哲二	早稲田大学
		林政時	早稲田大学
		道明晃	早稲田大学
		稲葉利勝	慶應義塾大学
		楠林栄	早稲田大学
		松内則明	早稲田大学
フィリピン (1938年11月- 1939年1月)	監督	山本千春	早稲田大学 OB
	選手（主将）	菊間寅昌	慶應義塾大学
	選手	亀井董佳	明治大学
		畠山達郎	専修大学
		今井晃	早稲田大学

八田（1953）を元に筆者が作成

この1938（昭和13）年11月からの同時遠征は、アメリカでは「10勝2敗の輝かしい記録」（八田，1953，p. 28），フィリピンでは「全勝」（八田，1953，p. 28）という成績を日本チームは収めるに至った。さらには、1939（昭和39）年10月には、汎太平洋選手権（オーストラリア，フィリピンが参加）が開催されたが、それ以降は日本における戦局の悪化を受けて国際試合も行えなくなった。このように、早稲田大学レスリング部の創設以降、海外の選手との国内外での対戦を通して強化が図られたが、それらがロサンゼルス大会やベルリン大会におけるメダルの獲得には結びつかなかった。

このように、早大レスリング部の創設以降、国際試合の実施などによる競技力向上を視野に入れた展開がなされる一方で、国内における統括団体による整備も進められた。まず、1932（昭和7）年4月に、早大レスリング部で主将を務めた八田が大日本アマチュアレスリング協会^{注13)}を設立した。一方で、早大レスリング部の創部に関与した一人である庄司は、レスリング競技のほかプロレスも管轄対象とする大日本レスリング協会を設立した。さらにこの2つの組織に、それまでオリンピック競技大会のレスリング競技に選手を派遣し

てきた講道館を加えた 3 つの組織が、ロサンゼルス大会へのレスリング選手の派遣の権利をめぐる争うこととなる。この対立に対して、大日本体育協会から勧告が行われ交渉協議の場が設けられたものの、協議は決裂した。その結果、大日本レスリング協会は独自にロサンゼルス大会への派遣選手を選考する予選会を実施し、講道館も独自に派遣選手を選考する意向を示す等、ロサンゼルス大会への日本代表選手の選考は難航した（朝日新聞，1932年4月19日付，朝刊：朝日新聞，1932年5月14日付，朝刊：読売新聞，1932年4月21日付，朝刊）。こうした事態に、大日本体育協会^{注14)}（以下、体協）は、組織の統制が取れていないことを理由にロサンゼルス大会へのレスリングの日本代表選手の派遣の取り止めに検討するに至った。しかし、結果的には、朝日新聞の運動部次長を務めていた山田午郎の仲介のもと、上述の 3 つの団体からそれぞれ出場選手を出すことで合意が得られ、前出の表 17 の選手が 3 団体それぞれから派遣され出場した。このように、国内の組織体制づくりは進められてはいたものの、円滑には進められていなかった。

しかし、ロサンゼルス大会後には、大日本アマチュアレスリング協会がレスリングに関する国内の統括組織として位置づき、国内外におけるレスリングの活動も活発化していく。例えば、国内では、昭和戦前期までに早稲田大学、明治大学、慶應義塾大学、専修大学、立教大学、日本大学、拓殖大学といった 7 つの大学でレスリング部が創設され各大学間では対抗戦^{注15)}も行われていたが、1935（昭和 10）年から早稲田大学、明治大学、慶応大学の 3 校によるリーグ戦が実施された。1936（昭和 11）年には専修大学がリーグ戦に加わり、以降、立教大学、日本大学、拓殖大学もリーグ戦に加わり、順次その規模を拡大させていった（東日本学生レスリング連盟，2016，pp. 22-24）。また、1934（昭和 7）年からは全日本選手権が開催されるようになった。国内の組織整備も進められた。1935（昭和 8）年に大日本アマチュアレスリング協会が体協への加盟を承認され、日本におけるレスリングの統括団体として認定されることになる。

このように、日本における戦前期におけるレスリングの展開を概観した時、国際試合の実施や国内の統括競技団体の設立といった点が確認できる。この点は、前項で確認した戦前期におけるスポーツの展開状況に関する従来の指摘とも適合する点であり、日本におけるレスリングの展開が戦前期におけるスポーツの展開と軌を一にするものでもあったことがうかがえる。しかし、このような国内外におけるレスリングの活発な活動は、他のスポーツと同様に戦争の影響を受けて衰退していくこととなる^{注16)}。1937（昭和 12）年には、盧溝橋事件を機に勃発した日中戦争により、同年 11 月に予定していたフィンランド選手団の来日

が中止を余儀なくされた。1938（昭和13）年には、「国民精神作興体育大会」において「紀元二千六百年奉祝明治神宮奉納レスリング大会」を実施することが試みられるが、1943（昭和18）年5月に開催された関東学生リーグ戦を最後に活動は行われなくなった。

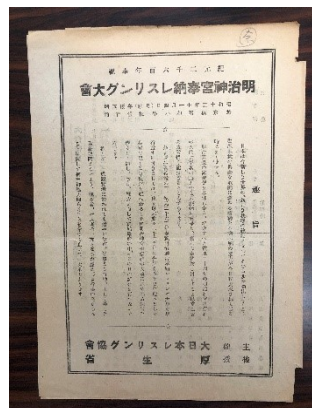


図10：紀元二千六百年奉祝明治神宮奉納レスリング大会のパンフレット

そのうえ第二次世界大戦下には、レスリングが外来文化であったことから「敵性スポーツ」（日本レスリング協会，2012，p.52）とのレッテルを貼られることになり，戦時体制下においてレスリングは衰退していった。

第2節：「正統」なレスリングという理念

本節では、前章で整理したレスリングの草創期において、八田はどのような理念の元でレスリングを移入し、強化を目指したのであろうか、という点を検討する。なお八田は、日本におけるレスリングの歴史について述べる際に自らが同志と共に早稲田大学レスリング部を創設したことをもって「正統史の第一頁」（八田，1935，p. 8）と述べている。ここで正統史という言葉を用いていることから、八田はレスリングの草創期における自らの実践を日本におけるレスリングの正統史と位置付けていたと推察される。つまり、自らの実践が正統なレスリングであると考え、同時に正統なレスリングを理念として捉えていたことがうかがえる。ただし、「正統」なレスリングの内実について八田は明言していないため、以下では八田による当時の日本のレスリングに対する批判内容をもとに、「正統」なレスリングの内実を検討する。

第1項：プロレスとの混同に対する批判

草創期におけるレスリングに対する八田の批判の1点目は、プロレスとの混同である。八田が1932（昭和7）年に大日本アマチュアレスリング協会を創設した際に、その目的を「アマチュアレスリング競技ノ普及発展ヲ図リ日本精神ノ高揚ヲ期スル事」（図11：大日本アマチュア・レスリング協会規約）と宣言した。

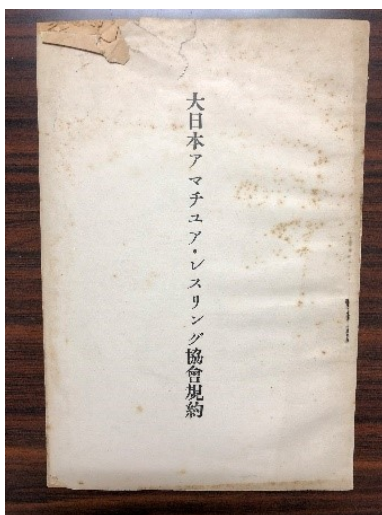


図11：大日本アマチュア・レスリング協会規約の冊子

しかし、当時の日本人が行っていたレスリングは、以下のような状態であった。

フリースタイルの内にプロフェッショナルレスリングがあつてアメリカなどでは非常に盛で蹴つたり、打つたり、突いたりするが、殆ど八百長であつて、レスリングマッチでなくてレスリングショーである（八田，1938，p. 5）

このように、レスリングの普及・強化を通じた日本精神の高揚を目的に協会を創設した八田は、実際のレスリングがプロレスと混同されて見世物となっていることを批判的に捉えていた。

このような批判は、八田と共に早大レスリング部を創設した庄司^{註17}との決別につながる。1930年代の早大レスリング部の創設、第1回公開試合の開催、そして日比對抗戦の開催といった活動の中心は早大レスリング部の部員であつた。この時期の早大レスリング部は、「庄司コーチをレスリング普及宣傳上の首班とし、八田主将は、技術上實際的の第一人者であり、山本千春はレスリング技術研究家」（山本・田鶴濱，1937，p. 1301）という構成であり、活動の実質的な権限は庄司が担っていた。しかし、1931年に行われた日比對抗戦後に「早大レスリング部コーチの庄司彦雄は或事情の為早大レスリング部から離れなくてはならなくなつた」（山本・田鶴濱，1937，p. 1305）。ここで言う「或事情」とは金銭問題である。日比對抗戦の目的は、翌年にロサンゼルスで開催予定であつたオリンピック競技大会に向けて、「国際的な雰囲気慣れておく」（八田，1965，pp. 91-92）ために行われたため、財源はすべて早稲田大学野球部や、フィリピン選手たちが宿泊したホテルを経営する会社、フィリピン選手たちに支給した洋服屋などからの借金によるものであつた（八田，1965）。そのため、終了後にフィリピン選手団の帰国のための旅費が不足する事態に陥つた。このような事態に対して、主催者の庄司は逃げてしまい、八田が責任を負うことになった。結果的に八田は、喜多壯一郎（部長）や田中穂積（早稲田大学総長）等の協力の元で問題を収束させたが、その際八田は、「今後いっさい庄司とは縁を切ること」（八田，1965，p. 97）を条件に早稲田大学の協力を得たため、八田と庄司は決別することになった。その際、庄司による早大レスリング部と決別を示す「証文」は、以下の図12の通りであつた。

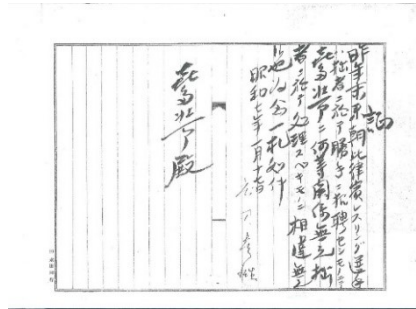


図 12 : 庄司彦雄による「証文」の写し

このような金銭問題を原因とした庄司との決別は、八田にとってレスリングの自立につながる事象であった。というのも、庄司こそプロレスとレスリングの区別を曖昧に捉えていた代表的な人物だからである。

庄司は、1931年に山本千春と共著で発刊し、日本で最初に発刊されたレスリングに関する著作である『レスリング』（三省堂）の冒頭において、以下のように述べている。

大正十年春、世界名声のあった中量選手アド・サンテルが来朝し、講道館にチャレンジした時には、柔道家の多くがレスリングを知らなかつたことによつて、滑稽なくらゐ大騒ぎをやつた。そのとき弱冠血氣の自分等が出て、彼を九段靖国神社の相撲場に迎へて戦つたものだつた。十年後の今日、斯道の発展に志すに至つたことはまことに感慨深きものがある（庄司・山本，1931，p. 2）

ここで庄司が言及しているアド・サンテルとは、1921（大正10）年に来日し、講道館柔道との異種格闘技戦を行った人物である。



図 13 : 1921 年にアド・サンテルが来日した時の集合写真

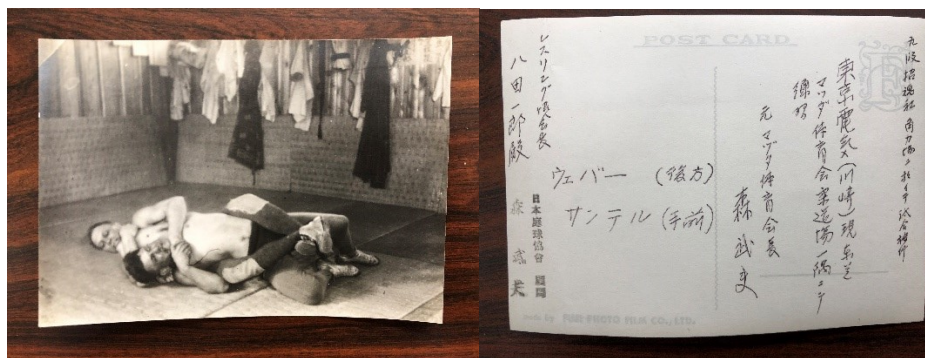


図 14 : 1921 年にアド・サンテルが来日した時の写真

アド・サンテルは、1888（明治 21）年にドイツで生まれ、1904（明治 37）年にアメリカにわたってプロレスへと参入し、1910（明治 43）年にはライト・ヘビー級の世界王者となった人物である（田鶴濱，1971）。庄司は 1921（大正 10）年 3 月 6 日にサンテルと試合を行ったが、その際、勝負方法については、両者柔道着を着用し、1 ラウンド 20 分の 3 本勝負とし、柔道の投げ技による一本やレスリングのフォール勝ちは設けず、相手が敗北を認める合図を出すか気絶するかをもって勝敗を決するという取り決めで行われた（朝日新聞，1921 年 3 月 3 日付，朝刊）。この試合でアド・サンテルはタックルで庄司を倒しにいくか庄司に投げられるとすぐに肘や足首、さらに首の関節を捻りにいくといった戦い方をしていた（丸島，2006）。庄司とアド・サンテルの試合結果は最終的に引き分けとなるものの、日本においてレスリングが普及されていなかった当時、この試合は庄司にとってレスリングを知る重要な契機となった。庄司は試合後、帰国したアド・サンテルを追って渡米し、現地でアド・サンテルと再戦する機会はなかったものの、現地で行われていた異種格闘技戦を

通じてレスリングという格闘技への理解を深めて 1929 (昭和 4) 年に帰国した (藪, 2010).
そして庄司は帰国後, レスリングについて紹介する際に, 以下のように述べている.

競技方法は, 相手と組んで, 其の背中を完全にマットに付けるか或は相手が参つたと言つた時勝負が決められ, 時間には別に制限は無く, 時には三十分宛競技して其の間に休みを入れると言つた形式も用ひられるが大體柔道の所謂一本を取つた時三分とか五分とか休息し第二本目を始めると言ふ具合に行はれるものであるから時には一時間でも二時間でも或は四五時間にも亘つて熱烈な試合が演ぜられることがある・・・(中略)・・・ローマンローラン即ちアマチュア型, キャッチアズキャン即ち自由形の二つの型があり前者はルールが非常にやかましいが相手の背中をマットに付けることに依つて勝敗が決められ, 後者は締めることは禁じられているが逆手でも何でも凡ゆる手を用ふる事が出来る. (読売新聞, 1930 年 11 月 29 日付, 朝刊)

このような庄司の説明から, 庄司はレスリングのフォールという相手の背中を付けて勝敗を決する方法やレスリングの中にいくつかの種類があると認識していたことが確認できる. しかし, 相手が降参の合図を出す事が勝敗を決める方法としてレスリングにあるという説明や「キャッチアズキャン即ち自由型」(読売新聞, 1930 年 11 月 29 日付, 朝刊)は所謂フリースタイルを指すものと考えられるが, 庄司の「逆手でも何でも凡ゆる手を用ふる事ができる」(読売新聞, 1930 年 11 月 29 日付, 朝刊)というフリースタイルへの説明には, 相手を倒すために手段の制限がほとんどないプロレスとレスリングとの明確な区別をしていないことが見受けられる. このように, 庄司にとってのレスリング理解は, 「蹴つたり, 打つたり, 突いたりする」(八田, 1938, p. 5) という八田が述べるどころの「レスリングショウ」(八田, 1938, p. 5) に近いものであり, この点で八田の対象としていたレスリングとは異なるものを庄司が想定していたことがうかがえる.

八田はこうした, 庄司のプロレスとレスリングの区別を曖昧に捉えていたことに対して批判的な見解を示すだけでなく, ロサンゼルス大会の選手選考の議論の場で庄司と顔を合わせることを拒否したり (山本・田鶴濱, 1937, p. 1307), 庄司の作成した「証文」を保存したり, 庄司の日本のレスリングへの貢献を語ろうとしなかったりする等, 徹底して庄司と距離を置く姿勢を示した. このような八田の姿勢は, 八田が日本のレスリングの起源について記述する際に, 「同志山本千春等」(八田, 1935, p. 8) とともに早稲田大学レスリン

グ部を創設したことを挙げており、庄司については何も言及していない点にも表れている。これ以降の八田の著書においても、日本におけるレスリングの起源に関する記述に庄司の関わりは言及されておらず、八田が庄司との関係性を好意的に受け止めていたとは言い難い状況が生じていたことがうかがえる。そして、八田が庄司のプロレスとレスリングの区別を曖昧に捉えていたことに対し批判的であったことを踏まえると、八田はレスリングをプロレスとは異なるものと捉えることを重視していたと考えられる。

第2項：柔道との混同に対する批判

草創期におけるレスリングに対する八田の批判の2点目は、柔道との混同である。1932（昭和7）年のロサンゼルス大会では、他の競技種目における日本人選手の活躍の一方で、レスリングでは、宮崎米一、加瀬清、小谷澄之の3名が1勝2敗の成績で、残りの4名、すなわち、八田一朗、河野芳男、鈴木栄太郎、吉田四一は0勝2敗という結果に終わった。八田は、このような結果の「最大原因は柔道家であると云ふ意識が強すぎた事であつた」（八田、1932b, p. 91）と考えた。実際に、ロサンゼルス大会におけるレスリングの日本代表選手は柔道家を基盤としており、大会前には「日本内地に於ける試合或は外国遠征の際に於ける試合などの経験から推して柔道家として相当に自信を持っていた」（八田、1932b, p. 91）。しかし、実際のロサンゼルス大会では、以下の記述の通り、「今までの勝手と全然ちがつて」（八田、1932b, p. 91）いた。

簡単に投げてフォールすればよいと思つてゐたが、試合をしてみると殆んど皆投げる事が出来なかつた。それから我々はアメリカンスタイルのレスリングをやつてゐた為結果からみて帰つて悪かつたと思ふ。フォールの点でオリムピックルールと可成異つてゐたのでアメリカンスタイルのレスリングに使へる業がオリムピックのレスリングにはタッチ（フォール）しそうであぶなくて全然使へなかつた事等である。グリコローマンスタイルではローリングタッチでもフォールとしたフリースタイル（キヤッチアズキヤッチキヤン）ではローリングタッチをして直ぐ返つてもフォールとされた。此点でアメリカの選手も可成苦しんだ様であつた。（八田、1932b, pp. 91-92）

このように八田は、ロサンゼルス大会における日本人選手を、レスリングのユニフォームを着て柔道をしたという意味で「裸で柔道をした」（八田、1932b, p. 92）と揶揄し、「柔

道の殻から抜け切れなかつた事」(八田, 1932b, p. 92)を批判したのである。このような「柔道家であると云ふ意識が強すぎた事」(八田, 1932b, p. 91)に関して八田は、次のように述べている。

日本人は生活様式の関係より日本人特有の足腰の力が自然と養成されている, レスリング研究に当って此の力を十分に活用したならば世界のレスリング界に君臨する事もさして難事ではないと思ふ。然しながら柔道さへ強ければレスリングが強いと言ふ事は決して言えない(八田, 1935a, pp. 1-2)

このように, レスリングが柔道をする日本人に適したスポーツであるが, 単純にレスリングを柔道と結び付けて考えれば強くなるというわけではない, と八田は考えるようになった。このような考えは, 第1回全日本選手権で早大レスリング部所属の19歳の風間栄一が講道館所属の29歳の矢田部勇治を倒した件を契機に, 八田にとってさらに強い確信となっていく。八田は, この試合の様子を以下のように振り返っている。

両者必死の顔面物凄く, 一回のスタンドレスリング矢田部腰投に出た處を風間を上手に背後にまわつてグランドレスリングに攻めた。矢田部此れより逃がれる為非常に苦戦幸じて逃がれたが可成り疲勞の色が見へ第二回のグランドレスリングは矢田部攻撃であつたが如何とも手の下し様なく, 第三回では風間の勇敢な攻撃に機度か矢田部危険に陥る。第四回スタンドレスリングでは, 矢田部最早殆んど戦闘力を失つて判定負となつた。(八田, 1934, p. 31)

このように, レスリングを専門的に行う19歳の風間と柔道家で29歳の矢田部の試合において, 「柔道の試合なら恐く矢田部一分と風間を持たせて置くまいと思ふが, レスリングは全く反対で風間の為めにすつかり翻弄されてしまつた」(八田, 1934, p. 31)のである。つまり, 風間栄一の勝利は, 八田にとってレスリングを柔道と混同せずにそれぞれ独立して捉えることが競技における勝利へと結びつくことを実証した事例であつたといえる。この点から, 八田がレスリングを柔道と混同せずにそれぞれ独立して捉えることを理念としていたといえるだろう。

第3項：日本人選手のルールに対する批判

草創期におけるレスリングに対する八田の批判の3点目は、日本人選手がレスリングのルールを十分に理解していない現状に対する批判である。先述した通り、1931（昭和6）年に早大レスリング部が創設されると、同年6月10日に同部主催のもと、日本で最初のレスリング公開試合が開催されたが、この公開試合では階級を区分する「ウエイトやルールも実に出鱈目であつた」（山本・田鶴濱，1937，p. 1301）。このような日本人のレスリングのルールに対する理解が不十分な状況は、その後のロサンゼルス大会における日本人選手の敗戦にもつながっていく。八田は、ロサンゼルス大会における日本人選手の様子を、以下のよう

アメリカンスタイルのレスリングをやってゐた為結果からみて帰つて悪かつたと思ふ。フオールの点でオリムピックルールと可成異つてゐたのでアメリカンスタイルのレスリングに使へる業がオリムピックのレスリングにはタッチ（フオール）しそふであぶなくて全然使へなかつた事等である。グリコローマンスタイルではローリングタッチでもフオールとしたフリースタイル（キヤツチアズキヤツチキヤン）ではローリングタッチをして直ぐ返つてもフオールとされた。此点でアメリカの選手も可成苦しんだ様であつた（八田，1932b，pp. 91-92）

それからもう一つ大きな敗因はオリムピックルールがはつきり解つてゐなかつた事で試合後に解つたルールなども澤山ある。ルールが解らなかつたと云ふ事は全く我々選手やコーチに大なる責任があるが、何にしる日本のレスリングは歴史が非常に浅く従つてレスリングの研究が充分でなかつた為である。（八田，1932b，p. 93）

このように、アメリカンスタイルのレスリングとオリンピックのレスリングにはルールに違いがあり、八田は、「今後日本におけるレスリングは是非ともオリムピックルールに従つて研究しなければならない」（八田，1932b，p. 92）という問題意識を抱いた。この点から、八田は日本人選手がレスリングのルールに違いがあることを認識し、オリンピック大会において採用されるルールに基づいたレスリングを実践することを理念としていたと考えられる。

第4項：レスリングの統括組織に対する批判

草創期におけるレスリングに対する八田の批判の4点目は、レスリングの統括組織に対する批判である。八田は、1932（昭和7）年にロサンゼルス大会で敗退した原因を、以下のように指摘している。

それからもう一つ日本から色々の事情の爲ヂヤツヂを出せなかった。それが爲め審判の事についても大分不利な事があつた。小谷の場合私の場合等再三誤審をしたので日本側からプロテストをして、今後日本選手出場する試合には前の問題を惹起した試合のレフリー、ヂヤツヂは今後関与しないと云ふ覚書をオリムピツクレスリングコンミテイから取ったけれども我々は非常な不利な試合をした（八田、1932b, p. 93）

このような八田の大会運営に対する批判的な態度は、続く1936（昭和11）年のベルリン大会でも同様であった。具体的に、八田は次のように述べている。

第二日のライト級の試合は、午後七時より開始、風間はその第三番目の試合に出場することをオフィシャルに発表していたにもかかわらず、試合は突然、午後二時に変更され、控室にねかせてあった風間を引き起してドイツのエールと戦わせたが、一番目、二番目に出場するアメリカ、カナダの選手はすでに食事に帰っておらず、二試合とも試合不可能となったので、これら不出場選手に負けを宣した。しかし夜に入って前記の二選手に試合をやらせ、試合の手續運行などにきわめて不当なものがあつた。前記二選手に後で出場を許可するものなら私は当然風間に出場させないはずであつたが、マットの上で正式に不出場選手に負けを宣したので、私は風間に試合をさせた。後刻この始末が明らかになったので、会長シュメズ氏に嚴重な抗議をし、逃げまわるのをつかまえて三日がかりで弁明書一本をとってはみたが後の祭である。（八田、1953, pp. 41-42）

このように、試合開始時間の突然の変更や、唐突な試合進行に対応できなかった競技参加者の試合を改めて時間を設けて行うといった無秩序な様相がベルリン大会において見られた。このように八田は、ロサンゼルス大会やベルリン大会において日本人選手に対して行われた不正なジャッジを目の当たりにして、統括競技団体が「無統制」（八田、1953,

p. 42) である点を問題視した。この点から、八田はレスリングが国際的な統括競技団体によって組織的に展開されていることを理想としていたと考えられる。

第5項：「正統」なレスリングの意味

本節では、八田が当時のレスリングの状況にどのような批判を行っていたかを検討してきた。その批判を整理すると、八田はレスリングがプロレスや柔道と混同されている点、また、日本人選手がレスリングのルールを十分に理解していない点、さらに、統括組織の整備が不十分である点を批判していた。そして、これらの批判から、八田はレスリングをプロレスや柔道と区別したものとして捉え、オリンピック競技大会のルールで日本人選手が活躍することを目指していたことがわかる。

では、八田はそもそもレスリングをどのようなものとして理解していたのか。この点については、1935年に出版された「師範大学講座体育」という書籍の第1巻に所収されたレスリングに関する八田の解説文章の中から読み取ることができる。ちなみに「師範大学講座体育」は全14巻からなり、野球や器械体操といった種目別の概略や欧米および日本の体育史や衛生学といった学術分野の紹介がなされている書籍である。この書籍の中で、八田は、レスリングについて次のような解説をしている。レスリングは、互いに相手を投げ合って相手の両肩を地面につけようと競い合う競技である。そして、エジプトのナイル川中流付近に位置するベニハッサンの寺院にある墓石にレスリングの試合風景を描いた壁画が確認できることから、レスリングは「スポーツの中最も原始的で且普遍的なものである」(八田, 1935, p. 6)。さらに、レスリングは古代ギリシアへと伝わり古代オリンピックにおける実施種目として行われると競技の分化も見られる様になり、以後、古代ローマへの伝播や中世においてもレスリングに関した多くの文献が確認できることから「各地各様のレスリングが行われ今日に至ったが原則は大体同じ」(八田, 1935, p. 8)として、両肩を地につけて勝敗を決する点が共通している。このように、八田はレスリングの起源や歴史的変遷を説明する中で、レスリングが人類史上においても古くから見られる普遍的な身体運動としての一面をもつことを示していた。これに加えて、人類史上において普遍的な身体運動でありながらも、古代ギリシャにおいて競技としての体裁が徐々に整えられて今日まで伝わったものがレスリングであると八田は述べている。つまり、相手を仰向けに地面に押さえつけるという格闘形態は世界各地で様々に確認できる中、レスリングはあくまでも西洋において発達した身体運動文化であると八田は理解していた。このような八田のレスリングは普遍的な身体運

動であるが競技としては西洋において発達した、という理解は、レスリングと柔道や相撲の技術的な類似点について言及する文章においても、以下のように示されている。

然しながら柔道さへ強ければレスリングが強いと言ふ事は決して言へない、筆者は柔道家であるが決して角力に強いと言ふ事は言へない、角力取に柔道着を着せて柔道をやるなら楽に投げる事も出来又首を絞る事も出来ようが一度裸で土俵に上つたら恐く十秒と土俵の上にいる事は出来まい、それと同様レスリングに就いても同じ事が言ひ得るのである。レスリングにはレスリングのルールがあり、レスリングの練習法があり、レスリングのテクニックがあるのである、此處に於てレスリングの存在意義があり研究の価値を認めるのである。(八田, 1935, pp. 1-2)

このように、西洋由来のスポーツとしてレスリングを理解する八田は、柔道や相撲を経験していることがそのままレスリング競技における高度な競技力へと結びつくわけではないと述べている。ここでは例として柔道競技選手と力士が挙げられており、それぞれの競技は各々の競技規則に応じた技術や練習が成り立っている以上、柔道と相撲のどちらが普遍的な強さを有しているかを比較することはできないという八田の立場が看取できる。この点について「師範大学講座体育」の本文で八田は、1928年のアムステルダム大会や続くロサンゼルス大会においてレスリング競技に出場した柔道の高段者がメダルを獲得できなかったことを例に挙げて、「筆者はレスリングは柔道と似てゐるが全く異なるものである事を此處に断言して置く」(八田, 1935, p. 2)と述べている。

このような八田のレスリングに対する理解と八田の批判を踏まえると、八田の理想とする「正統」なレスリングの要点がより明瞭となる。八田は、西洋由来のレスリングを普遍的な身体運動として理解していたことから、プロレスや柔道等のレスリングと類似する技術や競技形態のスポーツをもとに理解することを批判し、西洋で行われているレスリングの技術や競技形態をそのまま理解することを目指していたのである。つまり、「正統」なレスリングとは、西洋において用いられている技術やルールをそのままに受け入れて実践されるレスリングへの取り組み方を指すものであるといえるだろう。このような八田の理念は、「レスリングにはレスリングのルールがあり、レスリングの練習法があり、レスリングのテクニックがある」(八田, 1935, p. 2)という言葉にも端的に表現されている。そして、上述のように「正統」なレスリングという理念の内実を捉えたとき、八田による日本人選手の

ルールの無理解に対する批判は、レスリングを行ううえで「正統」なルールの理解を日本人選手に求めたものであり、統括組織に対する批判も、参加者が決められた規則のもとに公平に競い合うことを保証するスポーツとしてのレスリングのあるべき姿を求めたものであったといえる。このように考えると、日本人選手のルールの無理解や統括組織の不十分な統制に対する八田の批判は、レスリングが近代スポーツとしての基礎的な条件を備えるために必要な要素をもつように、競技者ないし国際的な組織にも働きかけたといえよう。この点から、「正統」なレスリングとは、西洋において用いられている技術やルールそのままに実践され、レスリングに関わる競技者や組織運営に携わる人々が同一の技術やルールを受け入れるという近代スポーツの基本的な原則を理解している状態であり、レスリングの自立化と言い換えることができよう。そして、このように示された「正統」なレスリングという八田の理念は、次節で検討するが、レスリングに特有のルールや技術、練習方法の探求といった八田の実践につながっていく。

第3節：「正統」なレスリングの実現に向けた実践

前節では、草創期における八田の理念である「正統」なレスリングが、レスリングの自立化を意味していたことを明らかにした。そこで本節では、八田がどのように「正統」なレスリングを実現しようとしたのか、という点について検討する。

第1項：カタカナ語によるレスリングの専門的用語の紹介

前述した通り、八田は、1935年に発刊した「師範大学講座体育」の第1巻においてレスリングについての概略を述べている。その中で、レスリングの階級を表22の通り説明している。

表22：八田一朗の説明するレスリングの階級

レスリングの階級
フライウエイト（111ポンド（1b.）以下）
バンタムウエイト（123ポンド（1b.）以下）
フェザーウエイト（134ポンド（1b.）以下）
ライトウエイト（145ポンド（1b.）以下）
ウェルターウエイト（158ポンド（1b.）以下）
ミッドルウエイト（174ポンド（1b.）以下）
ライトヘビーウエイト（191ポンド（1b.）以下）
ヘビーウエイト（191ポンド（1b.）以上）

八田（1938）を元に筆者が作成

ここでは、すべての階級が「ウエイト」とカタカナ語で表記され、また体重を示す単位は、「ポンド（1b.）」が用いられていた。次に、レスリングの種類について表23の通り、紹介されていた。

表 23 : 八田一朗の説明するレスリングの種類

レスリングの階級	
グリコ・ローマン・スタイル	
キヤッチ・アズ・キヤッチ・キャン・スタイル	

八田（1938）を元に筆者が作成

上記の通り、2つの種類の存在が示されたが、類型を説明する際、「型」ではなく、用いられたのは「スタイル」という表記であった。さらに、レスリングの試合進行について表 24 の通り、紹介されていた。

表 24 : 八田一朗の説明するレスリングの試合進行

レスリングの試合進行	
スタンドレスリング	10分
グラウンドレスリング	3分
グラウンドレスリング	3分
スタンドレスリング	4分

八田（1938）を元に筆者が作成

ここでも、すべて「スタンド」および「グラウンド」というカタカナ語を用いて表記し説明がなされた。そして、試合を成立させるために必要な審判員について表 25 の通り、紹介されていた。

表 25 : 八田一朗の説明するレスリングの試合を成立させるために必要な審判員

審判員	
レフリー	1名
ジャッジ	2名

八田（1938）を元に筆者が作成

ここでもカタカナ語表記を用いての紹介である。これらに加えて、レスリングの練習につ

いては「トレーニングに就いて」（八田，1938，p. 14）との説明がなされていた。

上記の通り，八田は，レスリングを紹介する際，レスリング競技のルールにおいて規定されている階級については，「ポンド (lb.)」という単位を用いて説明し，さらには，レスリングの専門的用語の説明にあたっては，あくまでも西洋で使用されている用語をカタカナ語にして表記していた。このことは，先行研究の検討（序章第2節第1項）において整理した通り，外来文化としてのスポーツが，教育の観点から当該スポーツに関する用語の日本語化が遂げられたことが，日本の変容の基準の一つとして示されたことを踏まえると，八田が西洋で使用されている用語をカタカナ語にして表記して説明したことは，日本におけるスポーツの異なる受容過程の可能性を示唆していると考えられる。

第2項：欧州遠征

前述の通り，早大レスリング部を中心としたレスリングの日本チームは海外交流試合を積極的に行った。これらの海外交流試合を先導したのは八田であったが，特に八田にとって重要だったのが1930年代に三度行った欧州遠征である。八田が欧州遠征を行った背景には，上述のレスリングが柔道やプロレスと混同されていたり，日本人選手が十分にルールを理解していないという日本のレスリングの現状があった。このような現状に対して八田は，「オリンピック優勝を夢見つゝ」（八田，1932a，p. 30）も，「日本のみの研究では何となく物足りないしまた，米国のレスラーの強味は既に経験があるので，此度は欧州のレスラーに当つてみたい」（八田，1932a，p. 30）と考えた。

一度目の欧州遠征は，ロサンゼルス大会の前年の1931年6月28日から10月10日に行われた。一度目の欧州遠征の詳細は，次の通りである。なお八田は，この遠征に際して『渡欧日誌』（図15）を作成しており，それによれば，八田の遠征の経路は，図16の通りである。

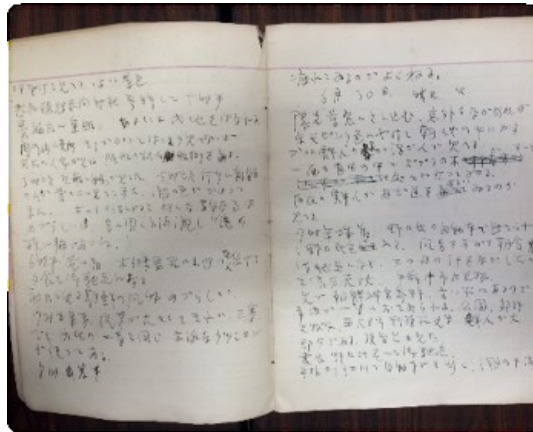
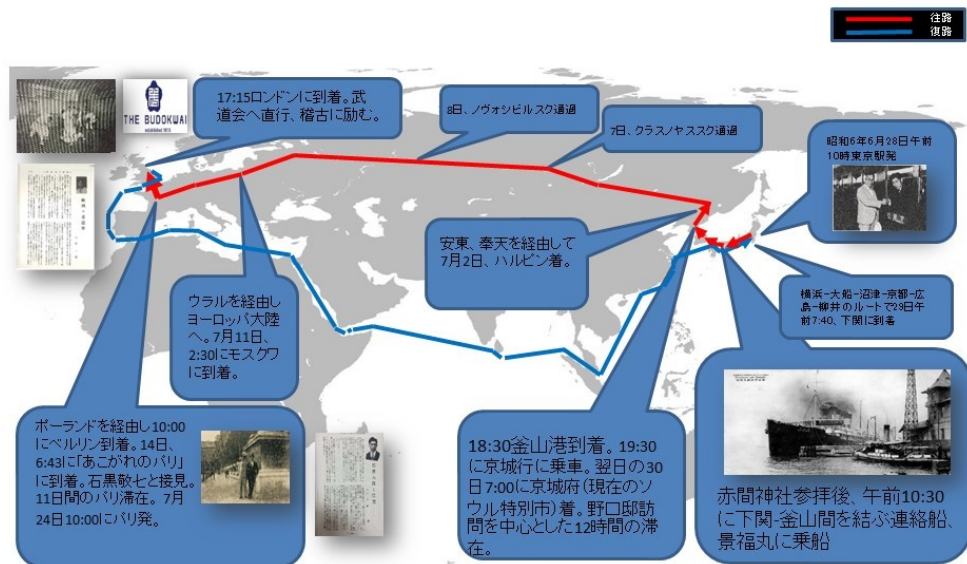


図 15 : 八田一朗の渡欧日誌



八田の欧州日誌と日本郵船欧州航路図を元に筆者が作成

図 16 : 八田による第一回欧州遠征の経路

このように、第一回欧州遠征はシベリア鉄道を利用し欧州へと向かうものであった。『渡欧日誌』には、7月25日までの記録しか残されておらず、レスリングのトレーニングについては記述がみられないが、八田は帰国後、ロンドンでレスリングの指導を受けたことや、レスリングのトレーニングを行ったことについて、以下のように回想している。

ベルリン、パリ、それからドーバーを越えてロンドンに。此処に一月余り滞在して英

国レスリング界の名コーチ、マッケンジー氏の指導を受ける傍、ウエルターウエイト選手権保持者デヨンソン氏をトレーナーとして練習した。彼らの肉体的持久力や、またはレスリング独特の技に、柔道家がレスリングに入つてゆく場合、またはレスリングと試合する場合の、多々注意すべき点を机上の空論に非ずして実地に体験をしたのである（八田，1932a，pp. 30-31）

このように八田は、ロンドン（イギリス）において、「英国レスリング界の名コーチ、マッケンジー氏の指導を受ける傍、ウエルターウエイト選手権保持者デヨンソン氏をトレーナーとして練習した」（八田，1932a，pp. 30-31）。また、これらを通して「彼らの肉体的持久力」（八田，1932a，pp. 30-31）を感じ取り、「レスリング独特の技に、柔道家がレスリング這入つてゆく場合、またはレスリングと試合する場合の、多々注意すべき点を机上の空論に非ずして実地に体験を」（八田，1932a，pp. 30-31）することができたと述べている。

二度目の欧州遠征は、1935（昭和10）年5月16日から9月5日まで行われた。出発に際し、八田は、「過ぎしロスアンゼルスオリンピック大会を思ふ時技術の点に於て些か不安を感じず」（八田，1935，p. 11）と述べつつも、「明年のオリンピック大会への最後の仕上げである」（八田，1935，p. 11），そして「日本レスリングの発達史も此の行によつて一段と生彩を加へる事だらう」（八田，1935，p. 11）とその意気込みを述べている。遠征の経路は、図17の通りである。



図17：日本郵船会社欧州航路図

二度目の欧州遠征に参加したメンバーは、表26の通りである。

表 26 : 欧州遠征参加メンバー

監督	八田一朗
助監督	小玉正己
主将	秋田勇太郎 (早稲田大学)
選手	丹波幸次郎 (早稲田大学)
	風間栄一 (早稲田大学)
	菊間寅雄 (慶應義塾大学)

八田 (1935) を元に筆者が作成

八田は、二度目の欧州遠征の際に、ベルリンで対戦した選手が「キャッチ・アズキャッチ・キャンスタイルよりもグリコ・ローマンスタイルに力を入れているので当日の試合において彼等の取口が一般に、グリコ・ローマン的であつて、我々には想像のつかなかつたとを見せられたりやられたり」(朝日新聞, 1935年8月11日付, 朝刊)した。また「彼等のブリッジの強さといふよりも、首をすつかり裏に引きつけて額, 鼻のあたりで立つブリッジには関心せざるを得ない, と共に日本人の首の弱さを痛切に感じた」(朝日新聞, 8月11日付朝刊)とも述べている。さらに、このような技術的な問題に加えて、八田は「私の一番大きな使命であるルールの問題は未だはつきりした事がわからないので閉口している」(朝日新聞, 1935年8月11日付, 朝刊)と述べ、ルールについても引き続き問題意識を持っていた。実際にベルリンの試合で用いられたルールは、表 27 の通りである。

表 27：第二回欧州遠征の際にベルリンで行われたルール

試合時間	20 分（日本で行っている通り）
採点法	攻勢な者には 2 点 敵をフォールするような重大な危地に陥れた時には 2 点 敵の背後にまわった時は 1 点
ポジションについて①	スタンドポジションの 10 分間の終盤に一方の選手がフォールをしようとしている時、フォールされようとしている選手が危地を脱しない限り、試合は継続される。この時、超過した時間はグラウンドポジションの攻防時間から差し引かれる。
ポジションについて②	スタンドポジションの 10 分間の攻防において優勢であった者は、終了時点で、一時中断の後、そのままの態勢でスタンドポジションを継続することができる。また、グラウンドポジションの攻防に移行することもできる。ただし、グラウンドポジションの攻防の場合、攻防の順番はクジによって決める。

朝日新聞（1935 年 8 月 11 日付，朝刊）を元に筆者が作成

このルールは「国際アマチュアレスリング連盟のルール」（朝日新聞，1935 年 8 月 11 日付，朝刊）であった。このように，八田によって先導された二度目の欧州遠征は，翌年に控えるベルリン大会に向けた日本人のレスリングを強化するだけでなく，レスリングのルールを理解することを目的としていた。このように，八田によって先導された二度目の欧州遠征は，翌年に控えるベルリン大会に向けた日本人のレスリングを強化するという目的のみならず，レスリングのルールを理解するためのものでもあったといえるだろう。

八田は，ベルリン大会終了後に帰国せず，欧州遠征を続けていく。このような八田の三度目の欧州遠征は，次の通りである。八田は，ベルリン大会後に選手と共にそのままベルリンに滞在した。その間，後に第 2 代目のレスリング協会の会長となる野口寛が所有するアパートに約 2 週間滞在した。三度目の欧州遠征の目的は，「一九四〇年のためと，フリースタイルにグレコ・ローマンの技をとりいれんがため」（八田，1953，p. 45）であった。その後，ベルリンからチェコスロバキアのロードニチェ，プラーク，ウィーンを旅行して 1936 年 9 月 2 日パリよりドーバーを飛んでロンドンへ渡った。また，この渡英に際しては，在英正金銀行の伊藤和雄，国際汽船の田中英治，八田の同胞からの絶大な後援を得ていた。イ

ギリスでは、同国のアマチュア・レスリング・協会名誉主事であるロングハーストや、同国のオリンピックコーチであるマッケンジーの好意により、練習場を使用させてもらい、また、イギリス人の得意とする技を見せてもらったという。また、2回の対抗戦を行っている。その詳細は、表 28 の通りである。

表 28 : 三度目の欧州遠征の概要

9月12日 於：ブラッドフォード	試合結果
丹波幸次郎 vs コザックス (オリンピック選手)	丹波の判定勝ち
水谷光三 vs モレル (オリンピック選手)	モレルの判定勝ち
吉岡秀一 vs ホワイトフィールド (欧州選手権大会出場選手)	吉岡のフォール勝ち
風間栄一 vs トムソン (オリンピック選手)	風間の判定勝ち
増富省一 vs ホックス (オリンピック選手)	増富のフォール勝ち
9月16日 於：ロンドン	試合結果
丹波幸次郎 vs アロック (ランカシャー地方選手権保持者)	丹波の判定勝ち
水谷光三 vs テイラー (前フェザー級選手権保持者)	水谷の判定勝ち
吉岡秀一 vs モレル (オリンピック選手)	モレルの判定勝ち
風間栄一 vs エイチ・ジョーンズ (エセックス地方選手権保持者)	風間のフォール勝ち
増富省一 vs エイチ・G・ジョーンズ (肩書なし)	増富の判定勝ち

八田 (1953) を元に筆者が作成

このように、チーム対抗戦を2回行い、どちらも4対1での勝利を収めた。このような好成績に対して八田は、以下のように述べている。

日本のレスリングが大国を破ったのは、今回が初めてで、レスリング史上一記元を画するものである。勝負は多分に精神作用に左右され、毛唐ずれのした後の日本選手の試合態度は堂々たるものであった。・・・中略・・・今回イギリスを破ったことはたしかに日本レスリング界に大きな自信を与えた。そして目下計画している数回の国際試合とこの新たに得た自信で、一九四〇年までには日本レスリングは、また一大飛躍が期待される。(八田, 1953, p. 48)

このように、三度目の欧州遠征は、「レスリング史上一記元を画するもの」(八田, 1953, p. 48)であったという。また本遠征におけるイギリスとの対抗戦での勝利は、「日本レスリング界に大きな自信を与え」、同時に、1940年に東京での開催が決まっていた夏季オリンピック競技大会に期待を抱かせるものでもあった。選手一行は山本監督引率の下に9月18日、箱根丸で一路日本へ向かい、八田は、アメリカチーム招聘に向けた打ち合わせのため、アメリカを經由し、1937年4月16日に浅間丸で横浜港に帰国した(朝日新聞, 1937年4月16日付, 朝刊)。

第3項：グラウンドポジションに関する技術習得

先述したように、八田は、ロサンゼルス大会におけるレスリングの日本人選手の敗退の原因の1つは、日本人選手が、レスリングを柔道の延長に位置付けて柔道の技で「簡単に投げてフォールすればよいと思つてみた」(八田, 1932b, p. 91)ことであると考えていた。このような理解が生じた理由については、以下のように指摘している。

敗因の第一原因は前にも述べた如く要するに柔道で投げようとしすぎた事であつた。此事を反対に考へてみるとグラウンドレスリング(寝業)に自信がなかつた為に仕方なしに立つて勝負を決しようとした。実際スエデンやフィンランドの選手のあのグラウンドレスリングの上手さ、あの恐るべき力の強さに対しては我々日本選手はスタンドレスリングで勝たなければ勝味がなかつた。併しそれとても柔道とちがつて持つ所もなく無理に業をかけると恐るべき力で防がれてしまひともすればグラウンドレスリングに引き込まれて終ふ恐れがあつた。それ故思ひ切つて業をかける事が出来なかつた。(八田, 1932b, p. 92)

このように八田は、先述した理解の原因は、日本人選手が「グラウンドレスリング(寝業)に自信がなかつた為に仕方なしに立つて勝負を決しようとした」ためであると考えた。さらに八田は、こうした課題を抱える日本人選手に対して、外国人選手たちが次のような対策をとっていることを評価している。

外国選手は皆(日本人の選手たちに対して: 筆者加筆)柔道が出来ると最初から思つて

投げを非常に注意して兎角グラウンドレスリングに持って行く事に一生懸命になつてみた。スタンドレスリングからグラウンドレスリングに持って行く連絡も実に巧妙で大いに學ぶべき所が多々ある。(八田, 1932b, p. 92)

このように、八田は外国人選手のグラウンドレスリングで勝負しようとする姿勢や技術を評価していた。そのため、日本人選手もスタンドレスリングに関する技術の習得を課題と考えた。このような課題に対して八田は、自ら技術研究を行いその成果を著作で発表している。具体的には、技術や身体の動かし方の説明と絵図を合計 60 パターン示しているが、これらのうちのグラウンドレスリングの技術に関する記述は半分以上を占めており(計 38 パターン)、さらにスタンドポジションからグラウンドポジションへの連携に関する記述が約 3 分の 1 (17 パターン) を占めている。ここから、八田がグラウンドレスリングに関する技術の習得を重視していたことがわかる。

以上のことから、八田は、1932 年のロサンゼルス大会での敗因の分析を通して、グラウンドレスリングに関する技術の習得を課題として自ら探求したと考えられる。

第 4 項：日本式ルールの提案

八田は、国際アマチュアレスリング連盟が作成したオリンピックにおけるレスリングのルールについて「採点法は成文法になつてゐない」(八田, 1938, p. 45) と指摘し、フォールで試合の勝敗が決せられず、最終的に判定が行われる際、「(レフリーの主観にもとづき：筆者加筆) 消極的に戦つて点をかせぐよりも積極的に攻勢に出る者が勝てる様に攻撃点を与へる」(八田, 1938, p. 45) ように採点が行われていることを批判的に捉えていた。そこで八田は、「日本レスリングの発展の為独特のルールを採用すること」(八田, 1938, p. 45) が重要であると考えていた。ここでいう「独特のルール」とは、採点法、グラウンドレスリングの導入、そしてフライ級の導入である。

そもそも国際レスリング連盟の規程では、試合の進行は、第 1 ペリオドと第 4 ペリオドはスタンドポジションで、第 2 ペリオドと第 3 ペリオドはグラウンドポジションとスタンドポジションを選択できるルールであった。そして、勝敗は、スタイルに関係なく、一方の選手がフォールをした時点で決するものであった。試合時間の内訳は、スタンドポジション 10 分、グラウンドポジション 3 分、グラウンドポジション 3 分、スタンドポジション 4 分であり、いずれかの選手が途中でフォールを決せられない場合は、全 20 分間において獲得

した得点の多い方が勝ちであった。このようなルールに対して八田は、慣例として「消極的に戦つて点をかせぐよりも積極的に攻勢に出る者が勝てる様に攻撃点を与える」（八田，1938, p. 45）ように採点されており，採点基準を明文化させる必要性を指摘した。そして，具体的な採点法として，表 29 を提案した。

表 29：採点法に関する八田一朗の提案

ピリオド内における採点基準および点数	
綺麗に投げた場合	1 点
スタンドレスリング中相手の背後にまはった場合	1 点
グラウンドレスリング中相手の背後にまはった場合	1 点
有効なホールドを取った場合	1 点
フォール以外の勝敗の判定方法	
各ピリオドにおいて優勢なる者に 1 点を与え，4 点満点で評価し，勝者を決する。そのため，引分けが生じる。	

八田（1935）を元に筆者が作成

また，八田は，上述の点に加え，レスリングの試合において 1 ピリオド目の「スタンドポジション 10 分」から 2 ピリオド目の「グラウンドポジション 3 分」に移行する際のルールに着目し，2 ピリオド及び 3 ピリオド目におけるグラウンドレスリングの強制的な実施を提案した。そもそも国際ルールでは，以下のように試合が行われていた。

初めの 10 分はスタンドレスリングを行ひフオールのない時は次の 3 分，3 分のグラウンドレスリングに移る。此時優勢だつた者はスタンドレスリング，グラウンドレスリング何れでも選択の自由がある。グラウンドレスリングを選択した時はルール通り籤によつて攻守を定める。（八田，1935, p. 12）

このように，国際ルールではスタンドレスリングでもグラウンドレスリングでもよいとされていた中，国内でのルールを，「初の 10 分スタンドレスリングに優勢であつた者も必ずグラウンドレスリングを行ふ事」（八田，1935, p. 11）に変更した。これは，「我がレスリング界はベルリンのオリムピック目指して精進してゐるのでグラウンドレスリングの向

上を測る為」(八田, 1935, p. 11)であった。

次に、八田の日本式ルールとしての体重に関するルールの提案についてである。八田は、レスリングの体重によって階級が分かれている点を「最も柔道と異な」(八田, 1935, pp. 2-3) ると考えており、「小兵よく大兵を宙に舞はしめる痛快味はないが誰にも出来又体重小なるものにも公平にチャンスが与へられてゐる」(八田, 1935, p. 3) 点を評価していた。そこで八田は、バンタム級の下階級としてフライ級を導入することを提案した(表 30)。

表 30 : 階級に関する八田一朗の提案

オリンピックの階級	八田の提案する階級
—	フライ (1111b.以下)
バンタム (56kg 以下, 1231b. 以下)	バンタム (1231b.以下)
フェザー (61kg 以下, 1341b.以下)	フェザー (1341b.以下)
ライト (66kg 以下, 1451b.以下)	ライト (1451b.以下)
ウェルター (72kg 以下, 1581b.以下)	ウェルター (1581b.以下)
ミドル (79kg 以下, 1741b.以下)	ミドル (1741b.以下)
ライトヘビー (87kg 以下, 1911b.以下)	ライトヘビー (1911b.以下)
ヘビー (87kg 以上, 1911b.以上)	ヘビー (1911b.以上)

八田 (1935) を元に筆者が作成

実際にフライ級は、1935 (昭和 10) 年に開催された第 2 回の全日本選手権大会から導入されており^{注 18)}、大会終了後に、八田は以下のように述べている。

本年からフライも設けたので軽い者、中学生等にもレスリングをやる機会が興へられ、此の方面の発展が大いに期待される様になつた。(八田, 1935, p. 11)

こうしたフライ級の導入という発想は、既に八田がレスリングと出会った早大柔道部のアメリカ遠征の際に有していた可能性がある。なぜなら八田は、アメリカ遠征において対戦相手のレスリング選手に勝利できた要因を「柔道や角力と異なり、体重の階級によつて分け、同体重の者同志が試合するといふのが、比較的軽量な私に幸する点もあるにはあつた」(八

田, 1932a, p. 30) と述べているからである。つまり八田は、レスリングの特徴として体重による階級制があり、そのことが日本人選手にとっては有利な状況をうむという認識に加えて、フライ級を導入することで体重の軽い日本人選手のレスリングに取り組む機会を保証することができると考えていた。このような八田の態度は、一見、レスリングの日本化を意味しているように見える。しかし、八田の意図はレスリングを日本化しようと試みたというものではない。先述の通り、八田は、そもそも柔道の無差別制を批判しレスリングの階級制を公平性という観点から評価しており、日本人のような体重の軽い者でも活躍の機会を保証するためにフライ級の導入を提案した。つまり八田は、階級制という公平性の担保された国際ルールの一つとしてフライ級の導入を試みたわけであり、あくまで、日本人のような体重の軽い人でも活躍できるルールの導入を検討したのである。

そのため、まず日本においてフライ級の導入は定着することはなかった。1937年の全日本選手権ではオリンピックルールが採用されたためであり、それまで当該大会で用いられていたトーナメント方式なども変更された（読売新聞, 1937年11月28日, 朝刊）。1938年の全日本選手権では、来日したアメリカ人選手5名やドイツ人レスラーの参加があり、国際ルールが意識されたことで前年度同様に、フライ級の導入は見送られた（読売新聞, 1938年7月28日, 朝刊）。さらに、1939年の全日本選手権では、同年10月8日に、オーストラリアとフィリピン、日本の代表を交えて東京の日比谷新音楽堂で実施された環太平洋選手権大会の予選を兼ねていたことからフライ級の導入が見送られた（読売新聞, 1939年9月30日, 朝刊）。このように全日本選手権大会においてフライ級の全面的な導入が見送られた背景には、国際ルールにもとづく体重区分を採用することが優先されていたことが見受けられる。また、1948年にロンドンで開催された第14回夏季オリンピック競技大会（日本は不参加）からは、フライ級が正式に国際レスリング連盟の国際ルールに採用された。

以上の通り、八田によるフライ級の導入の提案は、フライ級を日本独自のルールとして導入し定着させることよりも、公平性を担保するという点から八田が評価する階級制の幅を広げて、日本人を含む軽量級の人でもオリンピック競技大会で優勝できるように国際ルールを変更することを意図していたと考えられる。

表 31 : 全日本選手権におけるフライ級の導入

開催日	開催場所	フライ級の有無 (優勝者)
1935年4月28日-4月28日	神田YMCA体育館	あり(加藤忠一)
1936年12月5日-12月6日	神田YMCA体育館	あり(倉垣至明)
1937年11月27日-11月28日	大阪キリスト教会体育館	なし
1938年8月1日	日比谷公会堂	なし
1939年10月1日	神田国民体育館	なし
1940年12月1日-12月2日	早大体育館	あり(佐藤達郎)
1941年11月9日・11月16日	早大体育館	あり(植木泰)
1942年7月15日	九段軍人会館	あり(立沢弘)

日本レスリング協会 (online) を元に筆者が作成

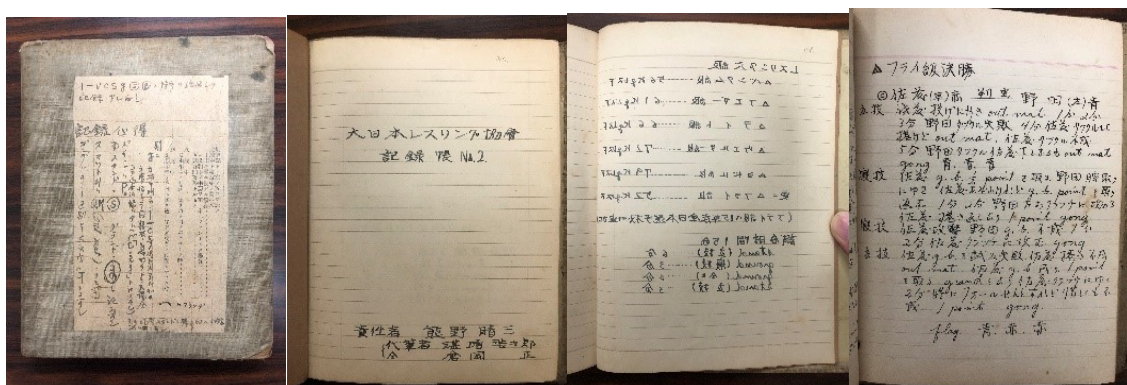


図 18 : 『大日本レスリング協会記録帳 NO.2』におけるフライ級に関する記述

第5項 : 国際レスリング連盟への働きかけ

前述の通り、レスリングの統括組織の整備が不十分であり、それゆえにレフリーによるジャッジが不公平であることに批判的であった八田は、自らがレスリングの統括組織の構成員になってそれを正すことを目指した。こうした点について八田は、以下のように述べている。

(ベルリン大会の不公平な試合運営について : 筆者加筆) 会長シュメズ氏に厳重な抗藤

をし、逃げまわるのをつかまえて三日がかりで弁明書一本をとってはみたが後の祭である。国際試合になれぬわれわれ役員は、この事件で非常によい経験を得た。私が日本代表として、インターナショナル・アマチュア・レスリング・フェデレーション（I・A・W・F）の初めての役員となって、その無統制が暴露され、役員のしっかりしたスエーデンがいつも I・A・W・F をリードしていることもわかった。私もこの空気がわかってから、日本のために大いに主張して奮闘した。・・・中略・・・審判には私の他に山本監督も入り、競技中マットの上に二人で活躍し、みずからいうのもおかしいが、審判としては二人とも各国からの称賛を、浴びた。（八田，1953，p. 42）

また八田は、ベルリン大会の直前に開催された IOC 総会において 1940（昭和 15）年の東京でのオリンピック競技大会の開催が決定した際には、国際レスリング連盟よりレスリングの責任者に任命される。八田は、この点について以下のように述べている。

I・A・W・F は一九四〇年のオリンピックが東京に決定するや、直ちに私を全権委員に任命した。日本でわれわれの手で大会を準備して試合することになれば、あらゆる点において日本に有利であり、またレスリング発展普及にも著しいものがあるろうと、今から期待している。（八田，1953，p. 42）

このように、八田が国際レスリング連盟の役員に就任できた背景には、ベルリン大会の際に国際レスリング連盟に対して八田が行った働きかけ、すなわちロビー活動があった。

わたしには、その前のロサンゼルスでの経験もあったので、いかにこの機会を、わがレスリング界のために活用するかを考えた。すなわち、この大会めざして、世界各国から集まって来たアマチュア・レスリング関係の人人との交遊に、なによりも力をそそいだ。いまでこそ、日本のレスリングの実力も、ある程度評価されて、世界のスポーツ界に出ても、相当の発言力があるけれども、当時は、ようやく水泳、三段跳と吉岡、村社両選手の活躍が日立った程度で、レスリングなど、なんとも影のうすい存在だった。日本のスポーツ役員諸氏は、当時人気のあったドイツカメラの購入や、観光旅行に金を使っていた。そのさ中、若僧のわたしはそうした冗費を一切使わず、持っているだけの金を、各国レスリング関係者との交遊に費やしたものだ。果たして、わたしのこのときの

努力は、後になって、大いにむくいられた。すなわち、日本が敗戦後、ふたたび世界のスポーツ界に復帰するときに、このときの交遊関係が大いに役立ったのである。レスリングは水泳について、世界連盟への復帰を認められ、しかも、わたしはいきなり連盟の理事に推薦されたのであり、それは復帰後第一回のヘルシンキ大会での成功へとつながるわけである。わたしのベルリンでの、人間関係を考へての努力は、けっして無駄ではなかったのである。(八田, 1979, pp. 180-181)

このように八田は、自ら国際レスリング連盟の役員となったり、審判員として大会運営に関わることで「無統制」を改善しようと働きかけ、国際レスリング連盟を健全化させようとした。

第6項：「正統」なレスリングと実践の結びつき

本節では、八田が「正統」なレスリングの実現に向けて行った内容を整理した。八田の実践は、欧州遠征、グラウンドポジションに関する技術の習得、フライ級という日本式ルールの提案、そして国際レスリング連盟への働きかけの4点に整理された。これらの八田の実践と「正統」なレスリングという理念の結びつきは以下の通りである。

本章第2節で述べた通り、八田の「正統」なレスリングという理念は、レスリングがプロレスや柔道と混同されている点、そして日本人選手がレスリングのルールを十分に理解していない点、そして統括組織の整備が不十分である点の3点の批判を背景にしていた。このうち、プロレスや柔道との混同に対する批判や日本人選手がレスリングのルールを十分に理解していない点への批判は、レスリングという競技そのものの理解の必要性へとつながる。そのため、欧州遠征は、海外のレスリング選手との試合を通じた日本人選手の強化だけでなく、レスリング自体の理解を図ることも意味していたと考えられる。また、グラウンドポジションに関する技術習得も、日本人選手に適した技術の探求だけでなく、レスリングに特有の技術の探求ということも意味していたと考えられる。さらに、統括組織が不十分であった点への批判に基づく国際レスリング連盟への働きかけやフライ級の提案は、国際大会の試合進行における日本人選手の不利益を排除するだけでなく、レスリングのルールづくりに参画することでレスリングを内側から理解することに努めたことを意味していたと考えられる。

以上のように、「正統」なレスリングという理念で自立化を目指した八田は、レスリング

とは何かを理解し、日本人選手が世界大会で活躍できるように制度的な環境整備を試みたのである。

第4節：第1章のまとめ

本章では、1930年代から終戦までの日本におけるレスリングの受容過程を八田の視点から検討することを目的とした。

この時期は、1920（大正9）年のアントワープ大会に初めて日本人が参加し、1928年のアムステルダム大会では織田幹雄（陸上競技・三段跳）や鶴田義行（競泳・200m 平泳ぎ）による日本人初の金メダルの獲得、人見絹枝（陸上競技・800m）による日本人女性初の銀メダルの獲得、そしてロサンゼルス大会における鶴田の連覇等が、マスメディアに大々的に取り上げられ、スポーツが広く国民の関心を引き寄せることになった。このようなオリンピック競技大会における日本人選手の活躍は、日本が「スポーツの振興国」として世界にアピールする機会となり、日本人にとっても「ナショナル・プライド」を植え付けるものとなった。レスリングは、このような時期に、アメリカ遠征でレスリングと出会いその強さを目の当たりにした早大柔道部の部員によって移入された。早大柔道部の部員は、1931（昭和6）年に早大レスリング部を創設し活動を始めた。当初は、柔道部や相撲部等との掛け持ちの選手が多かったが、国際交流試合を盛んに行い、少しずつレスリングを専門的に行う選手が増えていった。しかし、これらの努力がオリンピックの結果につながることはなく、1932（昭和7）年のロサンゼルス大会も1936（昭和11）年のベルリン大会もメダルの獲得はできなかった。

このように日本にレスリングを移入した早大柔道部の一人が八田であった。しかし八田は、上記のような他の種目とレスリングを混同することに批判的であった。特に、プロレスや柔道と混同することに対して批判的な見解を示していた。さらに、日本人選手がレスリングのルールを十分に理解していなかったり、レスリングの統括組織が未整備であるため国際大会で日本人選手が不利な状況が生じていたりすることを問題視していた。そして、レスリングを他の似たスポーツと照らし合わせずに、レスリングをプロレスや柔道と区別して実践するべきであると考えた八田は、「正統」なレスリングの探求を始める。具体的な八田の実践としては、カタカナ語表記を用いての国際ルールの提案、三度の欧州遠征、日本人に必要なグラウンドポジションに関する技術習得、日本式ルールの提案、そして国際レスリング連盟への働きかけである。つまり、この時期の八田の実践は、レスリングを他の類似するスポーツと結び付けずに、レスリングとして理解して、それを日本で浸透させる試みであった。

【注】

注 10) 講道館柔道とは、1882（明治 15）年に東京・下谷において天神真楊流と起倒流を修行した嘉納治五郎によって創始された武術の一種である（藤堂，2007，p. 87）。

注 11) 『早稲田大学柔道部百年史』によれば、ワシントン大学の招待を受けて早稲田大学柔道部から柔道部部長の氏家謙曹と、笠原巖夫，尾崎西郷，富木堅三郎，八田一朝，高畑吉之助，高柳国男，遠藤吉兵衛，諏訪章，大滝四士夫ら柔道部部員 9 名の計 10 名が日米親善と柔道普及を目的に 1929（昭和 4）年 4 月 18 日に横浜港からアメリカ西海岸へ向けて出発した。一行はアメリカ各地で柔道のデモンストレーションを行いながら，同年 5 月 1 日にはワシントン大学レスリング部との柔道レスリング混合試合を行っている（「早稲田大学柔道部百年史」編集委員会編，1997，p. 228）。

注 12) 【フィリピン代表との対抗戦（1931 年 12 月-1932 年 1 月）】朝日新聞，1931 年 12 月 19 日付，朝刊：朝日新聞，1931 年 12 月 25 日付，朝刊：朝日新聞，1932 年 1 月 8 日付，朝刊：朝日新聞，1932 年 1 月 15 日付，朝刊：朝日新聞，1932 年 1 月 16 日付，朝刊【ハワイ遠征（1934 年 1 月）】朝日新聞，1934 年 1 月 8 日付，朝刊：読売新聞，1934 年 1 月 14 日付，朝刊【ハワイ代表との対抗戦（1934 年 9 月）】朝日新聞，1934 年 9 月 17 日付，朝刊：朝日新聞，1934 年 9 月 24 日付，朝刊【イギリス遠征（1936 年 9 月）】八田（1953）【アメリカ代表との対抗戦（1937 年 7 月）】朝日新聞，1937 年 7 月 14 日付，朝刊：朝日新聞，1937 年 7 月 19 日付，朝刊：朝日新聞，1937 年 7 月 25 日付，朝刊【フィリピン遠征（1937 年 12 月-1938 年 1 月）】朝日新聞，1937 年 12 月 31 日付，朝刊：朝日新聞，1938 年 1 月 5 日付，夕刊：朝日新聞，1938 年 1 月 9 日付，朝刊【アメリカ代表との対抗戦（1938 年 7 月-8 月）】朝日新聞，1938 年 7 月 17 日付，朝刊：朝日新聞，1938 年 7 月 20 日付，朝刊：朝日新聞，1938 年 7 月 24 日付，朝刊：朝日新聞，1938 年 7 月 26 日付，朝刊：朝日新聞，1938 年 8 月 7 日付，朝刊：朝日新聞，1938 年 8 月 8 日付，朝刊：朝日新聞，1938 年 8 月 10 日付，朝刊【アメリカ遠征（1938 年 11 月-1939 年 1 月）】読売新聞，1939 年 1 月 27 日付，朝刊【フィリピン遠征（1938 年 12 月-1939 年 1 月）】朝日新聞，1938 年 12 月 31 日付，朝刊：朝日新聞，1939 年 1 月 5 日付，朝刊：朝日新聞，1939 年 1 月 9 日付，朝刊：朝日新聞，1939 年 1 月 16 日付，朝刊【汎太平洋選手権

(1939年10月)】朝日新聞，1939年10月9日付，朝刊

注13) 大日本アマチュアレスリング協会は，日本アマチュアレスリング協会(1945-1995)，日本レスリング協会(1995-現在)へと名称を変更している。

注14) 日本体育協会は，1911(明治44)年に大日本体育協会として設立され，大日本体育協会(1941-1948)，日本体育協会(1948-2018)，日本スポーツ協会(2018-現在)へと名称を変更している。

注15) 戦前の学校間の対抗戦の事例として，例えば1934(昭和9)年12月1日に早稲田大学の大隈行動において早稲田大学と明治大学のレスリング部による初めての早明対抗戦が行われている(早稲田大学レスリング部70年史編集委員会編，2001；明治大学レスリング部，online)。また，1935年4月21日には東京の日比谷新音楽同において早稲田大学と慶應義塾大学による初めての対抗戦が実施された(阿部ほか，1986：早稲田大学レスリング部70年史編集委員会編，2001)。

注16) 他種目の歴史で戦時下に衰退した事例として野球がある。中村(2010)によれば，1940(昭和15)年頃から対米関係の悪化を背景とする英語の使用禁止や欧米文化の排撃が徐々に表れはじめたという。これに加えて，体位向上や戦場で役に立つ運動種目を国が優先的に奨励する重点主義の影響から学生野球のリーグ戦は文部省の許可がない限り禁止となり，1943(昭和18)年4月に文部省から東京大学野球連盟の解散が促され，東都大学野球連盟，関西大学野球連盟が解散した。また，対米関係の悪化や学校報国団の組織化に伴い1941(昭和18)年から全国各地の中等学校における野球部が徐々に解散・活動停止し追い込まれていった。

注17) 庄司は1896(明治29)年10月9日に父岩松と母はるの長男として鳥取県渡村(現，境港市)に生まれた。庄司家は，江戸期における富豪の代表的な屋敷構えを残し，現在は境港市の文化財として保存されている。幼少期には小野派一刀流の剣術をならい，また柔道をならいながら育ったという。その後，早稲田大学への進学と同時に上京し，1921(大正10)年に，講道館に他流試合を申し入れてきたレスリングのアド・

サントル選手と対戦した。対戦後、南カリフォルニア大学へ留学した庄司は、同大学で修士号取得の後に、同大学で教鞭を取り、1929（昭和4）年に帰国した

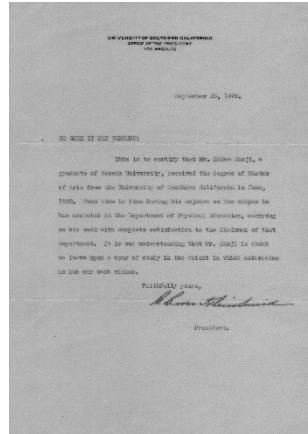


図 19：南カリフォルニア大学長から庄司へ送られた感謝状の写し

注 18) 実際には、1935（昭和 10）年から 1947（昭和 22）年の期間（1942-1945 年は大会自体が実施されず）にフライ級は実施されなかった。

【引用参考文献】

阿部優蔵・萩原一郎・長谷川創一編（1986）若き血に燃えて：慶應義塾大学レスリング部

五十年史．レスリング三田会．

朝日新聞（1921）3月3日付．朝刊．

朝日新聞（1931）4月28日付．朝刊．

朝日新聞（1931）6月10日付．朝刊．

朝日新聞（1931）12月19日付．朝刊．

朝日新聞（1931）12月25日付．朝刊．

朝日新聞（1932）1月8日付．朝刊．

朝日新聞（1932）1月15日付．朝刊．

朝日新聞（1932）1月16日付．朝刊．

朝日新聞（1932）4月19日付．朝刊．

朝日新聞（1932）5月14日付．朝刊．

朝日新聞（1934）1月8日付．朝刊．

朝日新聞（1934）9月17日付．朝刊．

朝日新聞（1934）9月24日付．朝刊．

朝日新聞（1935）8月11日付．朝刊．

朝日新聞（1937）4月16日付．朝刊．

朝日新聞（1937）7月14日付．朝刊．

朝日新聞（1937）7月19日付．朝刊．

朝日新聞（1937）7月25日付．朝刊．

朝日新聞（1937）12月31日付．朝刊．

朝日新聞（1938）1月5日付．夕刊．

朝日新聞（1938）1月9日付．朝刊．

朝日新聞（1938）7月17日付．朝刊．

朝日新聞（1938）7月20日付．朝刊．

朝日新聞（1938）7月24日付．朝刊．

朝日新聞（1938）7月26日付．朝刊．

朝日新聞（1938）8月7日付．朝刊．

朝日新聞（1938）8月8日付．朝刊．

- 朝日新聞 (1938) 8月10日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (1938) 12月31日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (1939) 1月5日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (1939) 1月9日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (1939) 1月16日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (1939) 10月9日付. 朝刊.
- 発行者不明 (1937) 1937年日米対抗戦パンフレット. 『八田コレクション』所収資料.
- 八田一朗 (1932a) 振興スポーツ, レスリング. アスレチックス, 10 (3) : 30-31.
- 八田一朗 (1932b) 敗因を探る. アスレチックス, 10 (10) : 91-94.
- 八田一朗 (1934) 全日本アマチュアレスリング選手権大会. アスレチックス, 12 (8) : 28-31.
- 八田一朗 (1935) レスリング (全), 師範大学講座, 体育1, 建文館, pp.1-19.
- 八田一朗 (1938) オリンピック叢書. 第28 レスリング. 成美堂書店.
- 八田一朗 (1953) レスリング. 旺文社.
- 八田一朗 (1965) 勝負根性. 実業之日本社.
- 八田一朗 (1979) 私の歩んできた道. 立花書房, pp. 180-181.
- 東日本学生レスリング連盟 80年史編纂委員会編 (2016) 東日本学生レスリング連盟 80年史. 東日本学生レスリング連盟, pp. 22-24.
- 今村嘉雄 (1970) 日本体育史. 不昧堂出版, p. 555.
- 企画院研究会編 (1941) 国防国家の綱領. 新紀元社, pp. 21-23.
- 木下秀明 (1970) スポーツの近代日本史. 杏林書院.
- 丸島隆雄 (2006) 講道館柔道対プロレス初対決: 大正十年・サンテル事件. 島津書房.
- 明治大学レスリング部 (online) 明大レスリング部のあゆみ. 明治大学レスリング部, http://www.mejiwrestling.com/modules/pico0/index.php?content_id=117, (参照日 2021年4月2日).
- 中村哲也 (2010) 学生野球憲章とは何か: 自治から見る日本野球史. 青弓社.
- 日本オリンピック委員会 (online) Home: 大会: オリンピック: 大会別日本代表選手入賞者一覧. <https://www.joc.or.jp/games/olympic/winnerslist/>, (参照日 2021年5月3日).
- 日本レスリング協会 (online) Home: 歴代記録. <https://www.japanrestling.jp/pastresults/> (参照日 2021年5月5日).

- 日本レスリング協会 80 年史編纂委員会編 (2012) 財団法人日本レスリング協会 80 年史 : 1932-2012. 日本レスリング協会.
- 日本体育協会編 (1963) 日本体育協会五十年史. 日本体育協会, p. 619.
- 坂上康博 (1998) 権力装置としてのスポーツ : 帝国日本の国家戦略. 講談社.
- 庄司彦雄・山本千春 (1931) レスリング. 三省堂, p. 2.
- 田鶴濱弘 (1971) プロレス・ニッポン世界をゆく. 恒文社.
- 高岡裕之 (2009) 大日本体育会の成立 : 総力戦体制とスポーツ界. 坂上康博・高岡裕之編著, 幻の東京オリンピックとその時代 : 戦時期のスポーツ・都市・身体. 青弓社, pp. 200-242.
- 藤堂良明 (2007) 柔道の歴史と文化. 不昧堂出版, p. 87.
- 「早稲田大学柔道部百年史」編集委員会編 (1997) 早稲田大学柔道部百年史. 早稲田大学柔道部・早稲田柔道クラブ.
- 早稲田大学レスリング部 70 年史編集委員会編 (2001) 早稲田大学レスリング部 70 年史. 稲門レスリング倶楽部.
- 藪耕一郎 (2010) 柔術 vs. レスリング : 変容する柔術と継承される “Jiu-Jitsu”. 坂上康博編著, 海を渡った柔術と柔道 : 日本武道のダイナミズム. 青弓社, pp. 12-60.
- 山本千春・田鶴濱 (1937) 大日本アマチュアレスリング競技連盟. 大日本体育協会編, 大日本体育協会史下巻, pp. 1300-1309.
- 読売新聞 (1930) 11 月 29 日付. 朝刊.
- 読売新聞 (1931) 4 月 28 日付. 朝刊.
- 読売新聞 (1932) 4 月 21 日付. 朝刊.
- 読売新聞 (1934) 1 月 14 日付. 朝刊.
- 読売新聞 (1937) 11 月 28 日付. 朝刊.
- 読売新聞 (1938) 7 月 28 日付. 朝刊.
- 読売新聞 (1939) 1 月 27 日付. 朝刊.
- 読売新聞 (1939) 9 月 30 日付. 朝刊.

第2章：戦後復興期におけるレスリングの受容過程

本章では、終戦から1950年代におけるレスリングの受容過程を八田の視点から明らかにする。具体的には、戦後復興期の社会状況やスポーツ及びレスリングの状況を整理したうえで、八田の理念とその理念を実現するための実践について検討する。

第1節：スポーツの戦後復興とレスリングの再開

第1項：スポーツの民主化政策

1945（昭和20）年8月14日に連合国側からの降伏要求（ポツダム宣言）を受諾した日本では、翌日の8月15日、終戦が伝えられた。同年9月2日、昭和天皇および重光葵外務大臣、梅津美治郎参謀総長が東京湾上のアメリカ戦艦ミズーリの甲板上において降伏文書に調印し、即時発効となった。これをもって第二次世界大戦は終結した。同時に、「ポツダム宣言」執行のために、連合国軍最高司令官総司令部（General Headquarters, the Supreme Commander for the Allied Powers：以下、GHQ/SCAP）が創設され、ダグラス・マッカーサー（Douglas MacArthur：1880-1964）が連合国軍最高司令官として占領政策を展開させていく。GHQ/SCAPはあくまで占領支配ではなくあくまでポツダム宣言の執行が本来の役目であったが、日本国および日本国民の統治にあたり日本の行政組織へ専門的に対応する必要性から設置された、実質的にはアメリカ合衆国による占領管理のための機関であった（竹前，1996）。また、日本における占領管理は、連合国軍最高司令官から日本政府に発出される命令を日本政府が実行するという間接的な統治方式であった（竹前，1996）。そして、降伏文書に基づき、天皇並びに日本国政府の統治権は最高司令官の支配下におかれ、結果として1952（昭和27）年4月28日に日本がサンフランシスコ平和条約を結びその効力が発効されるまで、アメリカ主導の連合国軍占領下の日本は、外交関係が遮断された。

第二次世界大戦の敗戦は、日本の経済に壊滅的な打撃を与えた。特に、終戦当時の食糧不足は深刻であった。藤澤（2008）は、戦後の食糧不足・栄養問題について説明する文脈において、次のように詳述する。1945（昭和20）年、労働力の不足や肥料の不足、その他、戦時下の無制限な増産計画などの悪条件が重なり、同年産米の収穫は、前年の約7割の587万トンに過ぎず、明治末期以来の大減収を記録した。戦時中でさえ米換算2合1勺の主食配給は維持されていたが、同年後半以後、そうした状況は次第に悪化し、配給米の比率が低下していき、いも類はもとより、脱脂大豆やとうもろこしが主食として配給され、さつまいもの茎、大根葉などの廃物の利用や、自家菜園による自給、物々交換、農家への買出しなどが盛んに行われた。1946（昭和21）年になると食料事情は更に悪化し、代用品さえ間に合わず遅欠配が始まり、5月には北海道で遅配74日となり、それを最高に、6月には東京の遅配は20日を超え、こうした食料の遅配は同年中に度々生じていた（朝日新聞，1946年5月13日付，朝刊：朝日新聞，1946年6月19日付，朝刊：朝日新聞，1946年12月24日付，朝刊）。

また、藤澤(2008)は次のようにも指摘している。日本政府は1946(昭和21)年2月、食糧緊急措置令(令第86号)をもって米の強制供出の途を開いたり、6月には食糧危機突破対策要領を発表し食糧の確保に努めた。1946(昭和21)年産米は944万トンに増大し、主食の配給は成人1人1日あたり2合1勺から2合5勺に増加したが、復員や引き揚げ者による人口増加により食糧不足は続いた。当時の片山内閣は、食糧の端境期の切り抜け策として縁故米制度、救援米制度、水産物・野菜の増配、砂糖の主食代替配給なども行われた。しかし、配給量だけでは必要な栄養量の半分程度を満たすに過ぎず、自由購入に多くを依存していた。一方米の買出し屋・ブローカーによる闇米などに対しては、食糧管理法違反としての取り締まりも強化された。1946(昭和21)年には、文部・農林・厚生三省事務次官通達により、放出物質による学校給食が実施されていった。こうした深刻な食糧不足の状況は、1950年代に向けて徐々に改善されていった。

さらに、1950年代初頭には、インフレの克服とドッジラインによる不況からの特需によって日本経済が立ち直りはじめる(橋本, 1995, pp. 94-101)。それと同時に、国際的な冷戦構造が強まり、1948(昭和23)年以降はレッドパージと保守派閥の復権や、警察予備隊による再軍備など、いわゆる逆コースの時代ともよばれる時代がきた。そして、1951(昭和26)年には、サンフランシスコで講和条約が締結され、翌年には占領の終了と安保体制への移行が行われた(歴史学研究会, 1990, pp. 4-122; 石川, 2004, pp. 61-153)。

このように戦後初期の日本は経済、政治の両面において、アメリカの支配のもとで、少しずつ復興に向けて歩み始めた。この時期に、スポーツもGHQ/SCAPの民主化(非軍事化)政策の一環として改革が進められていく。具体的には、まず武道の禁止である。これによって、中等学校の武道教員の免許も無効とされ、退職を余儀なくされた者は1,927名にのぼる^{注19)}(近代武道研究会編, 1961, pp. 42-44)。また、大日本武徳会が解散させられ、計1,219人におよぶ役員が公職追放の処分を受けた。この処分は、1945(昭和20)年10月のGHQ/SCAPによる指令「日本教育制度ニ対スル管理政策」(1945(昭和20)年10月22日)の『軍事教育の科目及び体錬は凡て廃止』するという項目に学校武道が該当すると判断され(山本, 2003, p. 73)、また、ポツダム宣言第6項にある日本国民を欺いて無謀な世界征服へと導いた責任が、武徳会の役員にもあると判断されたからである(高津, 2011, p. 3)。このようなGHQ/SCAPによる民主化政策の下で、日本のスポーツはその活動を制限されつつも日本体育協会^{注20)}(以下、体協)を中心に復興が進められていった。民主化政策のもとに展開されたスポーツの復興例としては、レクリエーションとしてのスポーツの奨励が

あげられ、1947（昭和 22）年にレクリエーション協会が設立され、第 1 回全国レクリエーション大会が実施された。また、戦前期、文部省の外郭団体として位置づいた大日本体育会は終戦後の解散を経て、1946（昭和 21）年に民間団体としての体協が再び組織される。そして、1946（昭和 21）年には体協の主催のもと第 1 回国民体育大会が開かれ、水泳や野球、陸上競技など 25 競技が実施された。これに加えて、バドミントンやソフトボールなど戦前に組織だった活動が見られなかったスポーツ種目においても中央競技団体が組織され、体協へと加盟されていった（木下、1970）。

第 2 項：レスリングの再開と柔道家の転向

このように、他の種目が体協の指導の元で復興が進められる中、レスリングは大学を中心に復興が進められていく。戦後、GHQ/SCAP による民主化政策によって柔道や剣道が禁止される中で、国内の各大学においてレスリング部の活動が展開される。例えば、戦前からレスリング部が活動していた大学のうち、早大レスリング部では 1945（昭和 20）年の秋頃から活動を再開し、同年 12 月には既に合宿練習を栃木県で行っており、戦後徐々に活動を再開^{注 21)}していた（早稲田大学レスリング部 70 年史編集委員会編、2001）。



図 20：1945 年 12 月に早大レスリング部が合宿を実施した時の写真

また、1946（昭和 21）年には明治大学と拓殖大学において、1947（昭和 22）年には専修大学においてレスリング部の活動が再開されはじめた。このように、戦前からレスリング部が活動していた各大学では、戦争による中断を経て徐々に活動が再開されるようになった。他方で、終戦直後の時期から大学において新たにレスリング部が創部される動きも見え始める。1945（昭和 20）年には関西学院大学において柔道部を母体とするレスリング部が発足し活動し始めるようになり、同時期に同志社大学においてもレスリング部が創部された（日本レスリング協会 80 年史編纂委員会編、2012）。また、1946（昭和 21）年には中央大

学にはレスリング部が創部されており、戦前に活動がみられなかった各大学におけるレスリング部の創部は、これ以降も 1950 年代までの時期においていくつか確認できる(表 32)。

表 32 : 1945 年から 1959 年までににおける各大学レスリング部の創部および活動再開時期

創部・再開年	戦後に創部した大学	戦前に創部した大学
1945 年	関西学院大学	早稲田大学
1946 年	中央大学, 同志社大学	明治大学, 拓殖大学
1947 年		専修大学
1948 年	東北学院大学, 関西大学	
1949 年	日本体育大学, 近畿大学	
1952 年	神奈川大学, 法政大学	
1954 年	新潟大学	
1956 年	茨城大学	
1957 年	防衛大学校	
1958 年	国士舘大学	
1959 年		
不明	工学院大学, 九州国際大学 名城大学	慶応義塾大学, 日本大学 立教大学

東日本学生レスリング連盟編 (2016), 西日本学生レスリング連盟 (online), および各大学部誌を元に筆者が作成^{注 22)}

このように、戦前にレスリング部の活動が見られなかった大学においてもレスリング部が創部されはじめ、結果的に日本国内におけるレスリング部の数は戦前に比して増え始めることとなった。ここで、特筆すべき点として、レスリング部の活動に加わり始めた学生の中には、それまで柔道部などの他の部活動に所属していた学生がいたことが挙げられる。先述したように、関西学院大学では柔道部を母体としてレスリング部が発足していたが、同志社大学では柔道部が解散させられた状況の中、柔道部の有志数名と他の部員が集まってレスリング部の活動がはじまったとされている(同志社大学体育会レスリング部, 発行年不明)。

それまでレスリング部以外の部に所属していた学生が戦後になってレスリング部の活動に参加し始めるというこのような動きは、戦前からレスリング部が活動していた部においても見受けられる。例えば、拓殖大学においては、柔道部に所属していた学生がレスリング部の学生から勧誘を受け、学内で柔道部としての活動ができない状況も相まってレスリング部の活動に参加し始めたという当時の部員の回顧録が部誌から確認できる（拓殖大学レスリング部 OB 会 50 年史編集委員会編，1990）。同様に明治大学や慶応義塾大学の部誌においても柔道部に所属する学生によるレスリング部の活動への参加が確認でき、専修大学の部誌には空手部や相撲部に所属する学生も参加していたとの記述が確認できる（明治大学レスリング部 70 年史編集委員会編，2003；阿部ほか編，1986；専修大学体育会レスリング部 OB 会編，1984）。

このように、終戦後の各大学におけるレスリング部の活動状況を見た時に、レスリングの復興の担い手となったのは、戦前期からレスリングを実践していた学生だけではなかった。むしろ、戦後のレスリングの復興を支えたのは、GHQ/SCAP による民主化政策によって武道が禁止されたことに伴ってレスリングに転向した柔道家であったといえよう。

国内における各大学内でレスリング部が活動しはじめる中、対外的な試合も徐々に行われはじめる。1946（昭和 21）年 3 月には、早大レスリング部と立教大学のレスリング部の対抗戦が行われ、同年 11 月には国民体育大会でレスリング競技が行われたほか、関東学生リーグ戦や全日本選手権も開催された。さらに 1947（昭和 22）年には、関西において学生リーグ戦が開催されるようになる（日本レスリング協会 80 年史編纂委員会，2012）。

このような対外的な試合等の盛んな活動が展開される中、戦前のレスリング選手の活躍もあり、レスリングの競技力は高いと理解されていたが、大衆にはあまり親しまれていないスポーツとして認識されていた（夕刊中国，1950 年 7 月 27 日付，夕刊）。そのため、レスリング協会は、競技力の向上だけでなく、より多くの人々にレスリングを周知するという大衆化を意図した取り組みを始める。特に重要になるのは、後述するが、レスリングのアメリカ代表チームとの交流試合（以下、日米交流）である。そこでは、新聞社の協力の元で娯楽性を有するパレード等の取り組みも行われた（塩見，2010，p. 96）。



図 21：日米交流におけるパレードの時の写真

このように、GHQ/SCAP 主導の戦後復興の過程において、戦前からレスリングを実践していた学生に加えて民主化政策の一環として禁止された柔道から転向してきた人によって戦後の日本国内におけるレスリングが活動を再開し始めていたものの、大衆の関心は低いままであったことから、競技力だけでなく少しずつ大衆化も志向するようになっていった。

第2節：「裸の柔道」という理念

前述の終戦から 1950 年代におけるレスリングの競技力向上と大衆化を意図した取り組みを主導したのが八田であった。八田は、1945（昭和 20）年 8 月 15 日の玉音放送を、当時所属していた北支那開発株式会社内で聞き、家族とともに日本に引き揚げた^{注 23}。そして、1946（昭和 21）年 4 月には、第 3 代目の日本レスリング協会会長に就任し、日本のレスリングの強化、普及のための活動を活発化させていく。1949（昭和 24）年に日本が国際レスリング連盟への復帰を認められた後、八田は 1956（昭和 31）年に国際レスリング連盟の副理事長に就任した（日本レスリング協会 80 年史編纂委員会，2012：朝日新聞，1956 年 11 月 24 日付，朝刊）。



図 22：国際レスリング連盟の副理事長八田一朗が会議に参加した時の写真①



図 23：国際レスリング連盟の副理事長八田一朗が会議に参加した時の写真②

日本レスリング協会は創設当初から八田が協会の運営を主導してきたが、会長職には大蔵省への入省経験を持ち日本蹴球協会の会長を務めていた今村次吉や日本窒素株式会社の取締役を務めていた野口寛といった官僚や実業家らが就いていた^{注 24}。このことを踏まえると、八田の日本レスリング協会の会長への就任や国際レスリング連盟の副理事長への就任

は、名実ともに八田が日本レスリングのリーダーとなり、日本のレスリングの強化や普及に大きな責任を負う立場になったことを意味する。

ではこの時期の八田は、どのような考えに基づいてレスリングの強化や普及に取り組んだのであろうか。この点について、本節では、前章において戦前の八田がレスリングの強化や普及のために統括組織の整備の重要性も指摘していたことを踏まえ、強化と普及、さらにはそれらを支える組織についての八田の理念を検討していく。

第1項：学校柔道の禁止に伴うレスリングへの転向に対する対応

前述の通り、戦後、GHQ/SCAPの民主化政策の一環として学校における柔道が禁止されたことで、柔道を辞めてレスリングへと転身する選手が増えることになる。このような転向は、柔道に取り組んでいた人にとってはやむを得ない選択であり決して前向きな選択ではなかった²⁵⁾。しかし、このような事態に対して八田は、「レスリングとはどんなものかと云へば近頃私は裸で柔道をしてゐる様なものだ」（八田，1949，p. 14）と考え、「裸の柔道」（八田，1949，p. 14）の実践を推奨した。ここでいう「裸の柔道」とは、レスリングのユニフォームを着て柔道をすることを意味する。そして、ここで重要なのは、八田が「裸の柔道」を推奨している点である。なぜなら、前章で指摘した通り、戦前の八田はレスリングと柔道を混同することに批判的であり、「裸の柔道」という表現は柔道選手がレスリングを柔道の延長で行っている姿勢を揶揄したものであったからである。実際に八田は、「私が今から二十年前にレスリングを日本で始めた時には、レスリングは柔道と異なるものであると云ふことを力説したのである」（八田，1949，p. 14）と、「裸の柔道」に対しての評価が変わったことを述べている。このような八田のレスリングと柔道の関係性に関する考え方の変化の要因としては、上述した学校柔道の禁止に伴う柔道選手のレスリングへの転身という状況に加えて、「ヘルシンキのオリンピック大会で石井が優勝するまではレスリングと柔道とは異なるものであると主張してきた」（八田，1957，p. 36）と述べている通り、1952（昭和27）年の第15回夏季オリンピック競技大会（以下、ヘルシンキ大会）において石井庄八が金メダルを獲得したことが挙げられる。八田は、石井の活躍を見て「レスリング優勝の陰に柔道の力ありと・・・中略・・・日本のレスリングに柔道の土臺がなければ今日のレスリングの成果があげられなかつた」（八田，1953，p. 34）と考えるようになった。そのため、柔道をやらずにレスリングを始めた選手に対して、「日本のレスリングを強くする為にはレスラーはこれから皆柔道を盛んにやらなければならない」（八田，1957，p. 39）

とまで指摘している。

第2項：「裸の柔道」の意味

前述の通り、八田は戦前に批判していた「裸の柔道」を戦後に肯定的に捉えるようになった。ただし八田は、単にレスリングの柔道化を目指したわけではない。むしろ、この時期の八田の「裸の柔道」とは、柔道の特徴をレスリングにどのように活かすのか、という柔道とレスリングの接合を目指したものであった。

では、八田によるレスリングと柔道の接合とは、どのようなものであったのだろうか。八田が最も重視したのが、レスリングと柔道の技術的な共通点と階級制である。前者について八田は、「スタンドレスリングは柔道の立業と同じ」（八田，1949，p. 15）であり、「グラウンドレスリングは柔道の寝業」（八田，1949，p. 15）あると述べ、両方の技術が必要であるフリースタイルについて、以下の通りに指摘している。

フリースタイルと云つて、グリコ・ローマンの様な制限がなく足腰自由に使へるレスリングでスピードもあり見ても面白いので此の方が世界的に盛んになりつゝある。柔道や相撲の下地のある日本人にはフリースタイルが適してゐることは勿論である（八田，1950，p. 24）

勝敗の決するのはフォールと云ふて、両肩が同時にマットにつくことを云ふのである。・・・中略・・・両肩がどんな形でも差支えなく、又自から両肩をつけてもフォールである、柔道家の用ひる巴投などは禁物である。別にローリングフォールと云ふのがあるが、ごろく横に早くころがるのはフォールとならぬが、もとへころがりかへればフォールである。フライングフォールと云ふのは投げてつくことを云ふので柔道の投業で用ひられれば何んな業を用ひてもよい（八田，1949，p. 15）

つまり八田は、レスリングのフリースタイルが柔道や相撲の経験がある日本人に適していると考えており、特に柔道の投げ技がフォールを取るのに有効であると考えていた。

また後者の階級制について八田は、「レスリングが柔道の試合法と一番異なるところは體重の差によつて八つに階級を分けて試合を行ふことにある」（八田，1950，p. 24）と述べ、階級制がレスリングと柔道の最も異なる特徴であると考えていた。そして、レスリングの階

級制について、柔道との対比から次のように評価している。

レスリングと柔道と最も異るところは、體重によつて階級を分けて試合を行ふことである。柔道の眞髓は小さな者か大きな者を自由になげたり押さへたりするところにある。然しスポーツとしては公平と考へられない（八田，1949，p. 16）

このように、スポーツにおける「公平」な競争にとって階級制が重要であると考えた八田は、以下の通り、階級制こそ柔道とレスリングの接合に重要であると考えていた。

近頃の柔道選手権大会のやうでは十五六貫の選手では全然よりつけないが、このやうに階級を分ければ軽い者にも選手権に出場の機会があり、又、そのまゝオリンピックへ出場してレスリングの試合にも出場出来る。柔道家が自然とレスリングに馴れ、海外普及に出ても惨めな目に合はずに濟むと思ふ（八田，1949，p. 16）

柔道、角力では如何に技術が優秀でも十四、五貫臺では選手権もとれず、又國際試合に出て鍛錬された二三十貫の大男を自由にすることは一寸不可能である。然しレスリングならば十四貫でもフライ、若くはバンタムで世界の檜舞臺に出て立派に活躍出来るのである。・・・中略・・・日本人にとってレスリングが有望である理由に柔道や角力の下地があることがあげられる。そして日本人の平均體重は十四、五貫であるから、此の階級から出てくるためには非常な競争をしなければならない。十七、八貫の平均體重の外國の選手は體が小さいと云ふだけで選手になれるので、大勢の中から出た日本の輕量選手は小人數の中から出た外國の輕量選手よりは強いと云ふことが出来る。來るべきヘルシンキのオリンピック大會にはライト級以下の輕量級に必ず日本選手が優勝來るものと私は確信を持つてゐる。（八田，1950，p. 24-25）

ここで着目する点としては、八田が階級制によつてもたらされる「公平」な競争を重視している点である。このような立場から八田は、柔道に対して、体重が無差別の中で競い合うという競技としての価値は認めつつも、「スポーツとしては公平と考へられない」（八田，1949，p. 16）との見解を示している。

このように、戦後に「裸の柔道」という理念を掲げた八田は、一見すると戦前に目指した

レスリングの自立化という理念を戦後になって放棄して、レスリングを柔道に内包されたものとして捉えるようになったように理解できるが、そうではない。なぜなら、上記の通り、柔道家がレスリングに転向するという状況は八田の意思とは関係なく、GHQ/SCAPによる学校柔道の禁止に伴ったものであり、このような状況において八田は、柔道家に対してレスリングと柔道の接合点を模索したからである。すなわち、柔道とレスリングの技術的な共通点や体重の階級制が採用されるレスリングでは無差別級の柔道で活躍する可能性の低い体重の軽い選手が活躍できる可能性が高いと考えたに過ぎない。そのため、八田は、GHQ/SCAPによる学校柔道の禁止が解かれた後でも、柔道家に対して柔道の競技力向上のためにレスリングの実践を推奨しており、その一方で、柔道の実践経験のないレスリング選手に対しては、柔道の実践を盛んにすることで強化を図ると述べている(八田, 1957, p. 39)。このように、八田はそれぞれの競技力向上の為に手段的に互いのスポーツを実践することを推奨したのであり、あくまでレスリングはレスリングとして、柔道は柔道として互いの利点を生かしながらも自立して実践するべきであると考えていた。

このように、八田の「裸の柔道」という理念は、あくまでもスポーツとしてのレスリングに柔道を技術的に活用することができるという意味において柔道とレスリングの接合した状態を意味していたと考えられる。加えて、体重による階級制が、体重の軽い選手に有利にはたらくという点は、前章において明らかとなった八田の理念である「正統」なレスリングにも含まれていた。つまり、「正統」なレスリングと、「裸の柔道」は、部分的に共通しており、「裸の柔道」は、戦前とは明らかに異なる時代的状况に伴ってレスリングに転向した柔道家に対して述べられたものであると言える。

このように八田は、戦後間もない時期に学校柔道が禁止となり柔道家がレスリングに転向したことを背景に、柔道とレスリングを接合した「裸の柔道」の実現を目指していった。

第3節：「裸の柔道」の実現に向けた実践

前節で整理した通り、八田は、GHQ/SCAPによる柔道の禁止に伴う柔道家のレスリングへの転向を背景に、柔道とレスリングを接合させた「裸の柔道」という理念を掲げていた。では、具体的に、八田は「裸の柔道」という理念をどのように実現しようとしたのであろうか。

第1項：日米交流を通じた「技術」重視のレスリングの実現

レスリングと柔道の接合を考える八田にとって、当時レスリングで世界一のアメリカチームは自らの理想を体現する存在であった。そのため八田は、レスリングの復興期において積極的にアメリカ人選手との交流を深めていった。

八田がアメリカのレスリングの実態を知るうえで、最も重要であったのがブルノー選手との交流である。ブルノー選手との出会いについて、八田は以下のように回顧している。

私が二十三年前ロスアンゼルスオリンピック大会に参加した時のコーチ、モーア氏の養子で当時の高校生が、私の練習相手をしてくれたが、それがミリオーブルノー君である。ブルノー君は後にレスリングの一三七ポンド全米選手権保持者にまでなったが、ロスアンゼルスオリンピック当時に見た我々の柔道が忘れられずレスリングから柔道に転向してしまつた。ブルノー君がアメリカの空軍の選手を連れて、毎年講道館に練習にくることは皆さんのよく知つておられる通りである（八田，1957，p. 38）

このように戦前の八田も出場した1932年の第10回夏季オリンピック競技大会（以下、ロサンゼルス大会）がきっかけでブルノー選手との交流が始まり、「何時も二人の話はレスリングと柔道の話になる」（八田，1957，p. 38）くらい交流が盛んであった。



図 24：八田一朗が交流したブルノー氏が来日した時の写真

では、なぜ八田はこのようなブルノー選手と盛んに交流したのであろうか。それは、「アメリカの私の友人であるレスラーブルノー君は盛んに柔道の研究をして」（八田，1949，p. 14）おり、「彼等の體力と科學的な研究法は數年を出でずして完全に日本の柔道をアメリカのものにして」（八田，1949，p. 14-15）いたからである。つまり、ブルノー選手は、八田にとって自らの「裸の柔道」という理念を体現する存在であった。そして、ブルノー選手を始めとして、アメリカ人の「心あるレスリングの連中は柔道をレスリングに取入れることを研究している」（八田，1957，p. 38）状況を知った八田は、日米交流戦を開催して、柔道を研究したアメリカ人選手がどのようなレスリングをするのかを探ろうとした^{注26}。

日米交流戦は、八田が自らの理想とする「裸の柔道」を実現しているアメリカ選手たちとの交流の場であり、八田がその後のヘルシンキ大会での日本人選手の活躍の要因となったと考える重要な大会であった（八田，1952）。また、レスリングの強化だけでなく普及においても重要な大会であったと位置づけられていた（塩見，2010）。

1回目の日米交流戦（以下、第1回日米交流戦）は、1950年7月15日から8月9日にかけて日本で行われた。第1回日米交流戦のアメリカチームは、各階級1人ずつに監督とコーチを合わせた表33の7名であった。

表 33：第 1 回日米交流戦のアメリカチーム

役職・階級	名前	所属等
監督	レイズ・オードウィン	AAU レスリング委員会副委員長
コーチ	エミリオ・ブルノー	全米選手権ウェルター級王者
フライ級	レーランド・クリステンセン	ロンドンオリンピック代表
バンタム級	フランク・オルタン	アイオワ師範大学, 1950 年度全米 2 位
フェザー級	リチャード・ハウザー	コーネル大学, 1950 年度全米 1 位
ライト級	ローエル・ランジ	コーネル大学, 1950 年度全米 1 位
ウェルター級	ウィリアム・スミス	アイオワ師範大学, 1950 年度全米 1 位

報知新聞, 1950 年 7 月 2 日付, 朝刊を元に筆者が作成

さらに, 第 1 回日米交流戦の結果は表 34 の通りである.

表 34：第 1 回日米交流戦の概要

日付	会場	集客数	日本人の戦績
1950 年 7 月 15 日	東京都芝スポーツセンター	2000-7000	1 勝 4 敗
1950 年 7 月 19 日	神奈川県ゲーリック球場	5000	0 勝 4 敗
1950 年 7 月 22 日	東京都芝スポーツセンター	6000	2 勝 3 敗
1950 年 7 月 26 日	愛知県日活スタジアム	3000-4000	1 勝 4 敗
1950 年 7 月 29 日	兵庫県甲子園大プール	1500-3000	2 勝 3 敗
1950 年 8 月 1 日	広島県広島中央テニスコート	4000-5000	0 勝 5 敗
1950 年 8 月 5 日	宮城県常盤木学院体育館	数百	1 勝 4 敗
1950 年 8 月 9 日	東京都青山レスリング会館	1000 余り	3 勝 2 敗

塩見 (2010) を元に筆者が作成

このように計 8 回行われた日米交流戦において日本が勝ち越せたのは 1 回のみで, 日本チームにとっては大きな実力差を見せつけられるものであった (日本レスリング協会, 2012). 特に 1950 年 7 月 15 日の初戦は, 「スタンディング・レスリングに強味をもつ米選手とグラウンド・レスリングに秀でた日本選手」 (朝日新聞, 1950 年 6 月 29 日付, 朝刊)

や「すばやい米選手 力技に頼る日本学生軍」(朝日新聞, 1950年7月15日付, 朝刊)と表現され, アメリカチームと日本チーム両者の構図が試合前から報じられて期待が膨らんでいたが, 結果は以下の通りであった.

米軍はスピーディーな足取りやゴー・ビハインド(相手の後に回る技)を見せて学生軍を圧倒し, 4-1でトップを飾った. . . . (中略) . . . 日本が得意のはずの寝技でも米国各選手は, 足腰が強くムダなく働かせ, 腕取りからネルソンに入り攻めるボデープレスなどうま味を見せた. (朝日新聞, 1950年7月16日付, 朝刊)

このように日本人選手が「大敗」(朝日新聞, 1950年7月16日付, 朝刊)した第1回日米交流戦に対して, 八田も, 「アメリカの技術にすっかり圧倒されてしまった」(八田, 1953, p. 30)と述べており, 日本人選手の技術の習得不足が原因であると指摘している.

2回目の日米交流戦(以下, 第2回日米交流戦)は, 1951年2月6日から5月27日にかけてアメリカで行われた. 第2回日米交流戦の日本チームは, 表35の通りである.

表 35 : 第 2 回日米交流戦の日本チーム

役職・階級	名前	所属等
団長	八田一朗	日本レスリング協会会長
フライ級	帽田次郎	早稲田大学
バンタム級	石井庄八	中央大学
フェザー級	永里高平	早稲田大学
ライト級	神田幸二	拓殖大学
ウェルター級	風間栄一	早稲田大学 OB

日刊スポーツ, 1951年2月6日付, 朝刊を元に筆者が作成

さらに, 第2回日米交流戦の日本チームの戦績は, 表36の通りである.

表 36 : 第 2 回日米交流戦の概要

日付	場所	日本チームの戦績
1951 年 2 月 24 日	カリフォルニア州・マリポサ	5 勝 0 敗
1951 年 2 月 26 日	カリフォルニア州・ペタルマ	4 勝 0 敗
1951 年 2 月 27 日	カリフォルニア州・バークレー	5 勝 0 敗
1951 年 2 月 28 日	カリフォルニア州・サンノゼ	4 勝 1 敗
1951 年 3 月 2-3 日	カリフォルニア州・オークランド	西部レスリング選手権で 2 名優勝
1951 年 3 月 12 日	アイオワ州・シーダーフォール	0 勝 5 敗
1951 年 3 月 20 日	ニューヨーク州・ニューヨーク	3 勝 2 敗
1951 年 3 月 28 日	ニューヨーク州・ニューヨーク	5 勝 0 敗

朝日新聞 (1951 年 2 月 28 日付, 朝刊), 朝日新聞 (1951 年 3 月 1 日付, 朝刊), 朝日新聞 (1951 年 3 月 2 日付, 朝刊), 朝日新聞 (1951 年 3 月 4 日付, 朝刊), 朝日新聞 (1951 年 3 月 5 日付, 朝刊), 朝日新聞 (1951 年 3 月 14 日付, 朝刊), 朝日新聞 (1951 年 3 月 22 日付, 朝刊), 朝日新聞 (1951 年 3 月 30 日付, 朝刊) を元に筆者が作成

これらに加えて、ネブラスカ州オマハ、イリノイ州シカゴ、ニューヨーク州イサカ、メリーランド州ボルティモア、ペンシルバニア州、オクラホマ州、カリフォルニア州サンディエゴおよびサンフランシスコでも試合が行われており (永里, 1952), 第 2 回日米交流戦はアメリカ西部のカリフォルニア州を中心にしながらもアメリカ国内を広く転戦していたと考えられる。

さらに、このような第 2 回日米交流戦は、単に試合を行うだけでなく、レスリングに関連した制度や施設等の見学も行われた。永里 (1952) は、自身が見たアメリカのレスリングの制度について、次のように述べている^{註 27)}。

米国ではコーチ制度が実に立派に発達し、高校、大学、YMCA 等は専門の優秀なコーチがおり、体育の必須課目を受ける一般学生や部員を専心指導に当たっているので良い設備と相まって愉快地にレスリングが楽しめる。大学の選手は卒業すると一流選手は大学に二流どころが高校へのコーチになる、このコーチ専任制度はうらやましいかぎり

だ。(永里, 1952, p. 186)

では、このようなアメリカのレスリングの実態を知る機にもなった第2回日米交流戦は、八田の「裸の柔道」の実現にどのように関わっているのだろうか。八田は、第2回日米交流戦の結果を回顧する中で、「この遠征で力のレスリングは不成績であることが実証され、スピードのレスリングに切り替えた」(八田, 1953, p. 30)と述べている。つまり、第2回日米交流と通して、八田は日本人選手の「力」に頼った戦い方が間違っていることを確信したのである。このような「力」のレスリングからの脱却については、八田の指導を受けた石井や永里も以下の通りに言及している。

八田会長はあらゆる苦難を押し切って2回のアメリカ遠征と2回のアメリカ・チーム招待試合をやられたのですが、これにより日本レスリングがスピードと柔軟性のあるレスリングに変わったことが何よりの勝因であると思います。つまり“スピード”と“技”が“力”に勝ったのです。・・・中略・・・日本レスリング界もこれからだと思います。八田会長のいわれるスピードと技の方針で進むこと、それにブリッジの練習をもっともっとして首を強くして攻め技を勉強することが肝要であると思います。(朝日新聞, 1952年8月3日付, 朝刊)

この遠征(第2回日米交流戦: 筆者加筆)での収穫は、何と云つても自信をつけた事と、技術を学び得た事であった。特に柔軟性、粘着性、スピード等が理解出来た事は大きかった。両足タックルは日本選手の方が、より以上に巧まかったが、米選手の片足タックルには相当に苦勞したので、片足取りのタックルの必要を感じた。(永里, 1952, p. 188)

このように、第1回及び第2回の日米交流戦を通して、八田は、「力」のレスリングから脱却し、「技術」のレスリングに移行することの重要性を感じていた。そのため、八田にとってレスリングと柔道の接合を意味する「裸の柔道」とは、「力」ではなく、「技術」を重視したレスリングを意味していた^{注28)}。つまり、八田は柔道特有の技術をレスリングに取り入れようとしたのではなく、技術を駆使して競い合うという柔道の発想を参考にしながらレスリング特有の技術を探求する試みであった。

3回目の日米交流戦（以下、第3回日米交流戦）は、1951年7月28日から8月26日にかけて日本で行われた。第3回日米交流戦では、来日したアメリカチームはフライ級を除く5階級1人ずつと監督を合わせた表37の6名であった。

表 37：第3回日米交流戦のアメリカチーム

役職・階級	名前	所属等
監督	ジョン・マンデル	ニューヨーク市レスリング協会長
バンタム級	ジョージ・クリーソン	ニューヨーク・A・C, 全米1位
フェザー級	リチャード・デルガド	サンディエゴ海兵団, 全米2位
ライト級	ジャック・ブルバウフ	オクラホマ大学, 全米1位
ウェルター級	アラン・ペターソン	ケース大学, 全米2位
ミドル級	ウィリアム・ウィック	オハイオ教育大学, 全米2位

朝日新聞（1951年7月3日付，朝刊）を元に筆者が作成

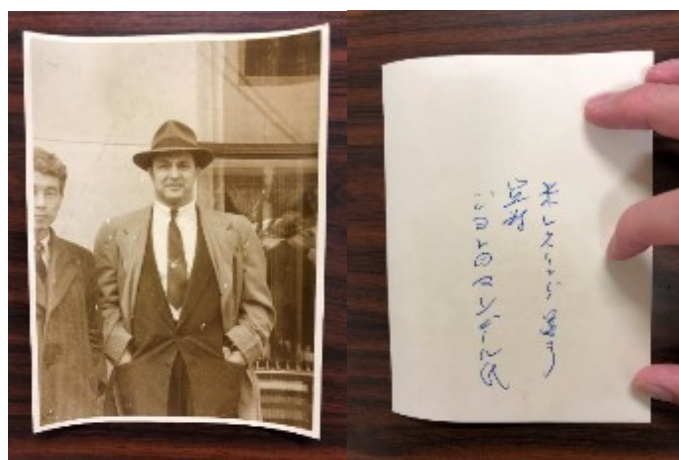


図 25：アメリカチーム監督ジョン・マンデル氏が第3回日米交流戦に来日した時の写真

第3回日米交流戦の日本チームの戦績は、表38の通りである。

表 38 : 第 3 回日米交流戦の概要

日付	場所	日本チームの戦績
1951年7月28日	東京都両国メモリアルホール	4勝1敗
1951年8月1日	東京都両国メモリアルホール	3勝2敗
1951年8月3日	千葉県千葉市営競輪場	1勝4敗
1951年8月7日	兵庫県王子公園体育館	2勝3敗
1951年8月10日	新潟県白山市営球場	1勝4敗
1951年8月12日	秋田県記念会館	2勝3敗
1951年8月18日	愛知県金山体育館	1勝3敗
1951年8月24日	東京都後楽園競輪場	3勝2敗
1951年8月26日	東京都後楽園バレーコート	1勝2敗

塩見（2010）を元に筆者が作成

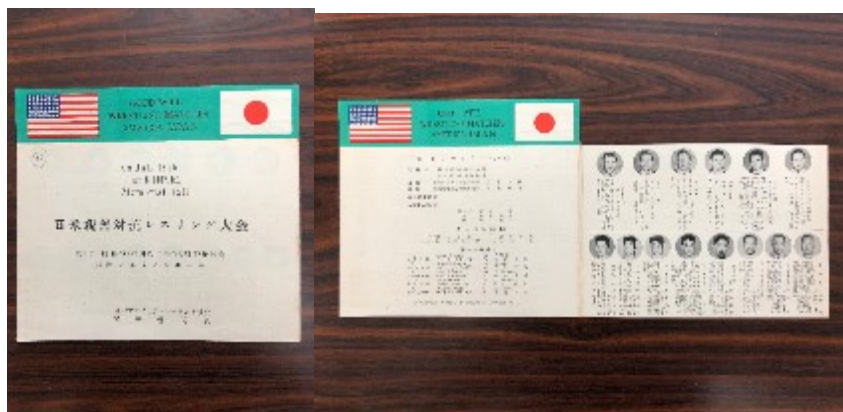


図 26 : 第 3 回目日米交流戦における大会パンフレット

このように、第 3 回日米交流戦の日本チームは 3 回しか勝ち越すことができなかった。しかし、日本チームの監督を務めた伊集院浩は、第 3 回日米交流戦の日本チームに対して、次のように評価している。

昨年米選手を招へいした日本のレスリングは勝負も問題にならなかった。これは初の国際試合に選手が負けまいと努力した結果、技が消極的に陥ったためである。・・・(中

略)・・・『去年は相手の技を待ちすぎたから今年はこちらから積極的に攻めて行け、米チームを呼んだのは先方の技を覚えるため勝負にこだわってはならない』これが日本チームの合宿間における指導方針だった。この準備が今回の日米対抗に日本チームの好成績を収めた所以だと思う。(スポーツニッポン、1951年8月23日付、朝刊)

このように、第3回日米交流戦は、アメリカ人選手の技術を学び取ることが目指されており、その観点から上記の結果以上の収穫があったことがわかる。実際に、第3回日米交流戦の前に行われたアメリカチームの練習の様子は、以下のように報じられていた。

フットワークは前後の動きよりよく横に動く相手の左へ左へと小刻みに跳びながら回り機を見て思い切ったタックルに出るが、しっかり身体を入れ切っている。また攻め技を変える時相手の力を利して実に思い切った姿勢転換を示す。手にことさら力を入れず身体全体で相手を制して来るので何処に攻撃の重点があるか判らぬ。・・・中略・・・こんなところが練習第1日からうかがえる特徴^マだ。(スポーツニッポン、1951年7月23日付、朝刊)

このように、アメリカチームに対する技術的関心は日本チームのみならず共有されていた。また、実際に日米交流戦の日程が進んでいくと、次のような新聞記事も見られた

ウィックはわが国の相撲の言葉でいえば懐が深く飛び込みにくいし、攻撃に当っては軽い上突張りで敵の体を起して素早く低いタックルに移るタイミングのよさなど、その呼吸によいところあり今回の遠征軍中の花形である。たゞにウィックの強さばかりでなくその技の巧さ速さも大いに参考とすべきであろう。もし八田氏のいう如く風間のレスリングが技よりも力にたよりすぎる欠点があるならば、今後風間をはじめ日本のレスラーが大いに考えなければならぬところであろう。(日刊スポーツ、1951年8月3日付、朝刊)

このように、アメリカチームの選手の技術がスピーディーなパフォーマンスにつながっている、ということの評価したことが確認できる。これらの点から、第3回日米交流戦では、アメリカチームの選手との試合を通じてレスリングにおける技術的要素を学びとると

いう日本チームの方針が、第 1 回日米交流戦と同様に含まれていたことがうかがえる。ただし、第 3 回日米交流戦の日本チームの結果に対して、「今次日米試合からうけたものは昨年の『学ぶレスリング』から既に日本選手のレベル評価の時代に入った」（日刊スポーツ、1951 年 8 月 28 日付、朝刊）という評価もある。このことから、一方的に日本人選手がアメリカ人選手から技術を学ぶというよりは、更なる競技力向上に資するレスリングの技術的要素を学び取る相手としてアメリカ人選手を捉えており、第 3 回日米交流戦における日本人選手の結果は日本人選手の競技力が向上している手ごたえを感じるに足るものであったと考えられる。

4 回目の日米交流戦（以下、第 4 回日米交流戦）は、1951 年 12 月 20 日から 1952 年 4 月 13 日にかけてアメリカで行われた。第 4 回日米交流戦で渡米した日本チームは、ミドル級を除く 5 階級 1 人ずつと団長及び監督を合わせた表 39 の 7 名であった。

表 39：第 4 回日米交流戦の日本チーム

役職・階級	名前	所属等
団長	八田一朗	日本レスリング協会会長
監督	伊集院浩	明治大学 OB
フライ級	北野祐秀	慶應義塾大学
バンタム級	鹿熊勝雄	中央大学
フェザー級	川本晴紀	慶應義塾大学
ライト級	霜鳥武雄	明治大学
ウェルター級	別当正恵	慶應義塾大学

読売新聞（1951 年 11 月 12 日付、朝刊）を元に筆者が作成

また、第 4 回日米交流戦の概要は、表 40 の通りである。



図 27：日本チームが第 4 回日米交流戦に渡米した時の写真

表 40：第 4 回日米交流戦の概要

日付	場所	戦績
1952 年 1 月 23 日	コロラド州・フォートコリンズ	4 勝 1 敗
1952 年 1 月 28 日	サウスダコタ州・ブルッキングス	4 勝 1 敗
1952 年 1 月 31 日	アイオワ州・エイムス	1 勝 1 敗 1 分
1952 年 2 月 6 日	アイオワ州・シーダーフォール	2 勝 3 敗
1952 年 2 月 13 日	インディアナ州・ラファイエット	3 勝 1 敗
1952 年 2 月 14 日	オハイオ州・トレド	2 勝
1952 年 2 月 21 日	ニューヨーク州・ニューヨーク	4 勝 1 敗
1952 年 2 月 29 日 -3 月 1 日	カリフォルニア州・オークランド	レスリング西部選手権に 出場し 2 名優勝

朝日新聞（1952 年 1 月 30 日付，朝刊），朝日新聞（1952 年 2 月 2 日付，朝刊），朝日新聞（1952 年 2 月 8 日付，朝刊），朝日新聞（1952 年 2 月 15 日付，朝刊），朝日新聞（1952 年 2 月 16 日付，朝刊），朝日新聞（1952 年 2 月 23 日付，朝刊），読売新聞（1952 年 1 月 25 日付，朝刊），読売新聞（1952 年 3 月 3 日付，朝刊）を元に筆者が作成

これらに加えて，第 4 回日米交流戦では，1952 年 1 月 2 日にアメリカに到着し，同年 1 月 3 日から 1 月 20 日までの間にカリフォルニア州サンディエゴ，サンフランシスコでも試合が行われた（川本，1952，p. 195）．また，同年 2 月 22 日にもニュージャージー州で試

合が行われた。その際、歓迎を受けたことを参加した川本が次のように述べている。

そして二十二日にはニューヨークから三〇分で行けるニュージャージー州に行きこゝで試合することになりました。・・・中略・・・先づ自動車二台に分乗してその前に日米両国旗を交え先頭に M・P の自動車を先導させサイレンを鳴らしてその個所だけは交通を停止させて行進するのです。私達はこのとき程愉快に思ったことはありませんでした。(川本, 1952, pp. 205-206)

このように、試合のために向かったニュージャージー州で特別な歓迎を受けており、日米交流戦が国際親善という役割もあったことがうかがえる^{注29)}。



図 28 : オークランド市長への表敬訪問を報じる現地新聞



図 29 : オークランド市長への表敬訪問を報じる現地新聞で使用された写真（オークランド市長からのメッセージ入り）

第 4 回日米交流戦における試合結果についてみると、新聞報道上では負け越したのは 1 回であった。ただし、川本の紀行文において言及されている試合や、監督の伊集院浩の経過

報告が掲載された新聞記事で「ニューヨークに入る前にペンシルヴァニアで3-1で敗れた」(スポーツニッポン, 1952年2月28日付, 朝刊)と述べられているように, 実際には新聞紙上で報じられている以外の試合も行われていたと考えられる。また, 1952年1月30日の『日刊スポーツ』の記事では, 「渡米後既に3週間を過し8試合を消化5勝2敗1分けの好成績をおさめているがルールはカレッジ・ルールだし体重も遥かに多い米選手を当てられて相当な苦行を積んでいるらしい」(日刊スポーツ, 1952年1月30日付, 朝刊)と渡米中の選手からの報告も確認できる。さらに, 同年2月13日の試合が終わった時点で「日本チームの戦績は15戦9勝2引分4敗となった」(スポーツニッポン, 1951年2月22日付, 朝刊)と報じられていた。これらの記事から, 第4回日米交流戦の日本チームは概ね順調に勝ち進み, 大きく負け越すような事態にはならなかったものと推察される。このような第4回日米交流戦の結果に対して, 八田による直接的な言及は管見の限り確認できない。ただし, 監督である伊集院浩が「各選手は技術的に非常に進歩を示し, 特に外人に対する試合の持っていき方が巧くなった」(『八田コレクション』所収資料)と第4回日米交流戦に参加した日本人選手に対して評価していることから, 少なくとも第4回日米交流戦を通じて, 日本人選手の技術の向上が図られたことは推察される。

第2項：リーダーシップによる信頼関係の構築

八田は, 「裸の柔道」という理念を実現するために, 組織づくりも重視していた。八田の組織に関する理念の前提には, 戦時中の自らの体験を通じた組織批判がある。具体的には, 八田は, 戦時中の北支那開発株式会社の幹部や旧日本軍, さらには日本政府に対して批判を展開した。

まず, 北支那開発株式会社の幹部への批判である。八田は, 「北支の開発会社に務めていたときも, 上役にはいやな思いをした」(八田, 1979, p. 175)と述べる。ここでいう「いやな思い」とは, 戦時中に「会社の幹部連中は, 派遣軍の連中と酒を飲んでおった」(八田, 1979, p. 176)こと, 「支那人をいじめた」(八田, 1979, pp. 177)こと, そして終戦後に彼らが「こそこそ逃げ歩いて, どうにもならない」(八田, 1979, pp. 176)ことであった。つまり八田は, 派遣軍を後ろ盾にして弱いものに嫌がらせをしたにも関わらず後ろ盾を失った際にはどうすればわからなくなった会社の幹部の態度に対して, 批判的な考えをもっていた。他にも八田は, 様々な要職に就く会社の上司に対して, 以下のように批判的な見解を示している。

副総裁は、終戦のときまでは、東交民巷の邸宅に住んでいて、大きな顔をしていた。孫連仲の軍隊が邸に入ってきたので、わたしが案内して、「家財道具をくれてやる」というと、彼らはトラックで来て、なんでもかんでも持っていってしまう。それは、本来はまだ支那の税関のもので、主人公が帰って来たときに、ろくなものしかないと、副総裁がとがめられて、困るわけである。持っていかれたほうは、自分がやられると思うから、命がけだ。しかし、それも、いいこらしめである。(八田, 1979, p. 177)

引き揚げのときなんか、いままで威張っていたのが小さくなって、夜中に戸外で、ちょっとでも物音がすると、びくびくものだ。威張りちらしていた副総裁なんか、机の下にかくれてしまう始末である(八田, 1979, p. 176)

このように八田は、副総裁の立場を利用して弱い立場の人間にある人を理解しようとせず威張っているにも関わらず、有事の時には何もできない副総裁を批判的に捉えていた。さらに、同社の経理部長に対しては、以下のように批判している。

終戦前、給料を三万円もらっているのだが、これは物価が違うから、内地では、せいぜい二、三百円かそこらだろう。それを経理部長の権限を利用し、内地に送れば、たいへんなもうけになる。そういう悪いこともやっていたのだ。料理屋にも、自分の好きな女をかこったり、金を動かして、不当の利益をとってみたりしていたから、けしからん。そんなに威張っていたのに、度胸がなくて、全然ダメだ。アメリカ軍が入ってきても、すくんで、まともに話ができない。(八田, 1979, pp. 177-178)

このように、戦時中に自らの立場を利用して不当な利益を得る経理部長が、終戦とともに態度を一転させて弱気になったことに対して批判的に捉えていた。

次に、八田が戦時中に所属した旧日本軍の自動車部隊への批判である。前述したように八田は戦時中、自動車部隊に主計中尉^{注30)}という立場で従事していた。八田は当時を回顧する中で、戦時中に「ぜいたくな勝手きまま」(八田, 1979, p. 61)な部隊長に対して「なっていなかった」(八田, 1979, p. 61)と述べ、「この隊長だけでも日本は負けるといつてよいようなおやじ」(八田, 1979, p. 61)であったと評価している。八田が戦時中に所属し

た部隊長に対して批判していたことは他の著作においても確認でき、八田が部隊長をこのように評価する背景には、この部隊長が、自ら統括する部隊の部下に対して、「隊長専用の風呂や脚付お膳まで運」(八田, 1964, p. 79) ばせたり、「兵隊用の酒保で、物資を買い占めて国に送ったり、妾にしていたクーニャンのために毛布をよこせといたり」(八田, 1964, p. 79), ある時は「みそ汁をアルミの食器に入れて出すとご機嫌が悪」(八田, 1964, p. 79) くなり、「『みそ汁はお椀で飲むものだ』という。『お椀を持って歩け』」(八田, 1964, p. 79) と命令したりする姿を八田が見ていたからである。八田は、このような部隊長の「勝手気まま」(八田, 1979, p. 61) で「わがまま」(八田, 1979, p. 61) な態度を「誤ったリーダー・シップの典型」(八田, 1979, p. 175) と揶揄し「こんな男が部隊の指揮官であって、兵が気持よくいうことをきくはずがない」(八田, 1979, p. 62) と批判している。つまり八田は、「率先垂範とはおよそ逆の不愉快な例ばかり」(八田, 1979, p. 179) で、「すすんで苦勞」(八田, 1979, p. 179) しない部隊長の態度では、「みなが心から服従して、ついてきて」(八田, 1979, p. 179) くない、と考えていた^{注31)}。

最後に、「日本政府」への批判である。八田は、終戦後、引揚者として帰国すると、まもなく引揚者の支援を行った。このような八田の活動の背景には、日本政府への批判があった。引揚社が発刊した雑誌『引揚者』(1946年)の創刊号の冒頭で、八田は、以下のように指摘している。

海外から同胞が毎日続々と引き揚げつつある。読者は折々引揚者の群が駅頭に悲惨な姿を曝らしてゐる様子を見かけることがあるであらう、背中にしよつてゐるリュックサックと両手に提げてゐる小さな袋が引揚者の全財産である。懐中には上陸地で交換してくれた千圓が僅かにあるばかりである。彼等は一應何處かへ落付くであらふが今後の生活のことを考へれば暗澹たるものがある。政府は無力である。援護団体もいろ／＼あるが不親切なものが多い。我々は同志と雑誌『引揚者』を発刊し、政府並びに援護団体を鞭撻し又引揚者の職業を補導し相互扶助自力更生の道を講ぜんとするものである。(八田, 1946, p. 1)

このように八田は、引揚者の救済をしない日本政府や不親切な援護団体への批判を元自ら引揚者の救済を行ったのである。

つまり、八田の批判は、会社の幹部や旧日本軍、さらには日本政府等の組織において、上

位の者が自らの立場を利用して下位の者に対して自分勝手な態度をとることで信頼関係が築かれず、結果的に組織が機能不全を起こし目標が達成されないことに対するものであった。このことから、八田は、上位の者が下位の者に対して配慮した態度で接することで信頼関係を築くことが組織の目標達成のために必要である、と考えていたことがわかる。

このような反省に基づいて、八田は、指導者としてただ選手に厳しいトレーニングを課すだけでなく、自分も率先して一緒にトレーニングを行うことで信頼関係を構築することに努めた^{註 32)}。例えば、冬季合宿に際して実施された寒中水泳というトレーニングについて、八田は次のように述べている。

寒中水泳をやらせるのである。しかし、指導者がこたつに入っていて、「おい水泳をやれ」では絶対にだめである。率先垂範しなければならない。若い連中が、そんなものとはとてもできない、と思っているときに、わたしが、裸になって海に飛び込めば、みんなびっくりしてついてくる。はじめは、不承無承ついてくるというありさまだ。わたしは、毎朝水をかぶっているから、こんなことは平気だが、ふだんやっていない選手たちは、いきなり寒中水泳をさせられるのだから、度胆を抜かれる。(八田, 1964, pp. 117-118)

このように、厳しいトレーニングを監督やコーチが率先して行うことで、「選手をひっ張ってゆく」(八田, 1964, p. 119) ことを実践していた^{註 33)}。他にも、八田(1965b)は、ヘルシンキ大会後に実施された海外遠征を回顧する中で、次のようなエピソードを挙げている。「ヘルシンキ大会が終わってから各地を転戦したが、飛行機を利用すると金がかかるので、汽車にしたことがあ」(八田, 1965b, p. 145)り、「ドイツの国境からイギリスに渡るまでの二十四時間、丸一日というものは、大へんな混雑で、坐ることはおろか通路に立どうしだった」(八田, 1965b, p. 145)という。八田は遠征したメンバーの中で「一番年長で年もいき、若い彼らにくらべるとむしろ辛いことは辛い」(八田, 1965b, p. 145)状況であったというが、同じく「選手みんな飲まず食わずで、なかにはぐずぐず不平をいうものがいた」(八田, 1965b, p. 145)という。このような選手に対して八田は、「『なんだ、おれでも立っているじゃないか、文句いうな』ということで、みんなもがまんしてくれた」(八田, 1965b, p. 145)という。こうしたエピソードを振り返り、「わたしは選手たちの志気を鼓舞するためには、つとめて率先してやることにしている。それがリーダーのつとめであると思うからだ」(八田, 1965b, pp. 145-146)と述べている。そして、ヘルシンキ大会で

優勝した石井が勝因について、「八田会長はあらゆる苦難を押し切って2回のアメリカ遠征と2回のアメリカ・チーム招待試合をやられたのですが、これにより日本レスリングがスピードと柔軟性のあるレスリングに変わったことが何よりの勝因であると思います」（朝日新聞、1952年8月3日付、東京朝刊）と述べている点を踏まえると、八田が本章の冒頭で述べたような食料危機などの時代的困難の中で、リーダーシップを発揮し日米交流を企画・実行したことがヘルシンキ大会での成功に繋がったと考えられる。つまり、指導者と選手の間で信頼関係を構築することが、八田にとっては「裸の柔道」の実現のための方法として効果的であったと言えよう。このように、八田は自ら日常的に厳しいトレーニングを選手と一緒に行うことで、選手に対して配慮する姿勢を見せたのであり、このような姿勢に基づく組織運営を行っていた。

第3項：「裸の柔道」と実践の結びつき

本節では、八田が「裸の柔道」という理念の実現にむけて行った実践を整理した。レスリングと柔道の接合を目指す八田は、アメリカのレスリング選手が柔道の実践にも関心を示していたことを契機の一つとしてアメリカとのレスリングを通じた交流を図る。ここには、八田が「裸の柔道」という理念を掲げる中、柔道にも関心を示しつつ国際的にも高いレスリングの競技水準をもつアメリカから技術的な要素を学び取るという意図があり、四度にわたってアメリカと交流試合が行われた。つまり、力に頼りがちな日本人選手に対して、いかに技術的な競技水準を高めていくかという問題に対応するための実践でもあったと考えられる。

同時に、この時期の八田は組織のリーダーのあるべき姿についても言及するようになる。八田は戦時中に自分の所属した組織において上位の立場にいた者の振る舞いや戦後の復員にあたっての日本政府の対応に批判的な見解を示したが、その批判からは上位の立場にいる人間がその立場に甘んじて下位の立場の人間に対して何も考慮することなく振る舞うことへの批判であった。このような批判から、八田は、トレーニングを課す際にやみくもに選手へトレーニングを課すのではなく自らが率先して行う等、選手に最大限の配慮することを重視した。このことは、レスリングへの転身を前向きでない柔道家に対して、一方的に論理的な正しさというものを押し付けるのではなく、まずは、信頼関係を構築し、そのうえで自らの理想を体現してもらおうとしていたことを意味する。このような八田の実践は、「裸の柔道」という理念を具体化するための手段という位置づけであったと考えられる。つ

まり、八田は選手との信頼関係を築くことで自らの実践（指導）が受け入れられ、結果的に「裸の柔道」という自らの理念が実現されることに結びついたといえよう。

第4節：第2章のまとめ

本章では、戦後復興期におけるレスリングの受容過程を八田の視点から明らかにすることを目的とした。

この時期は、第二次世界大戦が終わり、GHQ/SCAPの民主化（非軍事化）政策の一環としてスポーツ改革も進められた。具体的には、武道が禁止され、中等学校の武道教員の免許も無効となり退職を余儀なくされるなど、GHQ/SCAPによる民主化政策の下で日本のスポーツはその活動を制限されていった。このような状況で、体協を中心にスポーツの復興が進められていった。そして、1946（昭和21）年には体協の主催のもと第1回国民体育大会が開かれ、水泳や野球、陸上競技など25競技が実施された。これに加えて、バドミントンやソフトボールなど戦前に組織だった活動が見られなかったスポーツ種目においても中央競技団体が組織され、体協へと加盟した。

このようにスポーツの戦後復興が進められる中、レスリングは大学を中心に復興が進められていく。具体的には、早大レスリング部では1945（昭和20）年の秋頃から活動を再開し、同年12月には既に合宿練習を栃木県で行っており、徐々に活動を再開した。その際、戦前期からレスリングを実践していた学生に加えて、戦後新たにレスリングを始めた学生や、GHQ/SCAPによる民主化政策によって武道が禁止されたことに伴ってレスリングに転向した柔道家が参加した。また、戦前のレスリング選手の活躍もあり、レスリングの競技力は高いと理解されていたが、大衆にはあまり親しまれていないスポーツとして認識されていたが、日米交流等のレスリングの大衆化を意図した取り組みも行われた。このように、GHQ/SCAP主導の戦後復興の過程において、戦前からレスリングを実践していた学生に加えて民主化政策の一環として禁止された柔道から転向してきた人によって競技人口が増える一方で、大衆の関心は低いままであったことから、競技力だけでなく少しずつ大衆化も志向するようになっていった。

このような状況で八田は、「裸の柔道」という理念を掲げた。この理念は、レスリングのユニフォームを着てレスリングを行うことを意味し、戦前に柔道の延長でレスリングを行う人を批判する際に用いられていた。つまり、戦後復興期の八田は、レスリングと柔道を結び付ける考え方に肯定的になったということである。ただし、戦後の八田の「裸の柔道」はレスリングと柔道の接合を目指したものであり、技術を駆使して競い合うという柔道の良い面をレスリングに活かそうという八田の想いを表していた。このような八田の考えの背景には、上述の柔道の禁止に伴う柔道家のレスリングへの転向という事態があった。そして、

このような「裸の柔道」を現実のものにするために、八田は日米交流や日本人選手との信頼関係の構築に努めた。

【注】

注 19) 武道教員の免許を失った 1927 人のうち 110 人が体操教員養成講習会などによって 1949 (昭和 24) 年 3 月末までに体操の免許を新たに取得した (古川, 2016).

注 20) 1911 (明治 44) 年に設立された大日本体育協会は, 1941 (昭和 16) 年から大日本体育会, 1948 (昭和 23) 年から日本体育協会, 2018 (平成 30) 年から日本スポーツ協会へと名称を変更している.

注 21) 早大レスリング部のレスリング場は, 戦災により焼失したものの, マットとキャンバスは部員の正田文男によってすでに運び出され地下倉庫に保管されていた (柳澤, 2012, p. 30).

注 22) 表 28 を作成するにあたり, 同志社大学, 明治大学, 拓殖大学, 専修大学, 関西大学, 慶応義塾大学の各大学のレスリング部の部誌を参照した. 部誌が確認できなかった各大学レスリング部の創部・活動再開年については東日本学生レスリング連盟編 (2016), 西日本学生レスリング連盟 (online) を参照した.

注 23) 八田 (1979) は, 中国で終戦を迎えた時の心情を以下のように回顧している.

あの終戦のときには, わたしらも, うちへ帰って, 「もう日本へ帰れるか, どうかかわからぬ, 殺されるかもしれぬ」といって, うちのおふくろと女房に「どうやって死ぬか, 北京城の城壁から飛び降りるか, それとも, わしにバッサリやってもらうか, どっちだ」と話しあったものだった. いよいよとなれば, 家族は自分の手で殺してやらなければならない, というくらいの気持をもつわけだ. (八田, 1979, pp. 175-179)

また, 八田のご子息である八田忠朗氏 (次男) は, 「当時, 3 歳であったので, 引き揚げた時のことについては記憶にないが, 後に父 (一郎) からは, 『日本に引き揚げた直後, 自由ヶ丘に住む親戚に預けられ, しばらくして家族と合流し渋谷に引っ越した』と聞いています. また, 食糧難で多くの人々が米兵から食糧をもらって空腹を満たす中, 父 (一郎) は, 母方の親戚が所有する青山 4 丁目の広大な土地を使って外

苑ホテルを建設するために、米兵から葉巻もらいそれをくわえて銀行に行き融資を受けたと聞きました。母と祖母が料理人や清掃員を2・3人雇ってホテルの経営をしていました」(2021年6月28日)と証言している。八田(1964)は、この時のことを「敗戦後、北支から、無一文で帰ってきたときも、食料よりもまず葉巻をもらってそれをふかして、銀行へいき、金を借りた」(八田, 1964, p. 202.)と述べている。また、八田(1965a)は、以下のようにも述べている。

第二次大戦がすんで、わたしは北京から引きあげてきたが、六人家旅で東京に着いた時、あまりお金がなかった。どうしたらよいかと途方にくれたものだ。その時、アメリカの兵隊に知人がいた。彼は日本人が困っているのをよく知っているから“パンをやろうか、バターはいらないか”とってくれる。腹がすいているから、ノドから手が出るほど欲しい。だがわたしは、「パンはいらない。葉巻きをくれ。」といった。そしてたくさんもらった葉巻きをふかしていると、みんながおどろいた。まわりが食物の話ばかりしている時だから、葉巻きをくわえたヤツが出てくると、なにかえらい人がきたように見えるらしい。なにしろ当時葉巻きを吸っていたのは首相の吉田茂さんとわたしくらいだったから葉巻きをくわえていると、笑い話のようだが、汽車に乗っても、乗務員が金を取ろうとしない。銀行に行ってもすぐ金を貸してしてくれた。それで事業をはじめた。(八田, 1965a, p. 200)

注 24) 今村次吉が初代会長を1934(昭和9)年3月～1941(昭和16)年9月まで務め、野口寛が2代目会長を1941(昭和16)年9月～1942(昭和17)年9月まで務めた(日本レスリング協会80年史編纂委員会, 2012)。

注 25) 当時、早稲田大学レスリング部員だった永里によると、柔道からレスリングに転身した人たちは柔道着を脱ぐのを嫌がっていたという(永里インタビュー, 2011年7月19日)。

注 26) 八田のアメリカ人選手へのまなざしの背景には、日本国内の柔道に対する、以下のような問題意識もあった。

現在の乱取は私の見たところでは高度に進歩しており、現在の域からぬけ出すことは普通的手段では出来ないと思ふ。現在の高度な柔道の亂取に、レスリングの業を加へて、何時でも裸で應戦出来る体勢をとゞのへて置かなければ、時勢から遅くれるであらふ。(八田, 1949, p. 14)

海水浴場などで裸の人間を捕り押へなければならぬ様な時にはレスリングの選手であればいとも簡単にやつてのけられる。柔道家はどうしても相手の稽古着をもたなければ投げられぬと云ふことは、実際の場合には不便なものである。何處ももたずに投げたり押さへたち出来たとすれば柔道の一大進化と私は思ふ。(八田, 1949, p. 14)

このような日本の柔道は遅れている、という意識が八田のアメリカのレスリングへのまなざしにつながっていた。

注 27) 他にも永里は、施設や用具についても、次のように述べている

又行く先々で、各学校の体育設備を見学したが、まさに理想的な設備満点というところで、片田舎の学校でも見事な体育館を持つており、学校貸与の練習衣は毎日洗濯されて、マットはプラスチック製で実に清潔である。耳当て、ひざ当等器具が発達して居て、身体を保護し、減量の時にはスチーム・ルームやスチーム・ボックス等があり発汗には事欠かない。又時計にしても試合中の場外の間は全々計算されない様に出来ている。(永里, 1952, pp. 186-187)

注 28) なお、第 2 回日米交流戦では、以下の通り、オリンピック競技大会で採用されていたルールとは異なるアメリカの競技規則への対応の問題もあった。

日本選手が最も苦勞したのは米国独特のルールであった。AAU (全米体育協会: 筆者注) ルールと大学ルールと二種類り両方とも採点主義であり、フォールをねらう積極性は見られず、バックに廻つたら最後迄絶対に離さない。時間は両方とも九分間であり、三分間^{ママ}づつだが、グラウンド・レスリングは試合中スタンドに変ればそのままス

タンドを続ける。レフリーが一人で採点し、得点は試合中公開され優劣の差が旨らかに示される。フォールは両方とも二秒間なので仲々フォール出来ない。タックルでダウンさせると AAU ルールでは一点、大学ルールは二点である従って日本選手は大学ルールの方が少しは有利であつた。(永里, 1952, p. 187)

オリンピック・ルールなら断然勝っているが、ポイントシステムには閉口する。1ポイント取ると逃げ回るが攻撃点を計算しない。こんなところにアメリカでアマチュア・レスリングが観衆を集められない原因がある。識者はみなこれを認めサインを集めてルールの変更をするといっており、私もサインさせられた。(朝日新聞, 1951年3月17日付, 朝刊)

ただ最も悩まされているのはアメリカ・ルールで、オリンピック・ルールに慣れている私たちは時折反則を取られて苦い●を見ている。アメリカ・ルールでは攻める場合に相手を立たせず、また攻められる方は速やかに立って離れるか後へ回るのを以て大きな得点としているので、今後この点を如何にオリンピック・ルールに適用するかが研究課題だ。(読売新聞, 1951年4月11日付, 夕刊, ●は判読不明箇所)

注 29) 他にも、レスリングの日本チームがニュージャージー州エリザベス市の市長と対面し、「エリザベス市から日本天皇に贈る」という文言が彫られた贈答品を日本チームが預かったこと(読売新聞, 1952年4月15日付, 朝刊)や、現地の中国人コミュニティが開いた歓迎会で川本と鹿熊が柔道を披露する機会があったこと(川本, 1952)等、第2回日米交流戦が国際親善としての役割も担っていたことがわかる。

注 30) 主計とは、旧日本陸軍における組織機構のうち、陸軍経理部に置かれた階級のひとつである(清水, 2017)。清水(2017)は陸軍経理部の職務内容を「軍資運用の研究審議, 予算・決算, 会計の監査・監督, 民間工場の会計監督, 被服・糧秣の整備, 補給の指導監督, 陸軍用地及び諸建築に関する調査研究など」(清水, 2017, p. 1)と整理している。

注 31) 八田による自動車部隊の部隊長への批判は、1965年に刊行した『勝負根性』におい

でも確認できる。八田は、「戦争中一番不愉快な経験だった」（八田，1965b, p. 138）自動車部隊の部隊長との関係について、以下のように述べている。

連隊長は実にぜいたくなもので、自動車隊だからこそできるのだが、移動のときには、風呂桶から寝台から、それに会席膳まで持って歩かせる。ここは戦地じゃないかというのだが、ちゃんと会席の塗りもののお椀じゃないと怒る始末である。隊に定住して本部におるときならまだしも、戦地に出たときにお椀まで持たせて歩くなんていうのは、わたしにとってみれば言語道断だ。わたしは主計だから、しょっちゅう隊長のそばにいななければならない。そのおかげでわたしも苦労した。そいつにおべつかを使って、怒らせないでじょうずにやり、隊長も喜ばせ、兵隊も喜ばせ、というのでいいんだろうが、そんな使い分けができようはずがない。その時分は、まだぜいたくなことができる時代であったけれども、人には「欠乏に耐えろ」だの、「現地食に頼れ」だのと、われわれにしょっちゅう訓辞している。だから、これも現地食だ、という理由とこらしめの意味もあって犬を食わしたのだが、こんなことじゃ、結局日本は負ける、と思ったものだった。（八田，1965b, pp. 137-138）

注 32) 早稲田大学に入学後に八田からの勧誘でレスリング部に入部した野嶋明生氏は、インタビューの中で、八田が遠征中に選手に洗濯をさせなかったことを挙げて、「すごい合理的、八田さんっていうのは。あんな指導者なかなかいないなーと俺は思う。自分で見本を見せられるから、ぐうの音も出ないのよ」（野嶋，2012）と述べている。このように八田は、日常的に選手の負担に配慮する姿勢を見せていたことが推察される。

注 33) 同様の主張は、以下の通り他にも確認できる。

オリンピックの年のお正月は、元旦の早朝から寒中水泳をやった。千葉の鴨川の海岸へ行った。はじめ選手たちは“そんなことはできるもんか”という表情だった。だからわたしは、「できるか、できんか、やってみなければわかるもんか、とにかくやってみる。」とあって、まっ先にフンドシー一つになって飛び込んだ。選手たちも、わたしにつづいてためらわずにみんなはいった。やってみると案外あんなものなんでもな

い。寒中水泳なんてものは、見ているものがびっくりするだけだ。見物人をおどろかすのにあんないいものはない。（八田，1965a，p. 66）

わたしは選手たちの志気を鼓舞するためには、つとめて率先してやることにしている。それがリーダーのつとめであると思うからだ。たとえば、冬の合宿のときに寒中水泳を必ずやることにしているけれども、寒中水泳というと、選手なんかちよつととっぴだと思ふし、自分にはできないと尻込みしている。しかし、わたしらが率先して水に入っていけば、いやといえない。（八田，1965b，pp. 145-146）

やればできるのだ。わたしらは、冬でも水をかぶっているから、どうということはないけれども、世間から見れば変わっているのかすぐ話題になる。だが、なんでも指導者が先にさえやればついてくる。お茶を教えるようなことと違うから、ある程度野性的にやらないとダメだ。（八田，1965b，p. 146）

【引用参考文献一覧】

阿部優蔵・萩原一郎・長谷川創一編（1986）若き血に燃えて：慶應義塾大学レスリング部

五十年史．レスリング三田会．

朝日新聞（1946）5月13日付．朝刊．

朝日新聞（1946）6月19日付．朝刊．

朝日新聞（1946）12月24日付．朝刊．

朝日新聞（1950）6月29日付．朝刊．

朝日新聞（1950）7月15日付．朝刊．

朝日新聞（1950）7月16日付．朝刊．

朝日新聞（1951）2月28日付．朝刊．

朝日新聞（1951）3月1日付．朝刊．

朝日新聞（1951）3月2日付．朝刊．

朝日新聞（1951）3月4日付．朝刊．

朝日新聞（1951）3月5日付．朝刊．

朝日新聞（1951）3月14日付．朝刊．

朝日新聞（1951）3月17日付．朝刊．

朝日新聞（1951）3月22日付．朝刊．

朝日新聞（1951）3月30日付．朝刊．

朝日新聞（1951）7月3日付．朝刊．

朝日新聞（1952）1月30日付．朝刊．

朝日新聞（1952）2月2日付．朝刊．

朝日新聞（1952）2月8日付．朝刊．

朝日新聞（1952）2月15日付．朝刊．

朝日新聞（1952）2月16日付．朝刊．

朝日新聞（1952）2月23日付．朝刊．

朝日新聞（1952）8月3日付．朝刊．

朝日新聞（1956）11月24日付．朝刊．

同志社大学体育会レスリング部（発行年不明）マットにかけた青春：同志社大学体育会レ

スリング部創立65周年・立教定期戦60回記念．同志社大学体育会レスリング部．

藤澤良知（2008）戦中・戦後の食糧・栄養問題．昭和のくらし研究6, 昭和館, 5-17.

- 古川修 (2016) 「文検定体操科」の研究. 世音社.
- 橋本寿朗 (1995) 戦後の日本経済. 岩波書店. pp. 94-101.
- 八田一朗 (1946) 発刊の辞. 引揚者 1 : 1.
- 八田一朗 (1949) 裸の柔道. 柔道 20 (9) : 14-16.
- 八田一朗 (1950) レスリングと柔道. 柔道 21 (4) : 24-25.
- 八田一朗 (1952) 世界レスリング史を塗り変えて. 日本レスリング協会編, レスリング世紀の闘い. 双葉書房.
- 八田一朗 (1953) レスリング. 旺文社.
- 八田一朗 (1957) レスリングと柔道. 柔道 28 (2) : 36-39.
- 八田一朗 (1964) わが道をゆく : 人生を勝ち抜く八田イズム. ベースボール・マガジン社.
- 八田一朗 (1965a) 剃るぞ!. 講談社.
- 八田一朗 (1965b) 勝負根性. 実業之日本社.
- 八田一朗 (1971) 闘魂と根性. 恒文社.
- 八田一朗 (1979) 私の歩んできた道. 立花書房.
- 八田忠朗 (2021年6月28日) 筆者によるインタビュー調査.
- 東日本学生レスリング連盟 80年史編纂委員会編 (2016) 東日本学生レスリング連盟 80年史. 東日本学生レスリング連盟.
- 報知新聞 (1950) 7月2日付. 朝刊.
- 伊集院浩 (1952) 進歩した日本選手. 発行所不明, 『八田コレクション』所収資料.
- 石川真澄 (2004) 戦後政治史 (新版). 岩波書店, pp. 61-153.
- 川本晴紀 (1952) 第二回米国遠征記. 日本レスリング協会編, レスリング世紀の闘い. 双葉書房, pp. 193-209.
- 近代武道研究会編 (1961) 武道のあゆみ 90年. 商工財務研究会, pp. 42-44.
- 木下秀明 (1970) スポーツの近代日本史. 杏林書院.
- 高津勝 (2011) 武徳会ページの審査実態 審査結果の全体像と本部役員のページを中心に. 一橋大学スポーツ研究 (30) : p. 3.
- 明治大学レスリング部 70年史編集委員会編 (2003) 明治大学レスリング部 70年史. 明治大学体育会レスリング部 OB会.
- 永里高平 (1952) 第一回米国遠征. 日本レスリング協会編, レスリング世紀の闘い. 双葉書房, pp. 182-188.

- 永里高平 (2011 年 7 月 19 日) 筆者によるインタビュー調査.
- 日本レスリング協会 80 年史編纂委員会 (2012) 財団法人日本レスリング協会 80 年史. 財団法人日本レスリング協会.
- 日刊スポーツ (1951) 2 月 6 日付. 朝刊.
- 日刊スポーツ (1951) 8 月 3 日付. 朝刊.
- 日刊スポーツ (1951) 8 月 28 日付. 朝刊.
- 日刊スポーツ (1952) 1 月 30 日付. 朝刊.
- 西日本学生レスリング連盟 (online) Home (トップページ): 連盟について: 加盟大学紹介.
https://wjcwl.jp/league/league_m_000221.html, (参照日 2021 年 9 月 12 日).
- 野嶋明生 (2012 年 5 月 4 日) 筆者によるインタビュー調査.
- 歴史学研究会編 (1990) 日本同時代史第 2 巻. 青木書店, pp. 4-122.
- 専修大学体育会レスリング部 OB 会編 (1984) 鳳の詩: 専修大学体育会レスリング部五十年史. 専修大学体育会レスリング部 OB 会.
- 清水亮太郎 (2017) 陸軍経理部と満州事変. 防衛研究所, ブリーフィングメモ. pp. 1-4.
- 塩見俊一 (2010) 戦後初期日本におけるレスリングの展開に関する一考察: 1950 年代初頭の日米レスリングに着目して. 立命館産業社会論集 46 (3), pp. 81-102.
- スポーツニッポン (1951) 2 月 22 日付. 朝刊.
- スポーツニッポン (1951) 7 月 23 日付. 朝刊.
- スポーツニッポン (1951) 8 月 23 日付. 朝刊.
- スポーツニッポン (1952) 2 月 28 日付. 朝刊.
- 竹前栄治 (1996) 第 1 巻 GHQ 日本占領史序説. 天川晃・荒敬・竹前栄治・中村隆英・三和良一編, GHQ 日本占領史. 日本図書センター.
- 拓殖大学レスリング部 OB 会 50 年史編集委員会編 (1990) 拓殖大学麗沢会レスリング部 50 年史. 拓殖大学麗沢会体育局レスリング部.
- 早稲田大学レスリング部 70 年史編集委員会編 (2001) 早稲田大学レスリング部 70 年史. 稲門レスリング倶楽部.
- 山本礼子 (2003) 米国対日占領政策と武道教育: 大日本武徳会の興亡. 日本図書センター, p. 73.
- 柳澤健 (2012) 日本レスリングの物語. 岩波書店. p. 30.
- 読売新聞 (1951) 4 月 11 日付. 夕刊.

読売新聞（1951）11月12日付．朝刊．

読売新聞（1952）1月25日付．朝刊．

読売新聞（1952）3月3日付．朝刊．

読売新聞（1952）4月15日付．朝刊．

夕刊中国（1950）7月27日付．夕刊．

第3章：確立期におけるレスリングの受容過程

本章では、1960年代におけるレスリングの受容過程を八田の視点から明らかにする。具体的には、確立期の社会状況やスポーツ及びレスリングの状況を整理したうえで、八田の理念とその理念を実現するための実践について検討する。

第1節：高度経済成長と東京オリンピック体制におけるレスリング

第1項：東京オリンピック体制の成立

1960年代の日本は、高度経済成長期と言われる通り、戦後復興を経て経済大国として世界に君臨し、国民の生活も改善されていった時期である。このような日本の高度経済成長を象徴するのが1964(昭和39)年に東京で開催された第18回夏季オリンピック競技大会(以下、東京大会)である。東京大会の開催の経緯は次の通りである。1959(昭和34)年5月26日、西ドイツのミュンヘンで行われた第56次IOC総会において、デトロイト(アメリカ)、ウィーン(オーストラリア)、ブリュッセル(ベルギー)との最終投票の結果、東京が過半数を超える34票を獲得して、第18回夏季オリンピック競技大会が東京で開催することが決定した。第二次世界大戦によって第12回夏季オリンピック競技大会の開催を返上していた東京にとっては雪辱をはらす形となった。そのため、東京オリンピックの開催が決定すると、日本国内ではオリンピック代表選手の競技力向上を目的とした組織的な強化体制が作られていった。

まず、1960(昭和35)年に東京オリンピック選手強化対策本部(以下、選手強化本部)が体協の日本オリンピック委員会の中に組織された。選手強化本部は、日本オリンピック委員会の一部に位置付けられたが、実質的には体協の各決定機関を超えた権限を有していた(関, 1997)。そして、選手強化に向けて中央競技団体のみならず各地方の関係諸団体との連携を図るために、体協から各県体協、各県の知事および教育委員会あてに東京大会への協力依頼文が発送された。また、各競技団体も全国的な協力体制に向けた動きを見せはじめ、1961(昭和36)年には、全国都道府県体育主管部課長と各種競技団体の代表が懇談会を開催したことをきっかけに「東京オリンピック選手強化全国協議会」が結成された(関, 1997)。選手強化に向けた全国的な協力体制は、トップアスリートのための用具や施設といった環境整備のみならず、強化の対象となる選手の発見や育成を円滑に行うことを可能とし、中学生、高校生の全国大会の開催に制限を設けていたいわゆる対外競技基準の改正へと結びついた。特に1961(昭和36)年の対外競技基準の改正は、中学生の参加する全国大会の開催を可能とした。このことは、1964(昭和39)年の東京大会に向けて中学生も含めた選手強化を行うことを意味していた(関, 1997)。このように東京大会へ向けて、体育・スポーツ関係団体以外にも巻き込んだ組織体制の確立がなされていく中で、行政面での整備も進められていく。特に、1961(昭和36)年に成立したスポーツ振興法は、国民のスポーツ振興を図るという目的のもとに、スポーツ団体への補助金助成を正当化することになり、結果「オ

リンピック至上主義」を掲げる体協への恒常的な国庫補助の法制化が実現した(関, 1997). このようなスポーツ振興法が成立した後, 1962(昭和37)年に文部省ではオリンピックムードの高まりと軌を一にして, 運動競技課の名称をスポーツ課へと改称し, 1963(昭和38)年には文部省体育局にオリンピック課が設置された(内海, 1993). これらの部局内の組織では, 国民のスポーツ振興に必要となる施設の現状把握やその広報が担われていたものの, 1964(昭和39)年のスポーツ振興に関する諮問への答申がなされないままうやむやとなっており, 同時期の行政組織においてもオリンピックへの対応が中心となっていた(内海, 1993). いずれにせよ, 東京大会に向けて, 行政面において関連法案や組織の整備が進められており, 東京大会が「拳国的な」体制で進められた(関, 1997, p. 145). つまり, 1964(昭和39)年の東京大会に向けた組織・制度整備は, 「東京オリンピック体制」(関, 1997, p. 141)と呼ばれるほど大規模かつ強力なものであった.

第2項: 「根性づくり」とレスリングの活躍

前述の通り1960年代の日本は, 高度経済成長を背景に東京オリンピック体制が成立した. そして, このような東京オリンピック体制の元で, 選手強化本部は選手強化の方針として掲げられたのが「根性づくり」(スポーツ科学研究委員会編, 1965, p. 22)である. 「根性づくり」とは, 選手強化本部のスポーツ科学研究委員会心理部会(以下, 心理部会)において, 「高い目標意識をもち, その目標達成のために精神を集中しそれを持続する強烈な勝利への意志」(日本体育協会・東京オリンピック選手強化対策本部, 1962a, p. 2)を形成すること, と定義された. そして心理部会では, それまで行われてきた競技者の「あがり」のメカニズムの解明や指導者の合理的な指導に資する競技者の性格を科学的に把握するための方法の開発に向けた研究を「根性」と関連づけながら, 競技者の精神面を強化するための「根性」についての研究が行われるようになった. そしてこの課題は, 競技者のみの課題にとどまらず, 指導者のあり方や指導方法にも関連することとして捉えられるようになり, 競技力を最大限に引き出すために必要な競技者や指導者の基本的な心構えや態度に関わるものとして「根性」の養成が究明されるようになった. 心理部会の一員であった太田(1968)は, 1964(昭和39)年の東京大会に備えた選手強化の過程において, 「根性養成法のテキストの作成」についての要請があったとし, その経緯を述べている. 太田によれば, 選手強化本部の部長を務めた大島鎌吉から心理部会へ上述のテキスト作成の要請があり, 心理部会の委員たちによって資料が作成されたという(太田, 1968, p. 44). 大島兼吉が選手強化に根

性を持ち込んだ理由については、新聞紙上において以下のように述べられている。

試合で選手の能力をフルに発揮させるのは結局のところは、強い意志の力による。精神力だ。そのことは経験的にはわかっていたが、それをどうやって、選手たちに理解させるかが問題だった。それには、感情にうったえるのが早道だ。根性という言葉がぴったりだと思った（読売新聞、1965年3月3日付、朝刊）

こうして、選手強化本部のオリンピック代表選手の強化対策は、「根性づくり」に向けて組織的に行うための基盤が整えられていった。

このような「根性づくり」という強化方針は、各競技の指導者にも受け入れられていた。例えば、1962（昭和37）年当時、水泳連盟の会長を務めていた高石勝男は、「根性とは自信だと思う」（日本体育協会・東京オリンピック強化対策本部、1962a, p. 7）と述べ、自信がつくと試合を怖がらなくなり勝利に近づくことから選手に自信を養成させるべきであると述べている（日本体育協会・東京オリンピック強化対策本部、1962a）。また、陸上競技の強化コーチを務めた田島直人は「根性とか精神力というのは、実力と裏腹なもんなんだと思う」（日本体育協会・東京オリンピック強化対策本部、1962b, p. 29）と述べている。さらに、この当時のスポーツ指導において「根性づくり」に取り組んだバレーボールの日本代表監督の大松博文（以下、大松）も、「ハードトレーニングによって、根性が、つまり“事を行なうに久しく耐え忍ぶ精神の力をもった性質”が生まれてくる」（大松、1963, p. 104）と述べている。このような大松の主張は精神力による目標達成を意味しており、大松はそれによって副次的に人間形成や幸福がもたらされると考えていた（山岸、1979）。そして、大松の指導する日紡貝塚女子バレーボールチームが世界選手権で優勝し、東京大会でも国民の期待に応える形で金メダルを獲得したことが、「根性づくり」の考え方が人々に広く知られる重要な契機となり、大会後の「根性」の流行につながっていくことになった^{注34}（岡部ほか、2012）。



図 30 : 大松博文直筆の「根性」

レスリングにおいてもこのような「根性づくり」を重視した強化策は、後述するが、東京大会における日本人選手の活躍に結びつくことになるが、その背景には 1960 年代前半の世界大会における停滞があった。1960 (昭和 35) 年にローマ (イタリア) で開催された第 17 回夏季オリンピック競技大会 (以下、ローマ大会) では、フリースタイル 52kg 級に出場した松原正之が銀メダルを獲得したのみであり「惨敗」(日本レスリング協会 80 年史編纂委員会, 2012, p.92) を喫した。さらに、1961 (昭和 36) 年に慶應義塾大学 (日吉記念館) で開催された世界選手権大会では、フリースタイル 73kg 級に出場した兼子隆が銅メダルを獲得したのみであった。このような世界大会で日本人選手が勝てない状況を打破したのが、1962 (昭和 37) 年にトレド (アメリカ) で開催された世界選手権で、フリースタイル 63kg 級に出場した渡辺長武と、グレコローマンスタイル 57kg 級に出場した市口政光である。1962 (昭和 37) 年の世界選手権における渡辺長武の優勝は「日本の希望」の結果として報じられ、市口政光の優勝は「望み薄」という男子グレコローマンスタイル日本代表選手の新聞紙上における評価を覆す結果となった (朝日新聞, 1962 年 6 月 24 日付, 夕刊: 朝日新聞, 1962 年 6 月 27 日付, 朝刊: 朝日新聞, 1962 年 6 月 28 日付, 夕刊)。さらに同年 8 月にジャカルタ (インドネシア) で開催されたアジア大会では、世界選手権の結果を受けて「アジア大会では向かうところ敵なしと考えても当然」(読売新聞, 1962 年 8 月 3 日付, 朝刊) という前評判もある中でフリースタイルでは 8 階級中 5 階級で、グレコローマンスタイルにおいても 8 階級中 5 階級で優勝者を輩出し、両スタイル計 16 階級中 10 階級で金メダルを獲得した。1963 (昭和 38) 年には、ソフィア (ブルガリア) で開催された世界選手権では、渡辺長武がフリースタイル 63kg 級で連覇を達成し、フリースタイル 70kg 級に

出場した堀内岩雄が金メダルを獲得した。このような 1960 年代初期の日本人選手の活躍のいわば集大成が 1964（昭和 39）年の東京大会である。東京大会における日本人選手の結果は表 41 の通りである。

表 41：東京大会における種目別の日本選手のメダルの獲得

種目名	金	銀	銅
体操	5	4	1
レスリング	5	0	1
柔道	3	1	0
バレーボール	1	0	1
ウェイトリフティング	1	0	1
ボクシング	1	0	0
陸上競技	0	0	1
水泳	0	0	1
射撃	0	0	1

日本オリンピック委員会（online）を元に筆者が作成

このように、東京大会において日本は、金メダル 16 個、銀メダル 5 個、銅メダル 7 個の計 28 個のメダルを獲得した。前回大会にあたる 1960 年のローマ大会で日本人選手は金メダル 4 個、銀メダル 7 個、銅メダル 7 個の計 18 個であったことと比較すると、東京大会の結果が大幅な向上であったことがわかる。そして、表 37 の通り、このような日本人選手の活躍の中で、レスリングは体操に次ぐ二番目に多くメダルを獲得した。



図 31：東京大会における金メダリストと八田のサイン入り記念プレート

1960年のローマ大会ではレスリングは銀メダル1個の獲得という結果であったことを踏まえると、他競技と同様に飛躍的にメダルの獲得数が向上したことがわかる。レスリングの競技会場となった駒沢体育館は、以下のような状況であった。

この日のレスリング会場はさながら“日本デー”だった。案外平静をよそおってきた外国からの特派員席も興奮にまきこまれ、アイモをかついでリングサイドに飛出したり、テープレコーダーに戦況を吹込んだり、記者席はがぜん活気づいていた。（朝日新聞、1964年10月14日付、朝刊）

また、レスリングの競技全体が終了した後は、「見事、養った根性」（朝日新聞、1964年10月15日付、朝刊）という見出しとともに前回大会からの躍進を評価する記事も見られた。このように、1964年の東京大会におけるレスリングの成績は総じて肯定的に報じられた。この他、オリンピック競技大会において同一種目で金メダルを5つ獲得したことは、1932年のロサンゼルスで開催された第10回夏季オリンピック競技大会における水泳競技種目以来の快挙として当時の新聞紙上においてレスリングは特筆して報じられた（朝日新聞、1964年10月20日付、朝刊）。そして、日本人選手の活躍は東京大会後も止まらず（表38）、1960年代に日本は「世界に名だたるレスリング王国」（日本レスリング協会80年史編纂委員会、2012、p. 102）となった。

表 42 : 東京大会後の 1960 年代の世界大会での日本人選手の戦績

年	大会 (開催都市)	戦績 (3 位以内のみ)	
		フリー	グレコローマン
1965 年	世界選手権 (マンチェスター)	吉田嘉久 (52kg) 優勝 福田富昭 (57kg) 優勝	
1966 年	世界選手権 (トレド)	勝村靖夫 (52kg) 2 位 金子正明 (63kg) 優勝 堀内岩雄 (70kg) 2 位	桜間幸次 (57kg) 2 位
1967 年	世界選手権 (ニューデリー)	中田茂男 (52kg) 優勝 金子正明 (63kg) 優勝 佐々木龍雄 (78kg) 3 位	花原勉 (57kg) 3 位 藤本英男 (63kg) 3 位
1968 年	オリンピック (メキシコ)	中田茂男 (52kg) 優勝 上武洋次郎 (57kg) 優勝 金子正明 (63kg) 優勝	藤本英男 (63kg) 2 位 宗村宗二 (70kg) 優勝
1969 年	世界選手権 (マルデルプラタ)	梅田明彦 (48kg) 3 位 田中忠道 (57kg) 優勝 森田武雄 (62kg) 優勝 山縣盛治 (74kg) 3 位	

日本レスリング協会 (online) を元に筆者が作成

第2節：「根性」批判と「正しい根性」という理念

このような、東京大会において好成績を残したレスリングの日本代表の総監督を務めたのが八田であった。そして、八田は「選手の根性の養成ということは、レスリング界では、日本のレスリング創設以来唱えられてきたことであ」(八田, 1964, p. 132)り、「わたしがこれまでに述べてきた、選手鍛錬の方法は、みな根性をたたきあげる要素となっている」(八田, 1964, p. 132)と述べる通り、「根性」の流行を背景に、これまでの自らのレスリングの取り組みと「根性」との結びつきを見出す中で、「根性づくり」を重視した代表的な人物の一人でもあった。



図 32：八田一朗直筆の「根性」①^{注 35)}



図 33：八田一朗直筆の「根性」②

しかし八田は、東京大会に向けて他の種目で行われていた「根性づくり」や東京大会後にも流行した「根性」に対しては、「私たちが唱えた“根性”とは正反対のもの」(八田, 1964, p. 139)であり、「世間では、しかも、スポーツ界でも、間違っただけの意味での根性が横行している」(八田, 1964, p. 134)と理解していた。そして八田は、このような「間違っただけの意味での根性」を「竹やり根性」(八田, 1964, p. 134)と「負け犬根性」(八田, 1964, p. 134)

という言葉で批判している。そこで以下では、「竹やり根性」と「負け犬根性」の意味の分析を通して、八田の「正しい根性」の内実を明らかにする。

第1項：「竹やり根性」批判

東京大会を回顧する中で八田は、「正しい技術の練磨とその実力の苦しい鍛錬を忘れて、精神力だけに、万一の優勝を期待していたようなところが、日本のスポーツ界にはなかっただろうか」（八田，1964，p. 135）と、「根性づくり」を理念とする日本のスポーツ強化政策を批判的に問う。ここでいう「精神力」に頼った日本のスポーツ界の姿勢に対する批判こそ、八田の1つ目の「根性」批判である「竹やり根性」批判であった。八田は、前述したような自らの戦争経験を回顧し「竹やり根性」について、次のように述べている。

一つは“竹やり根性”である。戦争中にやかましくいわれたやつだ。日本人全部の一億総決起とかいって、老人に竹やりを振らせ、妊産婦にまでバケツ・リレーをさせたりした、あれである。…（中略）…それでは、外国の力には勝てない。いくら竹やりをふり回しても、たこ壺を掘り回っても、大東亜戦争には勝てなかったのだ。（八田，1964，pp. 134-135）

八田は上述のように自らの戦争体験を回想し、一般人に対して「竹やりを振らせ」、「バケツ・リレー」を強要し、「たこ壺」を掘らせるような「大東亜戦争」における日本軍の体制を批判したのである。さらに八田は、次のようにも述べている。

戦争中、日本がアメリカの B29 に対し、竹やりで勝てなかったあれだ。竹やりはバカバカしい、などといいながら、現在でも世間には竹やりの非合理的なものがいかに多いことか。そういうヤツは困るのだ。（八田，1965a，p. 107）

つまり、八田は戦時中に爆撃機 B29 に対し竹やりで応戦しようとした日本軍の戦術を「非合理的なもの」として捉え、批判していることがわかる。さらに、八田は、このような「大東亜戦争」における日本軍に対する批判と、自らが行った柔道およびレスリングの経験を関連づけながら、以下のように指摘している。

何度も、投げられ、抑え込まれながら新しい技術を工夫しなければならない。激しい練習の中に、勝つ工夫を見出さなければならない。それは、無理をしてやるわけではないのだ。合理的に考えて解決していくのである。レスリングの場合でも、柔道の場合でも、ただ猪突的に、力まかせにやるのではなく、科学的な力の配合を工夫して勝つのである。無理をしたら、効果がないし、それを精神力だけがむしゃらにやれば、けがをして一生レスリングのできない身体になるくらいが落ちである。無理をするのは、“竹やり根性”恰好ばかりは、掛声ばかりは、まことに強そうだが。（八田，1964，pp. 138-139：強調は筆者による）

このように、八田は、「掛声ばかり」で「恰好ばかり」は「まことに強そうだが」、ただ「精神力だけがむしゃらに」、かつ「猪突的に、力まかせ」で「無理をする」ことを「竹やり根性」と表現し、その「合理的」でない点を批判したのである。

ここから、「竹やり根性」批判とは、八田が自らの戦争体験とそれまでの日本のスポーツ強化政策や自らの柔道およびレスリングの経験に関連づけながら、勝利するために必要な技術や体力を身につけず、また対戦相手を分析し戦術戦略をたてずに、「精神力」だけで戦おうとする姿勢や態度を「合理的」ではないと捉え批判したものと考えられる。

第2項：「負け犬根性」批判

さらに八田は、東京オリンピックに出場したレスリングの重量級の選手や陸上競技および水泳の指導者が「負け犬根性」があったことを批判している。

まず八田は、レスリング競技フリースタイル 97kg 級代表として出場し 3 回戦で敗退した選手に対して「模範的な自衛隊員」（八田，1964，p. 113）のようである、と揶揄した。それは、当該選手が力が違いすぎてといいわけをし、また、対戦相手と比べどうも力が違うからと、頭からきめてかかっている、まったく攻撃をしなかったからである（八田，1964，pp. 113-135）。このように八田は、選手による『『どうせやっても俺は負けるからダメだ』という弱虫の考え方』（八田，1965a，p. 25）を「負け犬根性」と批判したのである。

このような「負け犬根性」は、八田によればレスリングだけでなく東京大会に向けた陸上競技および水泳の指導者も有するものであった。八田には、陸上競技や水泳の指導者が「選手のコンディションというものを非常に大事に」（八田，1965b，p. 44）する一方で「まるでトレーニングをやらない」（八田，1964，p. 172）様子を「はれものにさわりたい」（八

田, 1965b, p. 48) と表現して, 以下のように批判している.

技術を磨いて, 真の実力をつくりだすことをせずに, ちょっと早い者, 力のある者の万一の勝利を期待する. 最初から負けることを予想しながら, 万-を頼んでいたずらに精神力をたたき込もうとする. たまたまのフロックで出した記録をもって, その選手を英雄視して, 日の丸を期待する. これも“負け犬根性”である. 日本の, 陸上や水泳にこれがないだろうか. (八田, 1964, pp. 135-136)

つまり八田は, 陸上競技および水泳競技の指導者たちが勝利するために必要な「真の実力」を選手たちに養成せず, 「万-」の勝利を期待し「いたずらに精神力をたたき込もうと」している点を批判したのである. ここから, 八田の二つ目の「根性」批判である「負け犬根性」批判とは, 八田が東京大会で敗北を喫したレスリング競技の「重い方の連中」や陸上競技および水泳競技の指導者による指導に対して, 「真の実力」を養成せずに「万-を頼んでいたずらに精神力をたたき込もう」と「ただヤミ雲にやっておった」ことを批判したものといえるだろう.

第3項: 「正しい根性」の意味

ここまで, 八田による「間違った意味での根性」として, 「竹やり根性」批判と「負け犬根性」批判の要点を明らかにしてきた. まず, 「竹やり根性」批判とは, 選手が勝利するために必要な技術や体力を身につけず, また対戦相手を分析し戦術戦略をたてることもなく, 「精神力」だけで戦おうとする姿勢や態度を「合理的」でないと批判したものであることが明らかになった. 次に, 「負け犬根性」批判とは, 東京大会で敗北を喫したレスリング競技の重量級の選手や陸上競技および水泳競技の指導者たちが「真の実力」を養成しなかったことへ批判したものであることが明らかになった. これらのことから, 八田による当時流行した「根性」に対する批判とは, 勝利を目指すことを前提としていたはずの選手や指導者たちが, 「真の実力」をつけて確実な勝利を目指さずに, 「精神」面ばかりを強調して「万-」の勝利を目指していることが「合理的」でない点に対する批判であることが明らかになった. ここから, 八田の考える正しい「根性」を有していることとは, 「真の実力」を付けて確実な勝利を得られる状態を示していることがわかるだろう. では, 八田が考えた確実な勝利を得るために必要な「真の実力」とは何であろうか. 八田は確実に「勝つための条件」(八田,

1965b, p. 9) を説明する文脈において「勝負強さ」(八田, 1965b, p. 44) を挙げ, その重要性を, 次のように指摘している.

最悪の条件におかれたときでも, それまで養いつちかかってきた実力を発揮できる肉体の力と精神力, これが大事なのだ (八田, 1965b, p. 48: 強調は筆者による)

ここから「真の実力」とは, 「肉体の力と精神力」の両方を有することと考えられる. さらに, 前述の通り, 八田が 1960 年代の「根性」批判の中で, 「精神力」だけで戦おうとする姿勢や態度に対し「合理的」でないと批判をしていることを踏まえると, 八田は「肉体の力と精神力」の両方を鍛えることを「合理的」とであると評価していたことがわかる. これらのことから, 八田が考えた正しい意味での「根性」とは, 「肉体の力と精神力」を有している状態であると推察される.

第3節：「正しい根性」に基づく「ハード・トレーニング」

本節では、前章で明らかになった八田の「正しい根性」の意味をより実証的に明らかにするために、八田が「根性」を醸成するために展開した「ハード・トレーニング」に着目し、個々の「ハード・トレーニング」において八田が「肉体の力と精神力」の両面の育成を意図していたことを検証する。「ハード・トレーニング」に着目する理由は、八田が自らの指導について「真の実力を養うためにいろいろ考えを出して、それに適合した最上と思われる方法を実行してきた」（八田，1965b，p. 48）と述べているからである。そこで以下では、八田が選手たちに課した個々の「ハード・トレーニング」や指導の意図を「肉体の力と精神力」という観点から分析を行う。

第1項：「ライオンとにらめっこ」

八田は、1960年のローマオリンピックの開催を目前に、実施した強化合宿でまず、「選手七、八十人を朝四時ごろたたき起こして上野動物園まで走らせた。そして、ライオンのオリの前に立たせた」（八田，1965a，p. 80）上で、ライオンを「にらませた」（読売新聞，1960年7月27日付，夕刊）。



読売新聞（1960年7月27日付，夕刊）

図34：ライオンとにらめっこの様子

八田はこのトレーニングを課した理由について、ライオンの有する敵対する相手との危険の限界地点である「危険距離」（八田，1965b，p. 36）を習得することでレスリングの試合中に「危険だと悟った時には直ちに対応できるだけの姿勢と心構えを維持しながら休む」（八田，1965a，p. 81）ことができるようになるという。すなわち、「ライオンとにらめっ

こ」とは、試合中に休みながらも「直ちに対応できる姿勢」を身に付けるという「肉体」的メリットと、休みながらも「直ちに対応できる心構え」を身に付けるという「精神」的メリットの両方が得られると考えて行われたトレーニングであった。

第2項：「逆インターバル・トレーニング」

八田は、日常的に選手たちに対しランニングすることを指示していたが、そこでは「スピードを自由に変えるやり方」（八田，1965a，p. 122）で選手を走らせるインターバル・トレーニングを重視していた。具体的には、選手たちを「フルスピードで、ハーフスピードで走らせ、調子を崩し息をあげさせ」（八田，1965a，p. 122）るというものである。そもそも現在では、インターバル・トレーニングは、高負荷と低負荷を交互に繰り返すことでスピードを持続する能力を向上する練習法であると認識されているが（山地，2015，p. 312），このトレーニングは1960年代にわが国のスポーツ界で流行したものである。そして八田は、「インターバルという言葉はあとで聞いたが，そういったトレーニングは前からやっている」（八田，1964，pp. 142-143）と述べ，自らがインターバル・トレーニングの元祖であることを主張している。ただし，八田は自らの指導方法を「逆インターバルトレーニング」（八田，1964，p. 142）と表現していることには注意が必要である。この点について八田は，次のように述べている。

（1956年の第16回夏季オリンピック競技大会で優勝した：筆者加筆）笹原の場合，わたしは，息をあげさせようとしてやったのだった。自分の調子で練習しておっただけでは，何分練習していてもだめだから，十分，呼吸困難にしてやろうと思ってやったことが，たまたま，インターバル・トレーニングという練習法がそうだったというわけである。フル・スピード，ハーフ・スピード。陸上でこのごろいっているインターバルは，フル・スピードで走っておって休むという方法。わたしのほうは，そうじゃなくて，息をあげさせて，選手の呼吸の調整を壊してやろうと思って考えたことだったのである。ところが，目的が違ったけれども，結局，インターバルだったというわけである。（八田，1964，p. 145）

上記のように八田は，他の指導者たちが「スピードを持続する能力を向上」するという目的を達成させず，ただスピードを変えながら走らせることを目的に行っているインターバ

ル・トレーニングを批判的に捉え、「スピードを持続する能力を向上」させることを目的に、選手の息があがるまでスピードを変えながら走らせる自らの方法を「逆インターバル・トレーニング」と表現していることが推察される。そして何よりも、八田は、このトレーニングを課した理由について、選手たちが「よりいっそうのスタミナをつける」（八田，1965a，p. 122）ことができるだけでなく、「試合にのぞんでものおじしない気持ち，つまり，耐久力をつける」（八田，1965a，p. 121）ことができると考えていた。すなわち、「逆インターバル・トレーニング」は、「スタミナ」という「肉体」的メリットと耐久力という「精神」的メリットの両方が得られると考えて行われたトレーニングであった。

第3項：「目かくし」の練習

八田は、選手たちに自らの両眼を布で覆わせ「目かくし」をした状態でレスリングをさせた（八田，1965a，p. 125）。このような「目かくし」をした練習を八田が思いついた契機には、アメリカ遠征で出会った盲目のレスリング選手の能力の高さについての以下のエピソードがある。

かつてアメリカに盲目のレスラーがいた。わたしがアメリカに遠征したときに何度かこのめくらの選手の試合を見た。そのめくらの選手が、盲導犬に連れてきてもらって練習に励み、また盲導犬に連れられて帰って行くのには感心したものだ。わたしは、彼がめくらながらどうしてマットの広さがわかるのか、不思議に思ったので「どうしてマットの広さが頭に入っているのか、外へ投げたりとび出したりしないのか」と聞いてみた。すると、開始直前相手と握手するために、マットの真中に歩いていくそのときに、歩数を勘定するという。マットは小さいときと大きいときで一メートルくらいの差があるが、握手のときに自分がどこにいるか、ということが頭に入るので、取っ組み合いになっても絶対外へ出て頭を打つことがないのだ。外に出てけがをするのは、むしろ目あきのほうだ。・・・(中略)・・・めくらの選手が試合を始めるときには、観客もレフェリーも静かにしている。相手の攻撃の足の音で、相手が攻めてくるのがめくらにわかるように、みんなが気を使うわけだ。レフェリーが歩くと相手の足の音とごっちゃになるので、レフェリーもじっとしている。ひとたび取っ組みすと、レフェリーも動くし、観客も声援する。見ているほうもハラハラするような雰囲気である。「どうだ、めくらでも、あれだけのことができるではないか」そういつて、わたしはオリンピック選手たちの合

宿のときに、目隠しで練習をさせた。(八田, 1965b, pp. 15-16)



報知新聞 (1964年8月13日付, 朝刊)

図 35 : 目かくしの練習の様子

八田は、このトレーニングを課した理由について、「相手の動きを早く感じとり反射的に動くかんができる」(八田, 1965b, pp. 16-17) からであると述べる。さらに八田は、このような「かん」は、実際に試合中に相手の指や汗が自らの眼の中に入って視界が閉ざされる場合にも有効であるとも述べている(八田, 1965a, p. 125)。すなわち、「目かくしの練習」によって、相手の動きを感じとり反射的に対応することができるようになるという「肉体的メリット」と、試合中に視界が閉ざされたとしても冷静に競技できるという「精神的」メリットを得られると考えて行われたトレーニングであった。

第4項：「左右平均論」

八田は、練習中に選手たちに対して、「左右平均にわざの修得、左右平均にやれということをやかましく」(八田, 1964, p. 133) 指示していた。八田がこのような「左右平均論」を思いついた背景には、野球観戦やピアニストの動作の観察を通じた、次のような発見があった。

考えてみると、人間は大体右ききであるが、なかには左ききもある。しかし、いずれも片方専門で、片手片足しか自由に使えないということは、まことに不自由なことである。両方同じように使えたら、どんなに便利であろうか(八田, 1965b, p. 23)

このように八田は、左右両方使えることで自由に身体を使えるようになり、「右と左が同じようにできるようになれば、一たす一が二でなくて、四とか五くらいの実力ができるというのだ」（八田，1964，p. 133）と、倍以上の実力を得ることにつながると考えていた。このような八田の「左右平均論」は、攻撃面において発揮される力が倍以上になるだけでなく、どこから攻められても対応ができるという意味で相手に対する苦手意識が消えるとも述べている（八田，1965a，p. 157）。すなわち、「左右平均論」によって、攻撃力を向上させるという「肉体」的メリットに加え、防御の場面において自らの苦手意識を消滅させるという「精神」的メリットが得られると考えて行われた指導であった。

第5項：スピードの重視

八田は、選手に対して「スピードということを非常にやかましく」（八田，1964，p. 182）言い、練習相手に対してより速いスピードで攻撃を仕掛けるように指示をした。八田は、スピードを重視した理由について、「スピードが倍あればその力は倍となる」（八田，1964，p. 181）、「スピードが速いほど衝突したときの力は恐ろしい」（八田，1964，p. 181）と述べている。このように八田がスピードを重視したことは、レスリングの階級制というルールと関係がある。八田は、レスリングでは階級制によって「目方」（体重）が規定されているので、より大きな「力」を発揮するためには「スピード」を向上させる必要があること、また仮に無差別級に出場する選手で「目方」（体重）が少なかったとしても、「スピード」をあげることでより大きな攻撃力を発揮できると考えた。このような考えは、以下の物理法則に関する八田の理解に基づいていた。

m を目方、 v をスピードとすれば、 $\frac{1}{2}mv^2$ で力の強さと表わすことができる。たとえば、五貫目のものが十メートルの速さでぶつかるのであれば、五貫目に十の自乗だから、五百貫。その二分の一だから、二百五十貫の力である。十貫目のものが五メートルのスピードでぶつかるのであれば百二十五貫の力だ。目方が半分でもスピードが倍あればその力は倍となる。

$$\begin{aligned}\frac{1}{2}(5 \times 10^2) &= \frac{1}{2}(5 \times 100) = 500 \times \frac{1}{2} = 250 \\ \frac{1}{2}(10 \times 5^2) &= \frac{1}{2}(10 \times 25) = 250 \times \frac{1}{2} = 125\end{aligned}$$

（八田，1964，p. 181）

さらに、速いスピードが相手に与える恐ろしさについては、銃や原子爆弾を例に挙げて、以下のように述べている。

ピストルの弾丸は実に小さなものであるが、それがなぜ恐ろしいかという、あれは非常なスピードがあるからだ。だから鉄板でもなんでも抜くことができる。だから、いま科学的な練習という面から考えると、スピードということをやかましくいうことになる。原子力だって、ビカドンとくるから恐ろしいので、あれがピカと破裂してから、トンとこずに、十日ぐらいたって、キノコ雲の大きさに徐々に広がったのなら、あのようなエネルギーは出ないことと思う。ちっとも恐くないだろう。ところが、スピードがあるからあれだけの恐ろしい力を発揮するのだと思う。わたしは、科学のことは、なにも知らないが、そう考えている。(八田, 1964, p. 181-182)

すなわち、スピードを重視することは、力が倍以上となるという「肉体」的メリットと、相手に恐怖心を与えることで優位にたつという「精神」的メリットの両方が得られると考えた行われた指導であった。

第6項：「反復練習」

八田は、選手に対して「どんなスポーツでも反復練習は、基本的トレーニングとして必要なもの」(八田, 1964, p. 142)であると述べ、練習中に同じ動作を繰り返し行うように指示した。八田がこのような「反復練習」を課した理由は、無意識に技を仕掛けられるようになること(八田, 1964, p. 140)と、「やればできるのだという気持が、自然にできて、どこかに裏づけられ」(八田, 1964, p. 140)ていくことがある。つまり、「反復練習」とは、選手が技術を内面化することができるという「肉体」的メリットと、「やればできるのだ」という自信を養成する「精神」的メリットの両方が得られると考えて行われたトレーニングであった。

第7項：「寒中水泳」

八田は、選手に対して「毎年、冬に合宿をすること」(八田, 1964, p. 117)を課しており、その期間に選手を「二分間ぐらい海に入らせ、水のかげっこをやらせ、あるいは水中騎馬戦というか、落としっこを水中でやらせた」(八田, 1964, p. 119)。



(八田, 1964, p. 118)

図 36 : 「寒中水泳」の様子

八田がこのような「寒中水泳」を課した理由は、「風邪をひかない」(八田, 1964, p. 119)というだけでなく、「オレでもあんなことがやればできるという自信を植えつけること」(八田, 1965a, pp. 66-67)にもなるという考えがあった。実際に、このような「寒中水泳」を課された選手は、「はじめて連れてこられ、いきなり『海に入れ』といわれて、びっくり」(八田, 1964, p. 119)して、「“そんなことはできるもんか”という表情」(八田, 1965a, p. 66)で「自分にはできないと尻込み」(八田, 1965b, p.146)することが多かった。しかし八田は、「寒中水泳」のように、「ふだんできないことや無理なこと、世間の常識からみればバカバカしいと思うこと」(八田, 1965a, p. 67)をやることで、「人のやらないことを、やれないことを、思いきってずばりとやるということは、レスリングの試合にとってたいせつなこと」(八田, 1964, p.119)であると考えていた。つまり、「寒中水泳」とは、「風邪をひかない」ようになるという「肉体」的メリットと、「やればできるという自信」を養成するという「精神」的メリットの両面を得られると考えて行われたトレーニングであった。

第 8 項 : 「ハード・トレーニング」と「正しい根性」の関係

本節では、レスリング指導者としての八田が「真の実力」を養成するために課した「ハード・トレーニング」や指導の意図を「肉体の力と精神力」という観点から分析を行った。その結果、表 43 の通り、八田が課した「ハード・トレーニング」が「肉体」的メリットと「精神」的メリットの両面に効果的であると考えられていたことが明らかになった。

表 43 : 「ハード・トレーニング」における「肉体」的メリットと「精神」的メリット

「トレーニング」の名称と内容	「肉体」的メリット	「精神」的メリット
<p>●ライオンとにらめっこ</p> <p>ライオンの檻の前に立たせて睨ませる</p>	<p>試合中に休みながら相手の攻撃に対応できる姿勢を身に付けることができる</p>	<p>試合中に休みながら相手の攻撃に対応できる心構えを身に付けることができる</p>
<p>●「逆インターバル・トレーニング」</p> <p>スピードを自由に変えて走らせる</p>	<p>スタミナをつけることができる</p>	<p>耐久力をつけることができる</p>
<p>●目かくしの練習</p> <p>目かくしの状態でレスリングをさせる</p>	<p>相手の動きを感じとり対応するかんを身に付けることができる</p>	<p>視界が閉ざされても困らないようになる</p>
<p>●左右平均論</p> <p>左右で偏らないように技術を習得させる</p>	<p>選手たちの攻撃力を向上させることができる</p>	<p>苦手意識をなくすことができる</p>
<p>●スピードの重視</p> <p>より速いスピードで攻撃をさせる</p>	<p>風邪をひかないようになる</p>	<p>対戦相手に恐怖心を与えることができる</p>
<p>●反復練習</p> <p>同じ動作を繰り返し行わせる</p>	<p>無意識に技を仕掛けられるようになる</p>	<p>自信が養成できる</p>
<p>●寒中水泳</p> <p>冬季に海で水をかけたり騎馬戦を行わせる</p>	<p>身体の調子を整える</p>	<p>自信が養成できる</p>

第4節：「正しい根性」に基づく日常生活の中でのトレーニング

前節では、八田が「根性」を醸成するために練習場面において課した「ハード・トレーニング」と「正しい根性」の関係について整理した。他方で八田は、「マットとかフィールドの上だけの練習ではダメなので、日ごろの生活からかえなければいけない」（八田，1965b，p. 25）と述べる通り、「平生の生活，日常の動作も大切だ」（八田，1965a，p. 79）と考えており、実際に選手に対して日常生活における指導も行っていた。そこで本節では、八田の日常生活の中でのトレーニングについて、「正しい根性」との関係から分析する。

第1項：「夢に勝て」

八田は、選手に対して、「つねづね『寝ていて夢に勝て』（八田，1965b，p. 43），そして『日の丸のあがる夢を見よ』（八田，1964，p. 127）と指示していた。八田がこのような指示をした理由は、『おれは絶対だれにも負けないんだ』という自信をもつこと」（八田，1965b，p. 43）で「毎日ぐっすり安心して眠れる」（八田，1965a，p. 57）ようになるという考えがあった。1964年の東京大会で優勝した市口（グレコローマン/バンタム級）は、当時を回想する中でこのトレーニングの効果について、以下の通りに述べている。

自己暗示ですよ。金メダルだけを期待されているから、やっぱり不安や興奮がある。負けないという暗示をかけることで、そういうのがスッと消えて、試合をどう展開するかという感性が出てくるものなんです（読売新聞，2009年5月13日付，朝刊）

さらに市口は、本番直前の夜には、「メインポールに日の丸が揚がって」（読売新聞，2009年5月13日付，朝刊）る夢を見て、「それでググッと気分が盛り上がって」（読売新聞，2009年5月13日付，朝刊）勝利に繋がった，とも述べている。他にも，1965年にマンチェスター（イギリス）で開催された世界選手権において金メダルを獲得した福田富昭は，八田が負けた夢をみた選手がいると聞いて「もう1度寝て，勝ってこい」（読売新聞，2009年3月28日付，朝刊）と指導したエピソードについて語っている。すなわち，「夢に勝て」とは，「安心して眠れる」ようになるという「肉体的メリット」と「自信をもつ」という「精神的メリット」の両面を得られると考えて行われた指導であった。

第2項：睡眠訓練

八田は、選手に対して、「どんな状態でも眠れるように訓練」(八田, 1964, p. 122) した。具体的に八田は、「とにかく、静かにしろというのが一番いけない」(八田, 1964, p. 122) と述べ、「電気をつけっ放しでもいい, ラジオもテレビもガンガン鳴りっ放しでもいい」(八田, 1964, p. 122), さらには「夜中に, 便所に行くときは, 隣りに寝ているやつを, けとばして起こして行け, なるべく音をたてて行け, 二段ベッドになっているから, みんなゆすって行け」(八田, 1964, p. 122) と指示し, 「どんなやかましいところでも眠れるように修業しろ」(八田, 1964, p. 122) と指導をした。また, 「ひどいときには, 夜中に, 起こされ, 冷い水で顔を洗わされて『すぐ寝ろ』」(八田, 1964, p. 123) という指導も行ったという。八田がこのような指導をした理由は, 「夜中に電話をかけて, しょっちゅう起こす, 相手をこういう神経戦で悩まして, 翌日の試合で負かそうと」(八田, 1964, p. 124) する相手への対策や大会の運営上の以下の問題への対策であった^{注36)}。

わたしどもは試合の関係で睡眠を小刻みにとらなくてははいけない, 朝七時に計量があるので, どうしても六時に起きてたくをしなければならない, 試合は, 昼の十一時に始まって三時ごろ終わる, それから晩の六時から十一時, 十二時までやる, 寝るのはひどい時には一時, 二時になる, それで朝六時に起きるのだから, 夜は四時間くらいしか寝られない, だからどうしても昼間, 二度くらいに分けて寝ておかなければならないのだ, (八田, 1965b, pp. 45-46)

ただし八田は, このように試合に向けたコンディションをつくるためだけに, 選手が「どんな悪い環境でも文句をいわずに寝ることができる」(八田, 1964, p. 124) ようになることが必要であると考えていたわけではない。八田は, このような睡眠訓練が選手の「神経を太く」(八田, 1965b, p. 47) し, 「タフな神経を養成する」(八田, 1965a, p. 69) ことにもなると考えていた。前述した福田は, 「どんな環境でも眠るための訓練」(読売新聞, 2009年, 3月27日付, 朝刊) として, 1963(昭和38)年に千駄ヶ谷(東京)で実施した合宿において, 睡眠をとる際に部屋の電灯は一晩中つけたままで, ラジオも鳴りっぱなしという状況だったことや, 「抜き打ちで深夜にたたき起こされて, 顔を洗って, 点呼を取って, 『じゃあ, 寝ろ』と」(読売新聞, 2009年, 3月27日付, 朝刊) 言われたことを回顧している。他にも, 1956年のメルボルンで開催された第16回夏季オリンピック競技大会(以下, メルボルン大会)で優勝した笹原は, 合宿の思い出について, 次のように述べている。

夏、50人ぐらいの選手を合宿所に集めて、電灯をつけっぱなしにし、窓も開けっ放しで寝る。蚊がどんどん来るわけです。全員が同じ部屋にごろ寝。そして夜中にトイレに行く時は、隣に寝ている者をけ飛ばして起こし、大きな音を立てるという約束なんです。（朝日新聞、2004年1月28日付、夕刊）

さらに、市口は、「大会期間中の計量の間、一瞬で眠って休息を取れた」（読売新聞、2009年5月13日付、朝刊）と述べ、このトレーニングの効果を実感したことを述べている。つまり、睡眠訓練は、どんな環境でも寝ることができることでコンディションを調整できるという「肉体」的メリットと、環境的な要因に左右されないタフな精神を養成するという「精神」的メリットの両面を得られると考えて行われた指導であった。

第3項：時間指導

八田は、選手に対して、日常的に「集合時間」（八田、1965a, p. 101）の厳守を徹底させる一方で、「門限だけは自由」（八田、1965a, p. 103）にしていた。八田が、決められた時間の厳守を徹底させたのは、選手が時間の管理をできないと「からだのほうもいざという時にいうことをきいてくれない、試合にも勝てない」（八田、1965a, p. 102）からである。また、「門限だけは自由」にしたのは、選手たちが「自分で考える」（八田、1965a, p. 104）ようになるからである。このような自由の中で考えることは、「自覚を起こさせるチャンス」（八田、1965a, p. 104）になり、さらに「考えること自体が選手自身の血となり肉となる」（八田、1965a, p.104）と考えていた。八田は、このトレーニングに関するエピソードとして、以下のように述べている。

決められた集合時間に遅れた場合の罰則も大変だ。ほかの者の荷物を全部かつがせることにしている。たくさんの荷物をかつがされると、それこそ大変なので、みんな一生懸命に遅れないようにする。コーチ連中もその点、徹底していてまったく“なさけ無用”だ。朝ちょっと寝坊して食事に遅れてもひどい。「あいつは、朝めしが食べたくないのだろう」と推測(?)して、みんなでムシャムシャ食ってしまう。あわてて起きてきても朝めしがいないので昼までガマンせざるをえない。これも寝坊するほうが悪いので文句をいわない。そのうち、みんな寝坊しなくなる・・・(中略)・・・選手を大事

にすることは甘やかすことではない。甘やかしすぎると選手たちはいうことをきかなくなる。(八田, 1965a, pp. 101-102)

つまり、時間指導とは、いざという時に自由に思うようにうごかせる身体をつくるという「肉体」的メリットと、自分で考えて行動する自覚を生むという「精神」的メリットの両面を得られると考えて行われた指導であった。

第4項：イメージトレーニング

八田は、選手に対して、町中で歩いている時に「向こうから歩いてくる人を見ながら足が地面につく瞬間を“今だ”と心の中でとらえ」(八田, 1965a, p. 160) たり、「ベッピンさんがきたら、それをずっと目で追」(八田, 1965a, p. 161) うことが重要であると指導した。八田がこのような指導をした理由は、「足元にとび込むタイミングの練習」(八田, 1965a, p. 160) になると考えたからである。つまり、「人間は、足が地面についた時は、すぐそのほうの足から移動できないものだ、だからその瞬間、タックルをしたら成功率は非常に高い」(八田, 1965a, p. 160) と考えて、日常生活の中でもそのタイミングを習得するイメージを身に付けることが重要と考えていた。さらに、特に「ベッピンさん」を目で追うのは、「美人を見ておれば精神統一の練習ができる」(八田, 1965a, p. 161) と述べる通り、集中力を高めることができると考えていた。1956年のメルボルン大会で優勝した笹原は、このトレーニングについて、以下のように回顧している。

当時は、全生活をレスリングにささげていた。ライバルはソ連、トルコ、米国の三人だったが、彼らを研究し尽くし、歩いていても、食事していても、朝、昼、晩ずっと作戦を考えていた。大会直前には、夢の中の試合をやり、あの手この手で彼らを全部やっつけていた。本番では夢の手を実行するだけでよかったから、もう悟りの心境でしたよ
(朝日新聞, 1984年8月30日付, 朝刊: 強調は筆者による)

つまり、イメージトレーニングとは、対戦相手の「足元にとび込むタイミング」をつかむ「肉体」的メリットと、集中力を高めることができるという「精神」的メリットの両面を得られると考えて行われた指導であった。

第5項：徒歩

八田は、特に海外遠征の際に、選手に対して「絶対にエレベーターは使わせ」（八田，1964，p. 109）ず、「どんな高いところでも歩かせ」（八田，1965a，p. 101）た。八田がこのような指導をした理由は、「それだけ足がきたえられて、強くなる」（八田，1965a，p. 101）からと、「苦しさを乗り越えてきたえられているうちに、レスリングのほうも強くなり、なにくそという気概が生まれてくる」（八田，1965a，p. 101）からであった。八田はこのトレーニングについて、以下のように述べている。

クツがちびるからプラスマイナスゼロというかもしれない。それだけからだを使い、運動になるということはプラスだ。第一、若いうちからからだを使うことをケチケチしてはいけな。ホテルにはいっても、エレベーターにはいっさい乗せないというのもレスリングの習慣だ。時々うっかりしてエレベーターに乗っていて見つかると、下までおりて、もう一度今度はカケ足で階段をあがらされる。・・・(中略)・・・きたえ、すこしでも強くなるというチャンスがあるのに、それを利用しない手はない。（八田，1965a，p. 101）

つまり、日常的にエレベーターを使わずに歩かせることは、足の筋力がつくという「肉体」的メリットと、「なにくそという気概」が生まれるという「精神」的メリットの両面を得られると考えて行われた指導であった。

第6項：「左右平均論」

前述の通り、八田は、練習場面において左右に偏りなくトレーニングを行う「左右平均論」を重視していたが、日常場面においても同様に、選手に「右利きのものには、みな左でやらせる」（八田，1964，p. 133）ように指示をした。具体的には、「お尻まで左手でふ」（八田，1964，p. 133）かせたり、「食事をするにも、歯を磨くのにみんな左右平均」（八田，1964，p. 133）に行わせるように指導した。八田がこのような指導をした理由は、「左手の日常生活を、二年くらいやらせると、マットの上でも、全く右、左、同じように使えるようになる」（八田，1964，pp. 133-134）からであった。先述した福田は、このトレーニングについて、実際に八田から受けた「右利きは左で箸を使え」（読売新聞，2018年11月15日付，朝刊）という指導の意図を「日常生活から左右両方を使えるようにすることで、両方からの攻撃技

を磨くこと」(読売新聞, 2018年11月15日付, 朝刊)であったと述べている。

つまり, 前述した通り, 攻撃力を向上させるという「肉体」的メリットと, 防御の場面において自らの苦手意識を消滅させるという「精神」的メリットが得られる「左右平均論」を日常生活場面においても徹底させようとしたのである。

第7項：禁酒禁煙

八田は, 選手に対して, 「タバコ吸うヤツはクズだ」(八田, 1965a, p. 92)といい, 「禁酒禁煙」(八田, 1965a, p. 92)を求めた, 八田がこのような指導をした理由は, 酒を飲んだりタバコを吸うことが一般的に健康を害したりスポーツのパフォーマンスを下げるだけでなく, 「飲みたいというのをがまんする, その意志の力がたいせつだから」(八田, 1964, p. 116)であり, 「飲みたい, 吸いたいという欲望を, 完全に意志の力で征服することができれば, 試合に出たとき, 自分は絶対にあがらない, 絶対に大丈夫だ, という自信が出てくる」(八田, 1964, pp. 116-117)と考えたからである。つまり, 禁酒禁煙は, 自分の身体をより良い状態に保つという「肉体」的メリットと, 「意志の力」を養成できるという「精神」的メリットの両面を得られると考えて行われた指導であった。

第8項：日常生活の中でのトレーニングと「正しい根性」の関係

本節では, レスリング指導者としての八田が「真の実力を養うために」選手たちに課した日常生活における「トレーニング」の意図を「肉体の力と精神力」という観点から分析を行った。すなわち, 八田は, 選手たちが「トレーニング」を実践することでどのような肉体的メリットと精神的メリットを得られると考えたのかを検討した。結果は表44の通りである。

表 44：日常生活におけるトレーニングの肉体的メリットと精神的メリット

「トレーニング」の名称と内容	「肉体」的メリット	「精神」的メリット
<ul style="list-style-type: none"> ●「夢に勝て」 睡眠中に夢の中でレスリングをして勝利しろと指導した	常に体調を万全な状態にできる	自信がつく
<ul style="list-style-type: none"> ●睡眠練習 どんな状況でも眠れるように厳しい環境で寝させる	どのような状況でもコンディションの調整が可能になる	神経が強くなる
<ul style="list-style-type: none"> ●時間指導 集合時間の厳守及び寝坊の厳禁を徹底し、門限のみ自由にする	どのような状況でもコンディションを整えることができる	自分で考えるようになる
<ul style="list-style-type: none"> ●イメージトレーニング 町ですれ違う人を相手と想定してタックルに入るタイミングをイメージしたり、きれいな女性を目で追いかける	タックルのタイミングを掴めるようになる	精神統一できるようになる
<ul style="list-style-type: none"> ●徒歩 エレベーターは使わずどこでも歩かせる	足の筋肉が鍛えられる	反骨心が生まれる
<ul style="list-style-type: none"> ●左右平均論 左右で偏らないように過ごさせる	選手たちの攻撃力を向上できる	苦手意識をなくすことができる
<ul style="list-style-type: none"> ●禁酒禁煙 禁酒禁煙を要求させる	身体の調子を整える	「意志の力」を養成できる

つまり、八田の日常生活の「トレーニング」とは、実践する選手たちが「肉体」的メリッ

トおよび「精神」的メリットを偏りなく享受できるという考えから導き出されたものであることが明らかになった。前節と本節の分析を踏まえれば、本章の第 2 節で仮説的に示した通り、八田の「根性」が「肉体の力と精神力」を有する状態を意味することを示唆しているといえるだろう^{注37)}。

ただし、こうした八田による一連の「トレーニング」について、当時、「(八田による：筆者加筆) 鍛錬の猛烈さは鬼の大松に劣らぬが、それ以上にその方法が前近代的かつ非合理的である。“いつでもどこでも寝られる鍛錬” など人権無視、近代スポーツとは縁遠い話で、一事が万事インテリには悪評サクサクである」(読売新聞、1964年10月15日付、夕刊：強調は筆者による) という指摘があり、また、「トレーニング」を課した八田に対しては「人呼んで『ハッター朗』」(読売新聞、1964年10月15日付、夕刊) という揶揄も存在していたことから、八田の「正しい根性」が実際に正しいものであったと断言することはできない。前節と本節における分析は、あくまで、八田の主張する「正しい根性」をもとに八田が実際に課した「トレーニング」を対象に行ったものである。

第5節：第3章のまとめ

本章では、1960年代のレスリングの確立期における受容過程を、八田の視点から明らかにすることを目的とした。

この時期は、1964年の東京大会に向けた体制が整えられていった。特に、選手強化本部が体協の中の日本オリンピック委員会の中に作られ、選手強化のための各競技団体等との連携体制が図られた。このような「東京オリンピック体制」に基づいて、目指された強化の方向性が「根性づくり」である。そこでは、「あがり」のメカニズムの解明等、精神的な側面の研究が進められ、それらは各競技の指導者に受け入れられていった。

このような状況で八田は、「正しい根性」という理念を掲げた。ただしこの理念は、東京オリンピック体制下において流行した「根性」とは異なる。八田は、当時流行した「根性」が精神力ばかりを強調しており、対戦相手に応じた戦術をたてる等の勝利のために必要なことをしない「非合理的」な姿勢を批判した。そして、勝利のために必要な肉体と精神の両面を有した「真の実力」(=根性)を身につける必要があると考えた。そして実際に、八田が選手に課したライオンとにらめっこや目かくしの練習等の「ハード・トレーニング」や日常生活場面におけるトレーニングは、肉体と精神の両面を合理的に鍛える意図があった。

【注】

注 34) 東京大会を背景に「根性」という言葉が流行し、「根性」が「競技者の精神的基調として養成・強化の対象とされ」（岡部ほか，2012，p.140），また，東京大会での「勝利という目標達成のために精神を集中し，困難に屈せず継続する強固な意志のこととされ，その養成には，ハードトレーニングといわれる猛練習が重視され」（岡部ほか，2012，p.140）た。さらに，「オリンピック選手を指導した指導者たちが独自の根性論を展開し，東京オリンピック以降の根性の流行を後押しした」（岡部ほか，2012，p. 137）。

注 35) この資料は，1964年の東京オリンピック大会を契機に，八田が「根性」を喧伝するために揮毫したものであると推察される。旧八田邸から所収した写真資料には，図 37 の通り，八田が「根性」という文字を大量の色紙に筆耕している様子が収められている。また，図 38，図 39，図 40 の通り，1965年7月に行われた第7回参議院議員通常選挙に，「政治に正しい『根性』を！」というスローガンを掲げて立候補した。さらに，図 41，図 42 のとおり，「八田一朗根性会」を創設した。



図 37：八田一朗が「根性」を揮毫する時の写真



図 38：八田一朗の「根性」を用いて選挙活動を行った時の写真①



図 39 : 八田一朗の「根性」を用いて選挙活動を行った時の写真②



図 40 : 八田一朗の「根性」を用いて選挙活動を行った時に使用した旗



図 41 : 「八田一朗の根性会」のパフレット①



図 42 : 「八田一朗の根性会」のパンフレット②

注 36) 八田の睡眠指導については、他にも、次のような記述がある。『剃るぞ!』(1965a)において八田は、選手たちが、「どこへでも、たとえゴロ寝でもできるように」(八田, 1965a, p. 69) なる為に、「カがブンブンとんでいてもカヤをつらない、カヤがなければ敷布をかぶって寝ろと」(八田, 1965a, p. 69) 指導していたと述べている。また、「広い体育館の真中にマットをおいて、その上で寝させたこともある、便所に行く時には、わざとドをバタンと音をさせる」(八田, 1965a, p. 69) という。さらには、「電燈をこうこうとつけて、その下で眠らせることもある、真夜中にわざとたたき起こして顔を洗わせ、また寝させたり、ある時はすぐマラソンさせた」(八田, 1965a, pp. 69-70) という。そして最後に、「平生の生活で弱いヤツが試合に勝てるはずがない」(八田, 1965a, p. 70) と述べている。

また、『勝負根性』(1965b)において八田は、選手たちが、「ふだんからどんなところでも寝られるように訓練しておくのだ」(八田, 1965b, p. 46) と述べた上で、次のような指導をしたと述べている。「ラジオはつけっ放し、テレビもつけっ放し」(八田, 1965b, p. 46) に「便所に行くときにはなるべくドタバタして、ほかのやつが二段ベッドに寝ているからゆすっていけ」(八田, 1965b, p. 46) という、「ひどいときには夜中に起こして『顔を洗ってこい』といって顔を洗わせて、すぐまた『寝ろ』」(八田, 1965b, p. 46) と指示したという。こうした指導に対し「けっして文句をいわないくらい寝るといふことには訓練した」(八田, 1965b, p. 46) と述べる、

注 37) 本章では、上述した八田の批判に基づいて導出された「正しい根性」という理念の内実を検討するために、八田の課した「トレーニング」を「肉体」的メリットおよび

「精神」的メリットの2つの視点から検討した結果を示した。しかし、当然ながら、八田が課した「トレーニング」の中には、「肉体」的メリット、もしくは「精神」的メリットのみならずの享受を意図した次のトレーニングも確認できた。例えば、「剃るぞ！」（八田，1965a，p. 23）というトレーニングでは、実際に選手の体毛（毛髪や陰毛）を剃らせ、精神的苦痛を与えることで同じ過ちを犯さないようにしていた（八田，1965a，pp. 23-50）。また、レスリングの大会では、競技会当日の早朝に計量が行われ、排泄を済ませておくことで計量に有利になることから、日常的に早朝に排便をさせるというトレーニングも課していた（八田，1965b，pp. 30-31）。

【引用参考文献】

- 朝日新聞 (1962) 6月24日付. 夕刊.
- 朝日新聞 (1962) 6月27日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (1962) 6月28日付. 夕刊.
- 朝日新聞 (1964) 10月14日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (1964) 10月15日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (1964) 10月20日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (1984) 8月30日付. 朝刊.
- 朝日新聞 (2004) 1月28日付. 夕刊.
- 大松博文 (1963) おれについてこい!. 講談社, p. 104.
- 八田一朗 (1964) わが道を行く: 人生を勝ち抜く八田イズム. ベースボール・マガジン社.
- 八田一朗 (1965a) 剃るぞ!. 講談社.
- 八田一朗 (1965b) 勝負根性. 実業之日本社.
- 報知新聞 (1964) 8月13日付. 朝刊.
- 日本オリンピック委員会 (online) Home: 大会: オリンピック: 大会別日本代表選手入賞者一覧. <https://www.joc.or.jp/games/olympic/winnerslist/>, (参照日 2021年6月5日).
- 日本レスリング協会 (online) ホーム: 歴代記録. <https://www.japan-wrestling.jp/pastresults/>, (参照日 2021年4月2日).
- 日本レスリング協会 80年史編纂委員会編 (2012) 財団法人日本レスリング協会 80年史: 1932-2012. 日本レスリング協会.
- 日本体育協会・東京オリンピック選手強化対策本部 (1962a) (座談会) いわゆる「根性」について—その1—. OLYMPIA. 3 (3): 2-10.
- 日本体育協会・東京オリンピック選手強化対策本部 (1962b) (座談会) いわゆる「根性」について—その2—. OLYMPIA. 3 (4): 22-32.
- 岡部祐介・友添秀則・春日芳美 (2012) 1960年代における「根性」の変容に関する一考察: 東京オリンピックが果たした役割に着目して. 体育学研究, 57: 129-142.
- 太田哲男 (1968) スポーツと根性. 体育科教育, 16 (6): 44-45.
- 関春南 (1997) 戦後日本のスポーツ政策: その構造と展開. 大修館書店.
- スポーツ科学研究委員会編 (1965) 東京オリンピックスポーツ科学研究報告. 日本体育協会, p. 22.

- 内海和雄（1993）戦後スポーツ体制の確立．不昧堂出版．
- 山岸俊男（1979）根性主義：「おれについてこい！」の内容分析．一橋論叢，81（2）：181-197．
- 山地啓司（2015）インターバルトレーニング．中村敏雄ほか編，21世紀スポーツ大辞典．大修館書店：東京，p. 312．
- 読売新聞（1960）7月27日付．夕刊．
- 読売新聞（1962）8月3日付．朝刊．
- 読売新聞（1964）10月15日付，夕刊．
- 読売新聞（1965）3月3日付．朝刊．
- 読売新聞（2009）3月27日付．朝刊．
- 読売新聞（2009）3月28日付．朝刊．
- 読売新聞（2009）5月13日付．朝刊．
- 読売新聞（2018）11月15日付．朝刊．

結章

最後に、これまでの各章の結論を元に、本研究から得られる示唆について整理し、今後の研究の方向性を示す。

第1節：日本におけるレスリングの受容過程における八田一朗の貢献と課題

本研究の1つ目の課題は、日本におけるレスリングの受容過程を通時的に検討することであった。そこで本研究では、本研究の関心と先行研究を元に日本におけるレスリングの受容過程を草創期（1930年代-終戦）、戦後復興期（終戦-1950年代）、確立期（1960年代）の3期に区分して、全ての時期において日本のレスリングの受容に大きな影響を及ぼした八田の理念と実践を検討してきた。これらの結果から、以下の通り、八田が外来文化としてのレスリングの日本への移入及び定着に貢献したと考えられる。まず、日本におけるレスリングの移入は、1931（昭和6）年に、アメリカ遠征でレスリングと出会いその強さを目の当たりにした早大柔道部の部員が早大レスリング部を創設し活動を始めたことを契機にしている。このようなレスリングを移入した早大柔道部の一員が八田であり、その後の早大レスリング部の運営において重要な役割を果たした。さらに八田は、単に早大レスリング部で活動を行っただけでなく、欧州遠征を行い積極的に国際大会に参加しながら国際ルールに関する情報収集を行ったり、日本人選手に適した階級の導入を提案する等、日本におけるレスリングの移入とともにレスリングを日本人に適した形に変革しようと試みた。特に、八田の貢献としては、国際大会への積極的な参加と日本人選手への不利な判定への批判を元に、国内組織を作り国際レスリング連盟に登録したり、国際レスリング連盟との交流を継続的に行い関係構築に努めた点が挙げられる。このような取り組みは、国際大会における日本人選手に対する公平な採点の実現につながるだけでなく、戦後の国際レスリング連盟への早期復帰とレスリングの再開につながったと考えられる。また、日本人選手が勝つために、日本の独自のルールを作るのではなく、日本人の身体的特性を生かした国際大会でも通用するルールや技術を探求したことも八田の貢献である。八田は、ヘルシンキ大会やベルリン大会への反省を元に、日本人に適するフライ級を設定する等の日本式ルールの提案を行った。さらに、技術の習得についても、日本人に必要なグランドポジションに関する技術習得の必要性を主張したり、戦後に柔道家の転向を積極的に受け入れて柔道とレスリングの接合点を模索した。その結果、元柔道家であったレスリングの日本人選手（石井庄八）が戦後初の金メダルを獲得する等、メダリストを多数輩出することにつながった。さらに確立期に東京オリンピック体制が整えられていく中で、「根性づくり」と銘打った精神主義に傾倒する指導を批判し、勝利のために必要な肉体と精神の両面を有した「真の実力」（=根性）を身につける必要があると考えて、実際に練習場面や日常生活場面におけるトレーニングを考案し、東京大会における金メダルの獲得につながっていった。このように八田の実践は、外来文化とし

でのレスリングというスポーツが日本で定着するうえで、重要な取り組みであったと考えられる。

ある社会に異文化が移入される際に、文化を受容する担い手によってその当該社会の価値観に一度読み替えられて異文化が受容されるという考え方を「翻訳的適応」(前川, 2002, p. 180) という。また、当該社会と異文化が接触する境界線において新たな文化が創出されていくという考え方を「文化接合」(前川, 2002, p. 102) という。両者是对立的な概念というよりも、ある社会が異文化と接触する時に起こりうる反応と捉えられる。つまり、「翻訳的適応」は文化を受容する担い手が自国内の文化要素をもとに読み替えようとする担い手の態度であり、「文化接合」はある社会が異文化と接触し、その結果、異文化にとって元々なかったものが生じるという意味で当該社会において新たな文化への変容が生じるといった状態を示すものと考えられる。ここで着目すべきは、「翻訳的適応」や「文化接合」において、当該社会と異文化とを媒介する存在による働きかけが、移入された文化の変容や定着に大きく影響するという点であり、このような存在を「ミドルマン」(前川, 2002, p. 188) という。日本における外来文化としてのスポーツの受容過程として、例えば、野球では戦前の旧制第一高等学校の学生たちがミドルマンとなり、精神修養の手段としてスポーツを遊戯ではなく武道であると捉え、武士道野球となったことが指摘されている(有山, 1997)。つまり、*Baseball* という異文化の受容過程において、担い手による自国内の文化要素への読み替えがなされていたことを示しており、このような読み替えは、精神修養に重きをおく日本における武士道野球という新たな文化の生成と理解することができる。そして、このような視点から八田の理念や実践をみると、八田はレスリングを武道や武士道といった日本的な文化要素へ積極的に読み替えることよりも、決められた規則による公平性の担保や、勝敗の規定といった近代スポーツの価値観を重視してレスリングを日本に移入しようとした。また、八田は外来文化であるレスリングをそのまま移入するだけでなく、国際レスリング連盟と関係を構築することや、階級制という枠組みに新たな体重区分の提案といった形で国際的なルールそのものへ結果的に影響を及ぼす等の、異文化側への働きかけも見受けられた。前川(2002)は、資本主義のような包摂的でより大きな社会システムの影響を受ける伝統社会の変容を考える際に、伝統社会と包摂的な社会システムの間に立つミドルマンは「伝統社会の他の成員より、そうした包摂的な社会の原理に適応しながら、一方で包摂的な社会の要因を伝統社会の制度や組織になじませ適応させることを促進するエイジェント」(前川, 2002, p. 189) であると述べている。つまり、ミドルマンとしての八田の理念と実践には、

自国の異文化理解を促すだけでなく、異文化側への変革の働きかけも含まれていた。以上のことを総括すると、ミドルマンとしての八田の理念と実践は、外来文化としてのレスリングというスポーツが日本に定着することに資するものであったといえよう。

ただし、上記の通り本研究で八田の視点から描いた日本におけるレスリングの受容過程が歴史的に唯一のレスリングの受容過程を示しているわけではない。つまり、本研究で検討してきた八田の理念や実践がそのまま日本のレスリングにおいて具現化されたわけではない。というのも、以下に示す通り、八田に対する批判も存在するからである。

草創期に関しては、八田がレスリングと柔道を混同せずにそれぞれ独自の強化方法を考える必要がある、と強く確信した契機となった第1回全日本選手権での早大レスリング部の風間が講道館所属の矢田部を倒した件について、後に矢田部を中心に発足した専修大学レスリング部の記念誌では、以下のように述べられている^{注37)}。

この試合について石井勝郎（専修大学レスリング部：筆者加筆）は「二人の試合は全く甲乙つけ難いものだった。どちらが判定勝ちになっても文句のつけようがないもので、審判が早大系だったのが風間に幸いした」と語っている（専修大学体育会レスリング部OB会，1984，p. 23）

矢田部・風間戦について、専大レスリング部の生みの親である大西等は、「試合直後、八田が私に一席設けて“風間が矢田部に勝ったとは断言できないだろう。全く互角だ。しかし今レスリングを体協の中核的存在とするには、レスリングに社会的関心と呼び起こす必要がある。そのために一人の英雄を育てる必要がある”と、相撲の例をひいて私に理解を求めた」と証言している。（専修大学体育会レスリング部OB会，1984，p. 23）

ここから、審判が早大レスリング部の出身であったことから風間に有利な判定が行われた可能性があり、八田の意図が介在していた可能性も考えられる。このような批判から、八田や早稲田大学に対する他大学の反発というものが見受けられ、八田の理念や実践が必ずしも日本における全てのレスリング選手に受け入れられていたわけではなかった可能性が推察される。また、戦前、戦後を通して八田が積極的に行った組織運営についても、以下のような批判があった。

戦前に全日本アマチュアレスリング協会を結成し、協会の生みの親を自認する八田は、理事の選任もほとんど会長指名で決めるなど独断専行の傾向が強く、ヘルシンキ五輪金メダル獲得で意気上がる折から、そのワンマンぶりが次第に昂じ、協会内部でも批判意見が強まっていた。その動きはトルコ遠征前からあり、八田自身も「協会に不穏な動きがあるらしいね」と漏らしていた。(専修大学体育会レスリング部 OB 会, 1984, p. 56)

話合いは何度も持たれ、九月二十八日、菊間・水谷・畠山三監督の連名で「協会の民主的運営のため、八田会長の辞任を求める」との声明を発表した。しかし八田はただちにこれに対抗、新役員を任命して逆に三人を理事から締め出した。(専修大学体育会レスリング部 OB 会, 1984, p. 56)

このような八田を排斥する動きについては、他にも以下の指摘がある。

明治大学レスリング部は、全日本選手権大会や大学リーグ戦を通じ、常に早大レスリング部を宿敵視してきたが、先人の語るところによれば、草創時の八田一朗と明・慶・専3大学との間にあった確執が「反・八田」へのシュプレヒコールとなり、“打倒早大”に転嫁されたということのようだ。(明治大学レスリング部 70 年史編集委員会編, 2003, p. 56)

それまではレスリング界を牛耳る諸悪の根元みたいに言われており、特にわが明治大学との古い因縁からか、反八田の知識のみであった。普段あまりレスリングに関係のない人が突然海外遠征の役員になったり、予選会での優勝者ではない他の選手を代表にしたりと、ワンマン会長の名にふさわしかった。(明治大学レスリング部 70 年史編集委員会編, 2003, p. 166)

もちろんこれらの批判が全て妥当であるかどうかは別途検証が必要だが、当時から八田に対して批判的な評価を下していた人物がいたことは事実である。そのため、八田と決裂した庄司等の八田に対して批判的だった人物の視点から日本におけるレスリングの受容過程

を描くことで、レスリング史の多様性の記述が可能となろう。今後の課題としたい。

第2節：八田一朝によるレスリングの日本的受容のズレと課題

本研究の二点目の課題は、「外来文化としてのスポーツの受容」という視点から、日本におけるレスリングの受容過程の担い手である八田が精神主義といかに異なるスポーツ観を有していたのか、を検討することであった。この点について、八田の理念や実践を整理すると、戦前の草創期には、「正統」なレスリングという理念の元で外来文化としてのレスリングを日本における類似するスポーツと同一視して解釈せずに、あくまでレスリングをそのまま移入することを目指した。さらに、戦後復興期においては、柔道の禁止に伴う柔道家のレスリングへの転向という事態を背景に、「裸の柔道」という理念の元で、レスリングと柔道の接合を目指した。このようなレスリングの受容過程における、外来文化としてのレスリングの日本的な解釈の拒否という八田の態度は、日本における外来文化としてのスポーツの受容として独自である。というのも、先行研究では、日本におけるスポーツの受容過程の一端として、教育の観点の重視によって遂げられた、スポーツの日本化の内実が検討されてきたからである。つまり、他のスポーツが、日本への受容過程において日本語化されたり日本人の精神性に合う形に変化させられたりしているからである。このようなズレは、確立期の1960年代の東京オリンピック体制下の「精神主義」化の拒否という点にも表れている。八田は、「竹やり根性」や「負け犬根性」という用語で、当時の精神主義化した「根性づくり」を批判し、精神と身体の合理的な結びついた「正しい根性」の育成を志向し、自ら考案したトレーニングを課していった。このような八田の独自性は、合理的スポーツ観と表現することが可能であり、日本人のスポーツ観の特徴とされる精神主義とは異なる同時代的差異の一端であると考えられる。

では、このようなズレは、なぜ生じたのであろうか。この点については、八田が教育の観点よりも、競技の観点を重視したということが要因として挙げられる。日本における「外来文化としてのスポーツの受容」においては、スポーツの日本化が図られた動機として、教育の観点の重視という特徴があった。そのため、教育の観点を重視していくことが、外来文化としてのスポーツの日本化を推進することを踏まえると、日本化を遂げなかったというレスリングの受容は、レスリングが学校を経由して受容されつつも、それを主導した八田が競技の観点を重視したことで生じた可能性がある。そして、このような八田の精神性やそれに基づくレスリングの受容過程は、日本における外来文化としてのスポーツの多様な受容過程の存在を示唆している。この点については、精神主義とのズレを分析視点として、日本における他のスポーツ種目の受容過程の検討を進めていくことが必要である。

【注】

注 38) 風間と矢田部の試合については、「明治大学レスリング部 70 年史」においても、以下のように述べられている。

長い間のレスリングの柔道との拮抗は、レスリングの勝利となって決着した。後に矢田部は、専修大学レスリング部の初代主将として活躍した。しかしこれには後日談があり、専修大学の部員である石井勝郎、石黒清三らは柔道 4 段であり、講道館系統であったため、矢田部の勝利と言い張った。事実、レスリング出身の風間と柔道の矢田部の一戦は、政治的な判定であった事が判然としている。八田は専大幹部に一席設け、「レスリングに社会的関心と呼び起こすには、一人のヒーローを育てる必要がある」と言った。八田の政治手腕の一面であった。(明治大学レスリング部 70 年史編集委員会編, 2003, p. 38)

【引用参考文献】

- 有山輝雄（1997）甲子園野球と日本人：メディアの作ったイベント．吉川弘文館．
- 専修大学体育会レスリング部 OB 会（1984）風の詩：専修大学体育会レスリング部五十年史．専修大学体育会レスリング部 OB 会．
- 明治大学レスリング部 70 年史編集委員会編（2003）明治大学レスリング部 70 年史．明治大学体育会レスリング部 OB 会．
- 前川啓治（2002）翻訳的適応．綾部恒雄編，文化人類学最新術語 100．弘文堂，p. 180．
- 前川啓治（2002）接合（節合）．綾部恒雄編，文化人類学最新術語 100．弘文堂，p. 102．
- 前川啓治（2002）ミドルマン．綾部恒雄編，文化人類学最新術語 100．弘文堂，pp. 188-189．

謝辞

本論文は、筆者が早稲田大学大学院スポーツ科学研究科に入学した2009年から、凡そ12年をかけて行った研究を集大成としてまとめたものである。これだけの時間を要したのは、不勉強であるが故だが、2012年に罹患し、2013年に再発した、急性白血病の治療に多くの時間を要したからであると認識している。そして今般、博士学位の申請を行うことができたのは、この病を根治し、以下に述べる通り、多くの方々からの物心両面にわたる支援があったからでもある。

まず、研究指導をいただいた川島浩平先生には深く感謝申し上げたい。スポーツ人類学・スポーツ史の立場から、多くの示唆に富んだご指摘、ご批判をいただき、研究の精度を向上させることができた。また、土屋純先生、中澤篤史先生、小野雄大先生には、最終提出に至るまで、鋭い視点からのコメントを賜り、記述内容に厚みをもたせることがきたと考えている。そして、早稲田大学在籍期間中、筆者に関わってくださったすべての先生方に謝意を表したい。本論文において、先生方からのご指摘のすべてに応えられたとは、決して言えないが、今後、研究を継続させていく中で示していくつもりである。

次に、本論文の作成にあたり、膨大な資料を提供してくださった、八田忠朗様に感謝申し上げたい。同氏からの資料の提供がなければ、本論文を執筆しえなかったと断言できる。また、八田一朗に関する調査では、講道館図書資料部長の故村田直樹様、広昌寺（石川県金沢市）住職の三輪哲夫様からの協力を得た。そして、インタビュー調査にご協力いただいた、故永里高平様、故白石剛達様、故野島明生様にも感謝申し上げたい。こうした資料の整理にあたっては、福岡大学の黒崎辰馬先生、寺田光輝先生、朝野新菜先生、伊藤奨先生、木浪龍太郎先生に協力を得た。感謝申し上げたい。

そして、上述した病の治療にあたっては、慶應義塾大学医学部血液内科の岡本真一郎先生、加藤淳先生、松木絵里先生をはじめ、多くの医療スタッフの方々に支援をいただいた。また、造血幹細胞移植に際して、臍帯血を提供してくださった「近畿地方の方」（移植コーディネーターによる）、そして、移植をコーディネートし、実際にそれを新幹線で受け取りにいったくださった山中里美様にこの場をお借りして感謝申し上げたい。

最後に、上述したすべてのことを共有し、そして今日に至るまで、喜怒哀楽をともにし、支えてくれた妻リンドーに謝意を伝えたい。

2022年1月

長島和幸